517-314
1200800030740

다13 ㅅ18

1926 出版 年鑑

517
314

文學博士　金澤庄三郎編纂（最新刊）

廣辭林

定價金四圓八十錢
（送料書留廿七錢）

三省堂式新形・高級クロース製
縱六寸七分・横三寸六分
頁數　千八百十餘頁

内容見本進呈

特色

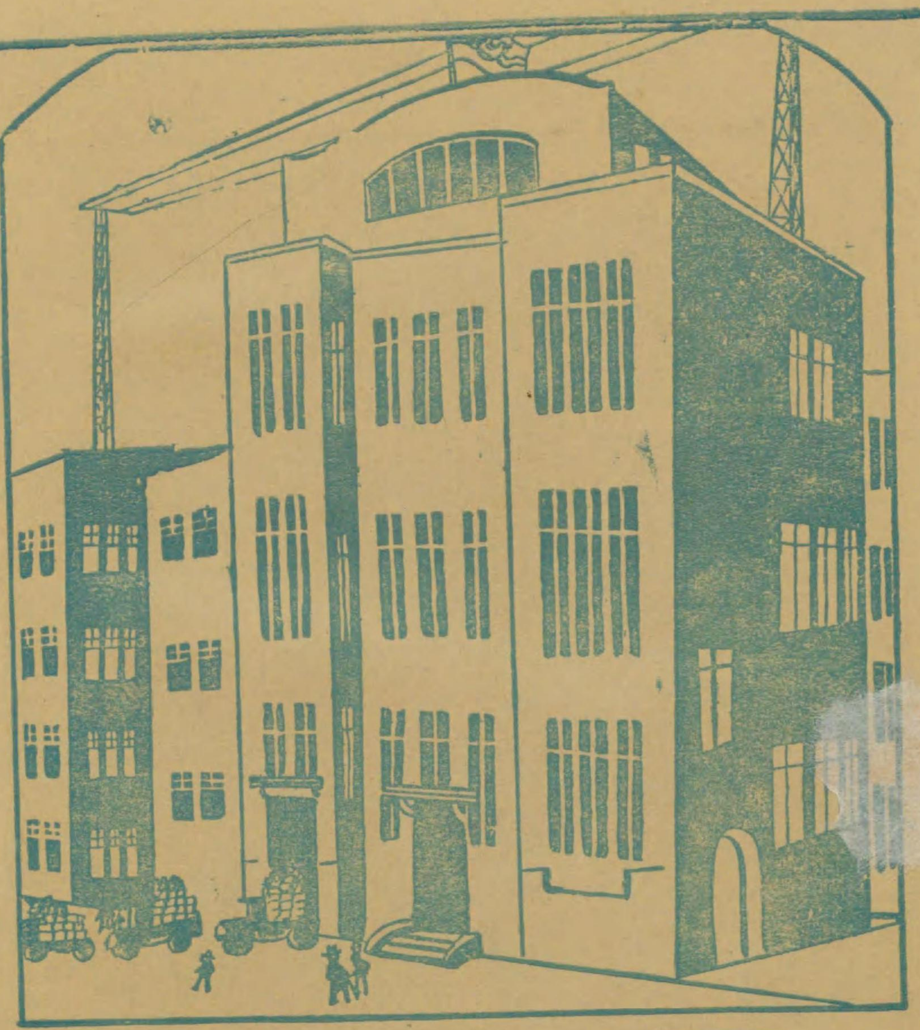
◈漢字音の假名遣を盡く音通りに改めて排列してあるから引きよい、例へばシャウ・セウ・セフ・ショウは悉くショウで引ける。

◈在來の語に加ふるに最新の外來語・俗語・流行語・新聞用語等を悉く網羅して、正確な譯語と豐富な引例とを與へてある。

◈巧妙なる編輯法と、熟練せる組方とに依て、十一萬數千語の多數を收容し、精緻なる挿繪二千數十個で說明が補つてある。

◈印刷は最新式寫眞凸版によつたから、細字の微に至るまで鮮明、製本は經費を惜まず努力したから永久に堅牢である。

東京大手町
株式會社　三省堂
振替東京三一五五五



朝刊　夕刊

新愛知

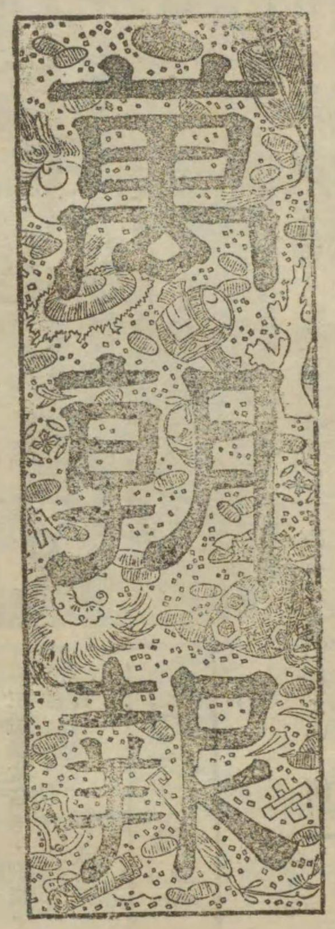
―躍飛大の年本―

●宏莊なる社屋の新築……

●精鋭なる高速度輪轉機の付據

名古屋市　西區本町　新愛知新聞社

讀むで爲になる新聞!!
見ておもしろい新聞!!



東京市京橋區弓町二十一番地
電話 銀座 五二〇〇・五二一〇一・五二一〇二 五二〇三・五二一〇四・五二一〇五 五二〇六・五二一〇七・五二一〇八

斯界の寶典

動物學研究者の新寶典各學校圖書館の必備書

奈良女子高等師範學校教授理學士 惠利惠先生著

動物學精義

△四六倍判春皮函入 △挿繪五百數十個 △紙數五二〇頁 △定價金十圓也 △郵税金卅四錢

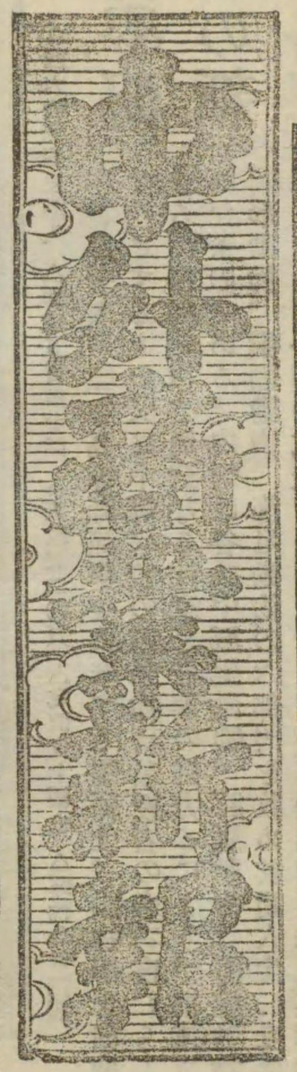
本書は著者が職を高等師範學校に奉する關係上、動物學を研究せんとするもの又は中等學校の等動物科教授者の參考書たらしむるの目的を以て周到なる注意と最善の努力とにより、編述されたものである。内容は各論中原生動物、腔腸動物、海綿動物蠕形動物、環節動物、節足動物の六部門を收め其間人生に交渉深きもの、各種の代表ともいふべきものについては殊に其構造と生活とを詳細に記述し、研究し、研究者の實驗觀察上に良指導者たらんことを努めてある。なほ本書の異彩とする所は從來の系統的動物學書に加ふるに實驗指導書とを併合したる如き感あることで更に用語は極めて平易に、術語下に出來るだけ原語を付し、外國語の動物學書を讀まるゝ人の準備書として都合よく出來てゐる。

東京・京橋 南傳馬町 目黑書店發行 振替東京 二八〇九

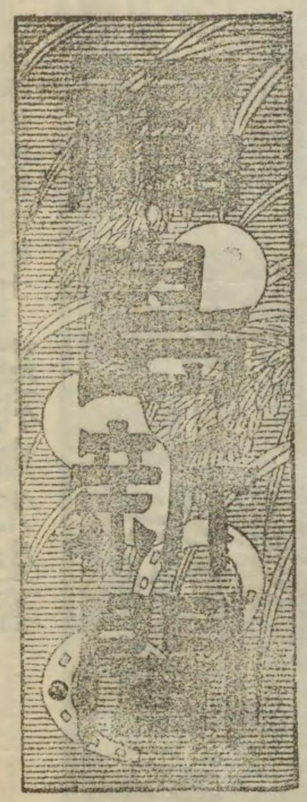
中外商業新報社經營の三新聞

夕刊

朝刊



朝刊



夕刊

わが社が有つ専用電話は三紙を通じて最も活用せられ紙面は常に生氣發溌

最新刊

世界文明史物語

坪内逍遙博士推薦
前田晁全譯
ヘンドリック・ヴァン・ルーン著

美麗な彩色繪三十枚、挿畫百箇
繪で出來た世界年表、便利な索引

理想的美本
破天荒廉價

菊判七百十頁
定價四圓八拾錢
郵稅拾六錢

世界にただ一つ

▼小說よりも面白い人間發達史▲

▼驚くべき魅力を以て世界を風靡しつゝある現代第一の名著 ▼あらゆる階級あらゆる職業の人々に適當せる萬人の教科書 ▼坪内博士があゝこれこそだ！と激賞された斬新な歷史讀本 ▼文明の誕生以來五千年に涉つた我等が祖先の苦鬪の血涙史 ▼讀み易く分り易く記憶し易く、原著者自筆の功妙な挿畫滿載 ▼世界各國の風俗習慣や、大事件を一目で知らせる一大畫報 ▼小學上級生、中學生、女學生の此上なく喜ぶ理想的課外讀本

東京牛込 早稻田大學出版部發行 振替東京一一二三 大阪六八九〇〇

◎每號總督府々報　臺北州報臺北市報を附錄として添ふ

◎無休刊新式輪轉機三臺使用每號八頁乃至十頁二版刷朝刊、夕刊、發行

臺灣日日新報

◎南支及南洋に通信機關を有し報道迅速

◎新聞發行の外圖書の出版販賣各種の印刷、寫眞及印刷機械材料運動用品、理化科學機械の販賣並に代辯業を兼營す

臺北市榮町四丁目三十二番地
株式會社臺灣日日新報社
電話 三五、五四、一三五、一三六、一〇四八、二一〇〇、二六七、五〇一、八二一、一五四八、一〇四四、一五〇三、一五四七、二九三番
振替口座臺灣一〇番

臺中市寶町
同 臺中支局
電話 一〇七番

臺南市錦町二丁目七十七番地
同 臺南支局
電話 二〇番
振替口座臺灣二〇番

東京市京橋區銀座一丁目九番地
同 東京支局
電話銀座四六九一番
振替口座二六〇二番

大阪市西區京町堀通四丁目六番地
同 大阪支局
電話(長)土佐堀七四二番
振替口座大阪四三三五番

電通

新聞通信及廣告代理業として世界的に知られたる大通信社

內外支局

大阪、名古屋、京都、神戸、岡山、廣島、下關、門司、福岡、佐世保、長崎、佐賀、大分、金澤、長野、仙臺、青森、函館、京城、釜山、大連、奉天、臺北、北京、上海、天津、漢口、廣東、青島、紐育、倫敦

私設專用電話(東京福岡間)

電話
同 二九一七
同 二三八二
同 三三三七
同 三〇〇九
同 三四〇五
同 三七〇三
同 三四〇四
同 三六九二
同 三〇〇〇
牛込 五七〇〇
牛込 五七九〇
同 寄山 三七〇一
專用電話 三一番 二一〇一
四番 二八〇〇

東京丸之內
日本電報通信社
振替貯金口座東京一四四三番

官報並に諸新聞の

廣告取扱

新聞通信兼營

（假營業所）丸内三菱仲ヶ號館 電話大手五二〇四 東京支店

榮町五丁目 電話元町七八三〇四 神戸支店

京都市三條通烏丸東入

株式會社 京華社

電話中 三〇〇〇 三〇〇一 八八八八

西區傅馬町六丁目 電話東三〇九三 名古屋支店

東區北濱四丁目 電話堂島貳、貳六、三三番 大阪支店

◇ 法學博士 農學博士 新渡戸稻造氏著

縮刷 修養

百三十版

一たび之を繙かば明鏡に向ふが如く忽ちにして自己の歸趨を自覺し、向上發展の道を體得し得。蓋し古今獨歩の名著、萬人必讀の經典

定價壹圓貳拾錢 郵稅四錢三六判 總布製函入美本

◇ 前東京高商校長 坪野平太郎氏著

修養隨筆 叱牛錄

五版

坪野氏逝いて本書一卷を遺す。世の青年者流の日に日に意氣を失ひつゝあるを慨したる痛烈骨を刺す大文字眞に大人格者の大獅々吼！

定價貳圓 中型 郵稅拾錢 函入 總クロース美本

◇ 夏目漱石氏著

社會と自分

卅四版

著者唯一の講演集、長短六篇悉く著者の性格と思想と日常生活の發露にして氏が、文藝に對する旗幟は一讀して鮮明以て自己を啓發すること至大

定價貳圓三六判 郵稅八錢 函入 總クロス頗美本

◇ 法學博士 河上肇氏著

祖國を顧みて

廿四版

徹底せる觀察と深遠なる學殖とより縱横に西洋文明を批判解剖し、引いて我國の文明に論及す。識見卓越。讀者に警拔なる暗示を與ふ

定價壹圓七拾錢 郵稅八錢 中型 上製函入頗高雅

◇ 島崎藤村氏著

海へ

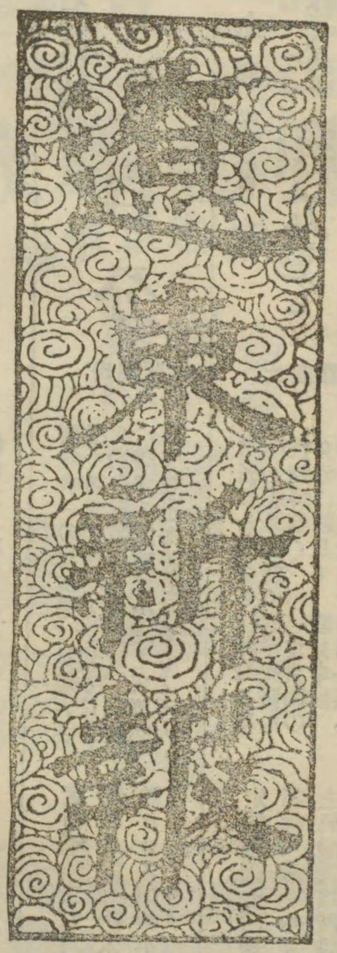
十八版

堪へ難い憂を抱いて旅立てる詩人の心胸より迸り出でたる無韻の詩。我國唯一の海洋文學。モオパッサンの「水の上」にも比すべき逸品

定價貳圓 中型 郵稅拾錢 函入 總布極上製美本

東京市京橋區南紺屋町十二 實業之日本社 振替東京三二六八 電話銀座九九八

遼河の東方一帶は我遼東紙の讀者圏内でありの
往年の遼東半島還附を紀念として題名とした
滿洲
一



本社　滿洲大連市
東京支局　京橋區宗十郎町十一　電話銀座一九八〇番
大阪支局　東區瓦町二丁目　電話本局三七〇番

MONTHLY BOOK REVIEW

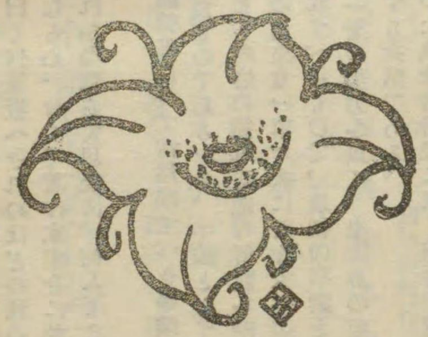
讀書人

□ 知識の泉を讀書人の海へ正しく導入するために
□ 讀書人の指標、出版業者の好伴侶として
□ 日本出版文化を計量する正しい統計の作製のために

一部金二十錢　國際思潮研究會　東京芝區白金三光町
毎月一回一日發行　讀書人編纂部　振替東京七二二二二

出版年鑑

1926



讀書人編輯部

15. 6. 21
内交

アルスの最新刊

萩原朔太郎著 情調哲學 新しき欲情

著者は「論文でもなく、評論でもなく、感想でもなく、隨筆でもなく、全く一種特別の情感の豊かな、叙情詩の濕ほひのある、香氣の高い靈魂の放射線だ」といつてゐる。氏の詩によつて表現されなかつたものが、この新鮮な散文の形式で示されたものである。

定價二、五〇　送料〇、〇八

戸川秋骨譯註 アルス英文叢書 無敵艦隊

譯註書界の最高權威を以て目さるるアルス英文叢書中の最新刊である。本卷は英國の大史家グリーンの一大名篇、正確なる史實を描くに精彩溢るるが如き名文を以てし、英國死活の大海戰を描寫して血湧き肉躍るの感あらしめた。

定價一、二〇　送料〇、〇六

一氏義良著 西洋美術の知識

原始時代より未來派、構成派に至る數萬年に亘る繪畫、彫刻、建築、工藝等の史的發展を文化史的背景の前に活躍せしめ、西洋美術に對する根本的理解を與へた。全部總アート挿畫三百餘圖、出版界空前の大著である。

定價三、八〇　送料〇、一二

小泉浩著 泰西名曲の知識

西洋音樂を眞に理解し味はんとするには、之れに對する周到なる豫備知識が必要なことは申すまでもない。本書は名曲二百三十一につきて詳細に解說を施したもので、作者別に分類し隨時必要に應じ檢索し易からしめた。

定價二、五〇　送料〇、一〇

タイニングル著 村上啓夫譯 性と性格

稀世の大天才が血を以て描いた深刻にして大膽なる女性解剖であつて、女性に對する彼の根本的批判、深遠にして峻嚴なる倫理哲學は當時の學界を驚倒せしめ、爾來二十餘年あらゆる國語に譯出せられ兩性問題、婦人問題の指針として重ぜらるる古典的名著である。

定價二、八〇　送料〇、一二

正宗得三郎著 アルス美術叢書 マチス

本邦美術界空前の大別冊を形成せんとするアルス美術叢書中の最新刊である。本卷には現代佛蘭西畫壇の巨匠立體派の先驅者、色彩と感覺の畫家マチスの藝術とその評傳とが紹介された。

定價一、八〇　送料〇、〇八

東京小石川表町　**アルス**　電話小石川三五七〇　振替東京二四八八八

卷頭に

「出版年鑑」編纂の要望は既に讀書家、研究家並に出版業者の間に高唱されたことで、今更これの必要を力説するには及ばぬ。

曰く「朝日年鑑」曰く「ホウチネンカン」曰く「勞働年鑑」曰く「文藝年鑑」曰く「美術年鑑」曰く「日本映畫年鑑」曰く「基督教年鑑」曰く何、曰く何等數へきれぬほど各種の年鑑が刊行されてあるが、「出版年鑑」の無かつた事は不思議な現象と言はればならぬ。曾つて著作家組合に於て、この編纂に着手した事があつたが編纂及び出版の至難等より中途にしてこれを拋棄して以後は、何人もこの事業に着手し得なかつたであらう事は遺憾に堪へない處であつた。

「出版年鑑」の編纂は本會「讀書人」編輯部に於て當然成すべき事業として着手する事となつた。然し最初の事業でもあり、尙且つ短期間に編纂したものであるから、年鑑としての作用を完全に有し得ないであらう不滿がある。——出版書物の全般に亘つてその內容の簡單明確な解說を附する事の殆んど不可能であること、從つて目錄の作製にも嚴密に明細な種類別の出來ない事。次に著作家全體の略歷を蒐集すること等、不可能に等しい困難が橫る。これらは將來に於て完成すべきもので、最初の事業としては到底企て及ばざる處である。

來年度に於ては各方面の援助に依り、一層の努力を以て、出版界の明確な指針となるべき年鑑を完成すべきを以て讀者もこれを諒せられん事を切望する次第である。

終りに本書編纂に際し後援と努力を賜つた執筆者諸氏に深く感謝の意を捧げる。

大正十四年十二月

國際思潮研究會
「讀書人」編纂部

517-314

「出版年鑑」目次

第一編　大正十四年の出版界……一

社會運動に關する出版の傾向……（青野　季吉）……二
社會思想に關する出版の傾向……（山內　房吉）……五
政治法制出版界の概觀……（川原次吉郎）……一〇
十四年の經濟學界を顧て……（米山　勝美）……一六
自然科學の書物……（平林初之輔）……二〇
十四年の文藝思想界……（小島　德彌）……二六
十四年の小說……（山川　亮）……三〇
十四年度刊行の演劇書類に就て……（武藤　直治）……三五
美術上の出版物……（一氏　義良）……四一
十四年の詩壇……（白鳥　省吾）……四六
音樂界片々……（小泉　浩）……五二
十四年の教育界を顧て……（原田　實）……五八
十四年の新聞……（坂口　二郎）……六五
十四年の主なる出版物……（種類別）……六八

第二編　大正十四年度圖書目錄（發行所別五十音順）……一〇一

ア（一〇三）イ・エ（一〇五）ウ（一一一）オ（一一一）カ（一一七）
キ（一一八）ケ（一二一）コ（一二五）サ（一三〇）シ（一三一）
ス（一四八）セ（一四七）ソ（一四八）タ（一四九）チ（一五四）
テ（一五五）ト（一五六）ナ（一五九）ニ（一六一）ハ（一六二）
フ（一六五）ヘ（一六八）ホ（一六九）マ（一七一）ミ（一七二）
メ（一七四）モ（一七五）ユ（一七五）ヨ（一七七）リ（一七八）
ワ（一七八）

目次

第三編　出版界一年史……一八一

十四年に創刊された雜誌……一八二
十三年末現在主なる雜誌……一八八
出版記念會……一九二
發賣禁止……一九四
「無產者新聞」の創刊「解放」の復活……一九五
新聞紙法及出版法改正案……一九六
發行權法の確立及出版稅撤廢運動……一九八
著作權改正運動……二〇二
日本プロレタリヤ文藝聯盟宣言……二〇二
至誠堂破產問題……二〇四
大東館の創立……二〇五
圖書大市……二〇六
圖書大市會總賣上高……二〇六
出版圖書類別月表……二〇六
出版圖書類別累年比較……二〇八
雜誌發行數及官報發行數……二〇八
主要圖書館……二〇九
圖書館數……二一〇
圖書閱覽人（上野圖書館）……二一二
貸付圖書數（上野圖書館）……二一三
多く讀まれた新刊書……二一三
全國主要日刊新聞……二一四

第四編　出版關係法規……二二三

出版法……二二四
豫約出版法……二二八
出版ニ關スル願屆書式……二三一
著作權法……二三三
作者不明ノ著作物ニ關スル件……二四〇
文學的及美術的著作物保護修正ベルヌ條約……二四〇
新聞紙法……二五〇

第一編　大正十四年の出版界

東京市立中央図書館蔵

社會問題に關する出版の傾向

青野季吉

一九二五年の社會問題に關する出版の傾向について、私の思ひ付いた點若干を記述して見る。

一般經濟界の不振につれて、出版界全體として不景氣であつたことは爭はれない。極く卑近な一例をあげて見ても、大新聞紙の第一頁の廣告欄は、書籍の廣告で埋まるのが普通であり、新聞社もそれを誇りとするのであるが、二五年度にはどんな大新聞紙の第一頁も、出版の廣告で埋らない日が續出すると云つた具合で、いかに出版界が不振であつたかが分る。

出版界全體としてはそうであつたが、社會問題に關する出版は、尠くとも發行册數から見ると——正確な統計を基礎としてではないが——相當の成績が、上つてゐるやうである。これは一つには、不景氣時の出版業者の商略として、手堅いものに仕事を集中した結果であらうが、また一面、社會問題に關する書籍の需要が、自然と高まつてゐることが、大いに作用してゐるのではないかと考へられる。

この三四年の社會問題に關する、書籍の發行部數を見ると、經濟界の振不振のリズムとは離れて、次第に增加する傾向を示して來た。しかも、その增加率は、他の部門のそれよりも高いやうである。この事實は、どうしても社會問題にたいする社會的關心が高まつたといふ點から考へないと、十分な說明は出來ないと思ふ。この傾向は、私の考へからすると、年を追つて强まるものと見てゐる。しかしこれは單なる豫測以外のものではない。

さて二五年の社會問題に關する出版を見ると、やはり在來の傾向を追つて、反澤が主たる部分を占めてゐる。これは一々その實例をあげるまでもなく明らかなことであらう。いま私が記憶にあるものを擧げて見ると、フォイエルバッハ論（エンゲルス・佐野文夫譯）、通俗資本論（ボルハルト・水谷長三郎譯）、社會主義史（古代中世）（ベ！ヤ・西雅雄譯）、國際勞働組合運動（ロゾウスキー・堺利彥譯）、轉形期經濟學（ブハリン・佐野文夫譯）、唯物史觀（ブハリン・富士辰馬譯）等がある。この外に再版物、改譯物、の多く出たことも、確かに二五年の特色であつて、一般に社會問題の書籍が、いかに要求されてゐるかが分ると思ふ。

反譯の中に特に記錄しておき度いのは、「資本論」マルクス・高畠素之譯）の改訂版の出版である。資本論の大鐙閣版は、册數もあまりに多きに過ぎるし、價値も高きに過ぎた憾があつたが、こんどの新潮社版は原著の如く三册に纏められることのことで、既に發行された第一册で見ると、價格も極めて低廉である。この仕事の完成は、マルクス學界にとつて一つの大きな歡びであると共に、一般に社會運動にとつても此上ない貢獻である。

そんな具合に反譯が依然としてこの部門の主要地位を占めてゐたが、これは當然そうなる可き事であると思ふ。何と言つても日本の社會思想界は、まだ〳〵西歐の先進資本主義國の知識の吸收につとむ可き時代だからである。而してこの時代を立派に、手堅く通過することは、是非共肝要なことであらう。そんなわけでこの傾向は、今後も當分の間繼續すると見て差支へないであらう。

その傾向の傍ら、二五年に特に現はれた現象であつて、示唆するところ多いと思はれるのは、西歐の名著の解說が盛んになつたことである。その第一に指摘しておき度いのは、新潮社版の「新學說體

系」の發行である。今日まで發行された分を見ると、二三のものは解說をつくるまでもないと思はれるが、その大部分は是非共紹介さるべきものである。またかのヒルファーデングの名著「金融資本論」の解說（猪俣津南雄氏）なども、この傾向の一つを鮮やかに語つてゐるものである。

私はこの傾向を示唆するところ多いものだと言つたが、實際、それは興味ある現象の現はれではないかと思ふ。といふのはこれまで西歐の名著と言へば、必らず全譯でなくては納らぬものであつた。それがたとへ忠實な反譯でなくとも、とにかく全譯とさへ言へば、何か本物を把握してゐるやうに、その買手に思はれたものであつた。つまり、分つても分らなくても全譯を傍におくと云ふこと、そのことに興味が持たれてゐたのであつた。しかるに極く最近には、そんな形式的なことでなく、眞に內容を知り度い、摑み度いといふ要求が起つて來たやうである。而してそれが、簡結平明な解說物の出版、その需要の高上となつて現はれたのではないかと思ふ。私はこの傾向が、今後いよ〳〵盛んにならんことを願ふ者の一人である。

一方に於て正確なオリヂナル又はその全譯による一言一句の研究、それは極めて大切なことであるが、他方に於て、大體に正しい內容を全的に把握して、自個の經驗に照して批判し、自個のものとすることが、また極めて必要であると思ふ。しかもこの後者の方面の努力が、今日まで閑却されてゐたのではないかと思はれる。

次に反譯でなく日本の社會思想家の日本の事象に對する研究、論義の方面を見やう。この方面でも相當に努力があつたやうである。特に社會問題の方面では、純粹の研究物は別として、當面の日本の社會運動の流れと合流した研究、論議に關する著述は、これまで餘り多く見られなかつたやうである。それが二五年あたりから、次第に現はれて來るやうになつた。これは日本の社會運動が、次第にそうした日本に脚のついた具體的研究、論議を欲して來たからであらう。その中の主なるものを指摘すると、「末期の日本資本主義經濟とその轉換」（高橋龜吉著）、「無產政黨の研究」（山川均著）、「勞働組合と政黨問題」（河野密著）「無產政黨と社會運動」（青野季吉著）等である。この中無產政黨に關するものが多いのは、この問題が二五年の日本の社會問題の中心問題であつたがためである。

最後に社會問題の出版の技術的方面を見ると、こゝにも一つの新らしい現象が認められると思ふ。それは價格の低廉な、それでゐて相當な內容のある書籍を提供せんとする傾向である。その實例としては文化學會の「社會問題叢書」（各一圓宛）が擧げられると思ふ。文化學會のこの計畫は、極めて時宜に適したもので、それだけ成績を上げてゐるやうである。その他大原研究所の權威あパンフレットを始めとして、諸のパンフレットの陸續たる發行もこの傾向を語るものである。同じく低廉なる價格によつて、社會問題に關する重要書を提供しつゝある希望閣が、相當の事業上の成功を領めつゝある事實も、この傾向の現はれの一つであらう。（一二・一一）

社會思想に關する出版の傾向

山內房吉

大正十四年に於ける社會思想に關する出版物の傾向を見ると、前年までに比べて哲學的、認識論的著作がかなり重要な地位を占めるやうになつたことが注意される。勿論、それらの出版物の多くは海

外の既に古典的文献となつた名著の飜譯移植であつたが、しかし、それにしても充分に注目さるべき著しい傾向であつた。それは日本の社會思想界が進歩の一段階に到達しつゝあることを示したものだと言つて差支ないと思ふ。

社會思想――と言つても、その主流をなしてゐるものは、疑ひもなく、マルクス主義思想であつて、出版界の潮流もそこにあり、筆者の興味もまたそこにあることを先づ斷つておかねばならぬ。

資本論を初めとして、マルクス、エンゲルスの經濟學的、唯物史觀的諸理論は既にこれまでに大抵移入された。が、その基礎となつてゐる哲學的――認識論的述作は殆んど移植されてゐなかつた。例へば、エンゲルスの「ホイエルバツハ論」、マルクスの「ホイエルバツハ論綱」の如きがそれである。(尤も後者は二三年前の「我等」に水谷長三郎氏の飜譯が紹介された。この他にも譯した人はあつたと思ふ。)

この謂はゞ、マルクス主義の哲學的基礎とも言ふべき文献が今年に入つて飜譯出版された。譯者は元「無產階級」同人であつた佐野文夫氏、書肆は同人社、勿論ドイツ語原本からの直接譯で、譯文は明快流暢、しかも正確な好譯である。

これは、譯者も言つてゐるやうに、マルクス、エンゲルスの多くの著作中、專ら哲學的基礎的方面を系統的に取扱つたものであり、マルクス主義思想の歷史的構成過程の記述であると共に、その理論的構成の解說である。マルクス主義の諸理論を眞に理解するためには、先づこの辨證法的認識論と唯物論的世界觀とを知らねばならぬ。この意味からして本書の出版は重大な意義を持つてゐた。そしてかういふ種類の著作が要求され初めたといふことは、前にも言つたやうに、日本の思想運動が初期的段階をやうやく通過していよ〳〵根强いものにならうとしてゐる證據である。

次に、前書と同傾向の哲學書としては、デボリンの「戰鬪的唯物論者レーニン」であつた。志賀義雄氏の譯によつて「レーニン主義の哲學」といふ書名の下に希望閣から出版されたのがそれである。これはレーニンの『唯物論と經驗批判論』(「レーニン全集」第十卷)を通してレーニンの階級鬪爭、革命、國家論、政黨論、タクチツクス、及び彼の經濟學的諸理論の哲學的根據を闡明したものであつて、マルクス主義の延長であるレーニン主義の認識論若しくは方法論のコンメンタリーである。「ホイエルバツハ論」がエンゲルスのテキストであるに對してこれは解說書ではあるが、しかし自らレーニン主義哲學を支持してゐるこの著者の解說は信頼することの出來るものだと言つていゝ。聞くところによるとこの書のテキストであるレーニンの「唯物論と經驗批判主義」も近く出版されるとのことだ。

以上の二書と異つた傾向のものでは、クロポトキンの「倫理學」が出た。しかも、同書は同時に內山賢次、安部浩の二人の譯者によつて別々にアテネ書院とアルスから出版された。二つとも二圓八十錢といふ比較的低廉な定價であることは嬉しい。(原書は約十圓である。)

この書は既に飜譯出版されてゐる同じ著者の「相互扶助論」の續稿とも言ふべきもので、その傍題が示してゐる通り、倫理思想の起源と發達とこの檢討から新しい倫理學を打ち建てやうとしたものである。そしてその根柢となつてゐるものは彼が生物學的研究から得た結論――ダーウキンのそれとは正反對の生物(乃至人類の)相互扶助說である。在來のブルジョア倫理學に對して新しく興るべき倫理學にとつては相當に寄與するところの多い一文献である。少なくとも今後新倫理學を樹立しやうとするものゝ見逃がしてはならないものだと思ふ。實際、在來の傳統的倫理學に對して革命的な倫理學の

これだけに纏つた著述は殆んど他にないからである。

この年鑑のために自分が受持たされたのは社會思想、特にそのうちの哲學的、認識論的側面に關する出版に就てゞあるが、その範圍に於ては、今年は以上の三書が主なるものだつたと思ふ。しかも自分はこの方面の出版が目立つたことを指摘した。それは、必らずしも數の上からではなく、これらの出版物が何れも大きい文獻的價値を持つてゐるものであることにも與つて力があつたと言はねばならぬ。また、かうした傾向は前年度の後半期頃から擡頭してゐたとも見るべきである。と言ふのは、昨年の後半期にはマルクスの「哲學の窮乏」(安部浩氏譯)、ディーツゲンの「哲學の成果」及び「頭腦勞働の本質」(山川均氏譯「無產階級の哲學」)、ラツツエンホーフアーの「社會學的認識論」(宮崎市八氏譯述)等が出てゐるからである。しかしかうした種類の著作が一般的に要求され出したのは今年に入つてからであつた。これまでも雜誌「社會主義研究」「我等」「マルクス主義」等に時々この種の論文や飜譯が紹介されたけれども餘り一般には注意されなかなつたのである。倫理學に關するものも既に數年以前にカウツキーの「社會主義と倫理問題」(堺利彥氏譯「社會主義倫理學」)があり、大正十二年一月の「我等」には匿名露人の「無產階級の倫理」が載つたが、前者は慥か絕版になつてゐるし、後者は殆んど忘れられて居る。

それからこれは社會思想といふよりは、自然科學の綜合的認識論であるが、ピーエル・デルベの「科學と實在」が平林初之輔氏の名譯によつて九月叢文閣から出た。(これに就ては別に雜誌「讀書人」へ讀後感を書いたからこゝには批評がましいことは差控へるが)科學哲學とも言ふべきこの書は社會科學的認識論にとつても深い暗示と寄與とに富んだものである。蓋し、新しい認識論と世界觀とは必然にかうした生物學的、物理化學的研究の成果に負ふところが決して尠くないからである。山川均氏譯の「近代科學と唯物論」なぞゝ共に貴重な文獻の一つであつた。

こゝで、考へ及ぶことは以上に擧げたこの方面の出版が悉く飜譯物であつたといふことだ。この點から言ふと、第二期に入つた日本の社會思想もその認識論的局面では未だ全然文獻の吸收、消化時代に在ることが判る。

近代社會思想は一個の新しい世界觀に基礎づけられてゐるものだ。經濟學上の價値論や資本蓄積論や社會組織の經濟的說明たる唯物史觀やの底にはこの新しい認識論と世界觀とが流れてゐるのである。で、社會思想の諸理論を眞に理解するためには是非ともこの基礎的方面を知る必要がある。

然るに、從來の日本の社會思想界、出版界はこの方面を閑却してゐた憾みがあつた。尤も社會思想勃興の第一期とも言ふべき過去の現象としては止むを得ないことだつたかも知れないが、少くとも第二期に入つた今後は思想界も出版界もその活動の一部面にこの方面への注意と努力とを加ふべきである。そして今後暫らくはこの方面の研究が要求されることゝ私は信じてゐる。從つて文獻の移入と共に、新しい研究的著作も現はれることであらう。そうした氣運乃至萌芽が今年に入つて漸く認められて來たのである。そしてこれが今年の出版界を通じて見た社會思想の傾向であり、また社會思想の出版界への反映であつたと言つて差支なからうと思ふ。

政治法制出版界の概觀

川原次吉郎

大正十四年出版界の特徴

大正十四年は、我國の政治史乃至は法制史においては、實に特筆大書すべき年であつた。こいふわけは、云ふまでもなく、所謂普通選擧法の制定されたことでなければならぬ。まことに普選法の通過は、我國政治法制界に一轉期を劃するものこいつてもよいのである。出版界こ雖も、時勢の反影である。この劃時代的な世相に超然たるを得なかつたことは、むしろ當然こいはねばならぬ。卽ち普選に關する出版物が、議會の閉會前後から相繼いで出て、讀書子をして、その選擇に迷はしめたこと並大抵ではなかつた。受贈又は購入によつて私の書架に積まれたものだけでも、決して少ないものではない。たゞあまりに拙速的に出版された傾があつたゝめ、杜撰なもの、多かつたことは殘念でならない。或書店の如き、人を介して、普選に關する或る解說書を學生に參考書こして推薦してくれこ依賴して來たが、私はすでにその書物は讀了してゐて、甚だ粗雜なもので到底學究者の參考こはなり得ないものなることを知つてゐたので、少し氣の毒ではあつたが、自分の口から推薦する勇氣がないこいつて斷然ことわつたことがある。その本屋からは惡まれたかも知れぬが、敎師こしての良心は、そんなことはちつこも怖れない。

普選選擧に關する出版物

二十册にも近い普選に關する類書の中で、特に私の目についたものは、小山松壽氏編「國民要覽普選義解」(名古屋新聞社出版部)であつた。これは單に頁數において類書中最大のものであるこいふばかりでなく、その內容においても、少しく他こ異つた趣がある。卽ちその特長こして、今次の普選案が議會を通過するに至るまでの議會での經過が文獻的に書きつらねてあるので、我等學究者にこつて極めて重寶なものである。委員會における質問應答、辯論等は一般人には傍聽不可能のため、その實相を知る由もないが、この書にはその間のことが比較的よく明記されてゐるのも我等には大助りである。又本會議における政府委員や議員の問答も細大洩さず集めてあるし、普選に關する諸種の事項も克明に輯められてゐるのでいよ〳〵ありがたい。私は普選法研究者に心强く本書の一讀を薦めることを得るこ思ふ。次に一應見ておくべきものこ思つたのは、坂千秋、三宅正太郎兩氏共著「普通選擧法要綱」(改造社)であらう。これは普選法の草案者こしての兩氏の意を知ることが研究者に望まれるからである。菊半截判一七七頁の小册子ではあるが要領を得た書物である。法令研究會編「改正衆議院議員選擧法示解」(敬文社)も、一寸面白い編纂振りだこ思つた。我國の普選運動史には、弘田勝太郎氏の「普選運動史及普選の心得」(而立社)がやゝ參考になる。これはしかし、學究書こいふよりも、むしろ普選の歷史のバーズ・アイ・ヴィューを知るに便宜な書物である。日本普選史に關するより學問的な研究は、今後の政治史家の任務であらねばならぬ。最も通俗的なもので、廣く行はれたのは、朝日新聞社發行の「普選早わかり」、國民新聞社政治部編の「普通選擧早わかり」(民友社)、都新聞社出版部發行の「普通選擧法大意」、田川大吉郎氏の「普選の話」(日本評論社)等であらう。何れもそれぞれ特徴があつて、一長一短の評は免がれない。その他計へ上げれば限りがないから、普選について

はまづこれくらいに止めておくが、考へて見ればよくもまあ澤山の書物が出たものだと、今から追想しても驚くばかりである。

無產政黨に關する出版物

普選實施後は必ず無產政黨ができるにきまつてをる。普選と無產政黨はコロラリーである。宜なるかな、無產政黨についての研究論が、本年は非常に喧しかつたのは。新聞雜誌上においても、これに關する論說が數多く載つたが、單行本としても、可なりまとまつたものが出たやうである。山川均氏の「無產政黨の研究」(叢文閣)の如きも、その內の一つとして、見逃がしてはならぬ書物である。本書は、大正十三年四月頃から、本年九月頃までに書かれた無產政黨に關する氏の論策の大集成である。ここに無產政黨の綱領の問題については、聽くべき議論が少くない。靑野季吉氏の「無產政黨と社會運動」(白揚社)も無產政黨問題の研究には參考になる良書である。時論的なものも多く集められてあるが、その各論文發表の年月を念頭において讀むならば、該問題研究の推移も理解されて面白い。一體論文集は必ず各論文每に發表又は執筆の年月を明記しておくのが、著者としても深切な態度だと思ふが、この點で、山川、靑野兩氏ともに、よく意を用ひてをられるのは嬉しい。右の他にもいくらも類書が出てをるが、紙面に限りがあるから、代表的な以上二書を揭げるだけに止めておく。

政治學に關する研究的書物の續出

普選に刺戟されてか非ずでか、政治學に關する一般の注意が近來ときみに亢進してきたことは、政治學の一學徒として私は喜こびに堪えないところである。本年は政治學界においては從來見ざる活氣を呈してをる。しかもその傾向はますく強度を加へんとさへするやうに見える。何といつても愉快でならぬ。本年中に出た政治學書としては、先づ蠟山政道氏の「政治學の任務と對照」(巖松堂)を擧げねばなるまい。五號活字ではあるが菊判五四三頁、量においては勿論、質においても政治學界稀にみる大著たるを失はない。爾來やゝ看却され勝ちであつた政治學方法論上の論究に力を入れてあるところに本書の特徵がある。大山郁夫氏の「現代日本の政治過程」(改造社)も政治學徒必讀の書であらう。先に出た同氏の名著「政治の社會的基礎」の後をついで出たものだけに、一般の期待も大きかつたやうである。現代日本の政治的諸般の現象に對する氏一流の認識と批判は、蓋し讀者に多くの糧を與へるに違ひない。但し蠟山氏の著にしろ、大山氏のそれにしろ、政治學究としての私にはまた私としての多少の意見もあり批評も有つてをるのであるが、單に出版界の概評をなすべき本文の範圍でないから、それには觸れないでおく。尙右の他に、戸澤鐵彥氏の「政治學史講義」、大內兵衛氏の「現代イギリスの政治過程」、信夫淳平氏の「國際政治の進化及現勢」、同「國際政治の綱紀及連鎖」、村瀨武比古氏の「政治的認識の基礎」、原田政治氏の「中華民國政黨史」、馬場鍈一氏の「憲法政治の理論と實際」等も注目に値する。飜譯物としては、バーネス氏著、新明正道氏譯の「社會學と政治理論」、クールト・シュテルンベルヒ氏著、藤本直氏譯の「政治學說史」、リシャールド・ベルゲン氏著、友岡久雄氏譯の「政治學の根本問題」等があつて、何れも政治學界に功獻する所少なくないものである。尙政治學の研究者にとつて、古垣鐵郎氏の「國際聯盟と世界の平和」、東鄕實氏の「植民政策と民族心理」、「島田三郎全集」、「福澤全集」等のあることも意を强ふするに足る。就中、明治政治の研究熱のやうやく盛ならんとする此際に「福澤全集」刊行の擧あるは、實にその時を得たるものといふべきである。早く製本出來してくれることを熱望するもの私のみではないであらう。最近出た尾佐竹猛氏の「維新前後に於け

る立憲思想」の名著とゝもに、此方面の研究者にはなくてならぬ文獻材料である。

政治教育に關する出版物

政治教育の聲の高かつたのも、本年の一特徴であつたといへる。政治教育を標識とする會や雜誌の輩出したこともそのことを裏書して餘りある。數多いごん栗の中で、規模のやゝ大げさなだけに、政治教育協會の「政治教育講座」が最も世評に上つたやうである。尾崎行雄氏の「政治讀本」(日本評論社)は、つとに政治教育家を以つて自らも任じられ、人も認めてをる同氏のこと故、この方面の書物としては壓倒的な好評を博したやうである。

政治教育とほゞ同樣に喧傳せられた標語に成人教育、公民教育といふのがあつた。それらに關した出版物も少なくなかつたが、中でも、朝日新聞社發行の「成人教育」は、ちよつと思ひ附きだと思はれた。千葉敬止、森茂兩氏共著の「公民科精義」(教育研究會)、星野武雄氏著「自治制要論」(大明堂)等も類書中では異彩を放つてゐた。

法制書類の瞥見

豫定の紙數ももう盡きたから、ほんの瞥見に止めやう。法制書類としては私の專門にあまりかけ離れてゐるものには眼も屆かなかつたが、私の注意の中に入つたものでは、何といつても土橋友四郎氏の「日本憲法比較對照世界各國憲法」(有斐閣)であつた。本年度に出た最大の力作であつたと思ふ。あれだけの努力に對して、著者に向つて滿腔の敬意を拂ふことは學界に身を置くものゝ忘れてはならぬことゝ思ふ。公法の範圍では、市村光惠氏の「憲法精理」、佐々野辛邦氏「憲法行政法論綱」、清水澄氏「帝國公法大意」等が目立つたし、私法としても、尾高武治氏の「民事商事に關するあらゆる種類の訴

と其裁判」、藥師寺志光氏の「民事判例研究」、鈴木壽男氏「民法概論」、島中弘道氏「民法通論」、大谷美隆氏「民法總論講義」、穗積重遠氏「婚姻制度講話」、中村進午氏「法制上の女子」等を摘出することができる。

その他勞働組合法案の問題が喧しかつたと共に、その方面の書物も少なくなかつたが、中でも安井英二氏の「勞働協約法論」、孫田秀春氏の「勞働法總論」、河田嗣郎氏の「農村四十三講」等最も好評があつたやうである。その他一般法制的なものゝ中でも末弘嚴太郎氏の「法窓閑話」は肩のこらない愉快な書物であるし、平野義太郎氏の「法律における階級鬪爭」も近年見ない快著であつた。これらは森莊三郎氏の「法制講話」、牧野英一氏の「法律に於ける意識的と無意識的」、三浦周行氏の「續法制史の研究」と共に本年法制界における大收獲とせねばならぬ。

「政治年鑑」發行に對する私の希望

最後に私は、出版界に希望したいことがある。それは「政治年鑑」の出版である。かつて同文館から「日本政治年鑑」がでたことがあつたが、あんなに大きなものでなくとも、せめて、「朝日年鑑」又は「時事年鑑」ほどの大さのもので、きりつとしたのがよい。英國やドイツあたりでは、「政治年鑑」又は「政治家年鑑」のよいのが出てをるが、日本でそれのないのは殘念だ。普選實施後の日本には、殊に必要なのであるから、どうか特志な出版者が思ひ切つてその計畫をたてゝ欲しいものだ。

以上大正十四年政治法制に關する出版界の概觀をしてきたが、勿論これは私の狹い視野に入り來たつたものゝ中から、更にまたとくに私の注意を引いたものゝみを選び出したに過ぎない。この他にも多くの出版物のあつたことは云ふまでもないのであつて、それらは本書の他の欄に載るだらうところの書目表で知つていたゞきたい。妄評多謝(十二月六日)

十四年の經濟學界を顧て

米山勝美

傾向であるとか、思潮であるとか云ふものは、都合の悪い事には、三越、白木屋が新柄や洋服の流行品を賣出し、丸善が一九二六年型の帽子を裝飾窓（ショウウヰンドー）へ陳列するのと違つて、大正十四年度の經濟學界の傾向とか、過去一ヶ年間に於ける經濟學の風潮の推移とか、と確然と期間を分けて明示するのは至難な業である。加之も、文學界の如に、假令ば、上半期に「新感覺派」なるものが盛んに論議されたとか、コント文學が提唱された、とかいつた風な記錄的な著るしい現れが、實際の經濟界の動搖は別であるが、經濟學界に於ては、經濟學本來の持ち前として、過去一ヶ年を通じて斯界の推移を一瞥し、其處に論評するに足る、尠くともセンセーショナルな問題は、他の部面に較べて決して多いとは云はれないのである。

「經濟」、唯、何となしに「經濟」といふ言葉や概念が、夫れは不景氣といふ現象に伴つて、一般の人々の口の端に上ると共に、頭腦へも犇々と泌み込んで來た。と同時に、從來は爲體も知らないでゐた「經濟」の本性に直面して、一と通りは其の實體を捉えやう、捉え得ない迄も觸れて見やうとする傾向が次第に、といふよりも寧ろ、今年に入つて急速に勃興して來たのは否み難い事實であつた。

高橋龜吉氏の「經濟學の實際智識」が多くの讀者を有つに到つたのも今年に入つてからであるし、軈ては、太田正孝氏の「經濟讀本」の著述となり、多くの歡迎を受けたのも、そは孰れも其の主なる理由は好著であからにも據るが、又一つは時流に投じたからでもあつたのである。此の他、公經濟、私經濟兩方面に於て「誰にも解る」式の經濟の文獻が頻々と出版され出したのは、廣汎な意味に於ける「經濟」の智識の熾烈なる要求と普遍化とを物語つてゐる。が然し、如何なる場合にも普遍化には常に他の一面に於て、インテンシーブな研究が生じて來るものであるが、經濟學界に於ても矢張り、經濟の智識が横の擴がりを有つと共に、縱の深さをも次第に加へつゝあつたのは爭はれなかつた。

深い研究と博い學識が、學究的な刊行物の簇出と共に現れ出でたのであつた。昨年末に創刊されたのではあるが「經濟研究」を初として「農業經濟研究」「社會科學」「法政大學論集」「早稻田政治經濟學雜誌」「早稻田商學」が創刊され、理論經濟學方面の文獻が夥しく發行された。例令ば、「經濟原論」に關する著述だけを擧げて見ても、尤も此等の中には「學生の筆記の煩を避けしめる爲め」のものが多かつたけれども、田島錦治、古屋美貞、末高信諸氏の何れも「經濟原論」と題する著書を筆頭に、河田嗣郎氏「經濟學要義」、河津暹氏「經濟學」、大竹虎雄氏「經濟學概論」福田德三氏の「國民經濟講話」の續篇とも見らるべき流通論を述べた「流通經濟講話」、共に未完成ではあるが二木保幾氏の「經濟學講義」、阿部賢一氏「經濟學原理」及び宮島綱男氏「經濟學原理」東晉太郎氏の同じ書名の著書が數へられ、「原論」の飜譯としてはマーシャルを大塚金之助氏が、タウシッグを長谷部文雄氏が今年に入つても夫れ〴〵引續いて飜譯出版してゐる。といつた具合で、「原論」だけでも十指に餘り、加之も理論經濟學の文獻は、單に此れのみに止まらないで、各自の專門に亘つて夫れ夫れ巨細な研究の所產が尠からず世に問はれたのであつた。

斯くの如く、「理論經濟學」が深く探究されて行つた旁ら、一方に於ては、政策の方面にも多くの獲

得を見出すに到つたが、此れは經濟現象に學問的基礎を基礎附ける徵候とも考へられるのであつて、即ち、那須浩氏の「經濟政策學原理」の第一卷として「經濟政策の本質並に生產政策原理」を初めとして、井上準之助氏の「戰後に於ける我國經濟及金融」、上田貞二郎氏「株式會社の現代經濟生活に及ぼす影響」、佐藤雄能氏「株式會社」、永井亨氏「新產業政策論」が其の反射的實例であると云ひ得られやうし、此の他に、實際家があつて、廣汎な體驗と學理とを併せ述べた好著も少くはなかつた。就中、失業問題や物價問題、そは不景氣と關連して多くの雜誌に於て論じられたところであつて、出井盛之氏の「經濟文陣」は失業問題に關する示唆を與へて居、此等の論題は孰れも共に現時の經濟事情に鑑て、尤も至極な反映であらう。更に又、經濟政策の方針を定め、經濟事象の指針ともなるべきに拘らず、從來餘りに無關心にすぎて來た物價指數の問題が、比較的多く論じられ、又、統計學にも世上の注意が漸次向けられて來、蜷川虎三氏譯ディヴィース原著「統計綱要」小林新氏「經濟統計學」、藤本幸太郎氏「經濟統計」が現れた。

斯くの如く、「理論經濟」や「應用經濟」やの智識の慾求が盛んになつて來たが、爰に鳥渡、書き添へて置きたいのは、從來講壇で論じられてゐた經濟學は實際には始んど役立たないからして、「應用經濟」が唱導され出したのである、と稍もすれば考へられ勝であつて、此れは「理論經濟」の價値を過少視した偏見で、「應用經濟」の思想の普及は喜ばしい現象に相違はないが、若しも此の傾向が、「理論經濟」其のものに對する輕蔑の念を助成するに到つたならば、甚だ遺憾であるとしなければならないわけである。

次に、我國の經濟學界に及ぼした歐米の經濟思想の影響であるが、嘗つて、マルクスの學說が、頻りに論議され、流布された如な殷賑さは見られないが、依然として河上肇氏を中心にマルクスの價値說が問題視され、又、同氏の「資本論略解」の一部が上梓され、熱心なる、そして秀れたるマルクス學者として深い尊敬を聚めてゐる。高畠素之氏のマルクス「資本論」が改訂され、形を更めて出たのも今年の事である。

然し乍ら、筆者の獨斷を許して戴けば、キーンズやヴキブレン等も論じられ、紹介もされたが、ヘネーによつて「新正統學派」と命名されたマーシャルの流れを汲む思潮が、就中、マーシャルが企て、及ばなかつた經濟學研究の動機目的を、人間の福致に置こうとする「厚生經濟學」を提唱するピグーの影響――といふよりも寧ろ、ピグーを通じてのマーシャルの影響が有形無形の間に、各國に於けると同樣、我國にも徐々に齎らされ來つてはゐないであらうか。更に又、經濟學研究の根本問題たる方法論が、歐米の各學說の紹介や批判と共に諸々に於て論じられてゐたのも見遁し難い現象である。

尙ほ、稍專門に亘つて見ると、經濟史の方面では、坂西由藏氏「經濟生活の歷史的考察」や、今年改訂增版された福田德三氏の舊著「日本經濟史論」があり、殊に後者は二十數年前の著述であるが、著者の敢果なる斷案には多くの興味をば同學の士に與ふるものがあるであらう。經濟學史方面では、細貝正邦氏「資本主義經濟學史巷話」の如く通俗的なものもあつたが、小川市太郎氏の「經濟學史」の增版が出、飜譯としてヂードの「經濟學說史」の部分譯が金井經司氏によつて「最近經濟學說」として出版され、イングラムの名著「經濟學史」が筆者の飜譯で上梓せられた。

此の他、銀行論、財政學等に於ても多くの貴重なる文獻が尠からず世に現れたが、此等は何れも、我國の經濟學界に眞摯なる研究が喚起せられ來つた事を示すものと見做して差支ない。（完）

自然科學の書物

平林初之輔

一

數年前までは、自然科學に關する書物は、大部分、受驗用の參考書であつて、それ以外の書物は、發行部數も少なく、讀者も少なかつたやうである。自然科學の眞面目な書物が可なり多數の讀者から要求され、それが相當の賣行きを示して來たのは、極く最近の現象であるやうである。これは、一時の流行若しくは人氣の轉換と見るよりも日本の讀書界のレヴェルが高まつて來たことを示す、喜ばしい徵候であると私は考へてゐる。

ここに、今年位、自然科學方面に於て、名著が續々として發刊されたことは空前であるやうに思ふ。數年前、アインシュタイン博士の來朝を期として、相對性原理に關する書物が出版界を賑はし、關東大地震の後に、從來殆んど手をつけられてゐなかつた地震學に關する書物が數種發行され相當の賣行きを示し、今年から日本に四つの放送局ができて、ラヂオに關する書物、雜誌、新聞の類が雨後の筍のやうに續出したことなどは、一時間の流行におはつた部分も少くないとしても、これ等の事柄も、一般讀書人を、自然科學に親しませるに少なからぬ効果をもつてゐたことは爭はれないであらう。

私は、しかし、自然科學を專攻してゐるものでないから、この方面の書物をあまり讀んではゐない。稀に讀んだものも本年になつて出版されたものでないものが多い。本年出版されたものでも、今は印象をとゞめてゐないものや、突嗟の場合に思ひ出せないものもある。その上あまりに專門的なものは讀んでもわからない。

だから、今年出版された自然科學書の鳥瞰圖的紹介をすることは、到底不可能である。たゞ思ひ出づるまゝに、二三の書物に就いて、所感を述べるにとゞめやうと思ふ。

二

先づ第一に、世界的に有名なペランの「原子」が翻譯された。本書は、千九百十二年にフランスのフェリックス・アルカンの科學叢書の一部として出版されたものである。譯者は植村琢、玉虫文一、水島三一郎の三氏が分擔されてゐる。譯文は、非常に平易とは言へないまでも、甚だ忠實なものであると言へるであらう。

本書の內容は、分子の實在及びその活動を明かにし、ブラウン運動に關する詳細な、そして獨得な研究をかゝげ、電氣原子、原子の發生及び崩壞等の興味ある問題をも取り扱つてゐる。十數年前の出版であるから、原子の構造などに關する最近の研究は、本書の或る部分を、アップ・ツウ・デエトでなくしてゐるのは已むを得ないが、今日の理論科學の中心的興味をなす、分子、原子等の問題について興味をもつ研究者の必讀すべきものであらう。

原書の特色は、その表現が、はつきりとした氣持のよい藝術的表現であること、並びに、煩はしい書物の引用や、抽象的議論の積み重ねをさけて、平易な實驗から出發しながら、いつのまにか、最新科學の根本問題に觸れてゆくといつた風のオリヂナルな取り扱ひ方である。

三

佐藤充、庄司彦六兩氏の共著になる「近代物理學概觀」も、最近に展開された物理學の諸問題を、物質の方面からと、エネルギィの方面からと、平易簡潔に說いた有益な書物である。物質の方面には、主として物質構成論がのべられ、最近有名なボールの原子模型にまで說き及んでをり、エネルギィの方面では、波動、輻射、電磁波、相對性原理等の問題がとり扱つてある。著者もことはつてゐることであるが、二人の著者の別々に講演したものを集めたものであるために、重複や不統一があるのはおしいことである。

四

石尾貞朝氏の著「生物化學」は、この方面のまとまつた書物として、私ははじめて讀んだので、非常な興味をもつた。緒論に於いて生命の研究に關して、生氣論と機械論が一起一伏して學界にあらはれた次第を歷史的に概觀し、第一編、生命基本——細胞及び原形質化學、第二編、生命の機械觀——生物榮養化學、第三編、代謝論並生活素の三編にわかつて、この方面に於ける最近までの研究の結果を系統的にのべたものである。俗間に今尙ほ牢乎として根を張つてゐる神秘的生命論を、思想の領域から一掃するためには、生物化學が示す、實驗的成果を、つきつけるのが最も端的な方法である。私は、この方面の紹介的著述のみならず、實驗的結果が、各所の實驗室から續々公開されることを望んでやまない。

五

さきに、ドウラージュ、ゴールドスミスの共著になる「進化學說」を第一編として發行した、フラマリオン自然科學叢書は、石原純、小泉丹、福見尙文三氏の熱心な監修のもとに、本年にいつてから、第二編としてボアンカレの「輓近の思想」を、第三編としてデルベの「科學と實在」を發刊した。前者は岡谷辰治氏の譯筆になり、後者は小生の拙譯になつてゐる。ボアンカレが近代物理學、星學、數學等の方面に於いてのこした効績は、こゝで縷々すべくあまりに有名すぎる。「輓近の思想」は、數學的物理學の方面に於ける著者の最後の筆になつたものであつて、物理學の最近の連續的革命に關する、豫言と暗示に滿ちた、文字は氏のその他の著書と相俟つて二十世紀の初頭に於ける人知の紀念塔の一つをなすものであらう。

「科學と實在」は、ラヂカル・リアリストの綜合的科學哲學を、無數の實驗科學の實例をもつて興味深く書きしるしたものである。科學の領域から形而上學を全く排除せんとする態度、生物學と物理化學とを聯結せんとする獨自の試み、なごに、實在論者としての著者の科學觀の特色が十分にうかゞはれる。たゞ、明快で、斷定的であるあまり、往々にして獨斷にはしつてゐる嫌ひがないでもない。

六

米山國三博士の「數學の基礎」上卷は、數學の根本問題に關する研究であつて、その發刊を吾々が感謝しなければならない好著の一つである。

氏は先づユークリッド幾何學の平行線の定理の問題から研究をはじめて非ユークリッド幾何學の成立の根據を明かにし、經驗と幾何學、空間の次元、幾何學の公理定義の本質等の問題を詳細に論究されてゐる。非ユークリッド幾何學の成立以來、吾々は、從來の傳統的數學の見地からすれば、隨分妙な數學のあらはれるのを見た。しかしながら、著者が言つてゐるやうに、『是等の新しき內容を有せる數學は、一見在來のものと甚しく異れるにも拘らず、數學者の任意に作りし一種の學說的の者にあら

ずして、吾々人類が吾人の理性を欺かざる以上、吾人の理性の要求を徹底的に滿足せしめんと欲する以上、數學はその遂に玆に到らざるべからざるもの』なのである。このことを明かにする爲に、著者は問題の歴史的展開のあとを丁寧に示されてゐる。今日の凡ゆる方面の科學の理解は數學の理解を前提としてゐるといつてもよい。しかるに數學の方面に於ては、特に教科書、受驗參考書向きの出版のみが讀書界に提供されてゐるだけであつた。私は、本書の下卷が速かに出版の運びに至らんことを望むものである。

七

生物學の方面に於ては、私の讀んだ範圍では、先づフーゴー・ドウ・フリースの名著「生物突變說」が横田千元氏によりて翻譯されたことを喜ばなければならぬ。ドウ・フリースの如きも、名前だけ進化學の書物に頻々として引用されてゐるにも拘らず、原著は、少數の專門家以外には近づき得なかつた書物の一つである。進化の行程について、ダアヰンの彷徨變異說に對して、辛棒强い實驗的結果によりて突然變異說を確立し、これを論證せる所に本書の中心興味がある。翻譯も忠實にされてゐるやうに見受けられる。

八

自然に關する知識を、面白く、專門外の人にも深い興味を起させるやうな風に記すことは、今日多くの人々に要求されてゐることである。ファーブルの「昆虫記」の如きは、此の意味に於いて推賞すべき名著であるといはねばならぬ。

「昆虫記」は大杉榮氏が第一卷を發表したまゝで地震の際の兇暴の犧牲となつて逝つたあとを受けて、椎名其二氏が二卷以下を擔當し、今年になつてその三卷が出た。讀者は、この書物をみて、科學の進歩が科學者の辛棒强い、綿密な觀察に負うてゐることを今更ら驚歎しなければならぬ。原著者の素朴な藝術的筆觸は、まさに恰好な譯者を日本に見出したといへるであらう。ルグロの「ファーブル傳」が「科學の詩人」といふ題で、同じ譯者によつて譯された。あはせて一讀すべきものであらう。

九

山名邦治氏の「生物學者を通じて見たる生物學史」は、素人向きに書かれた生物學史として恰好なものである。著者はロシイの「生物學と生物學者」に暗示されてこの書を書くに至つたと言はれてゐる。學問の父アリストートルに筆を起し、ガーレン、プリニイ、ヴエサリユウス等の古代及び中世に點在せる科學者の効業をしるし、ウイリアム・ハーヴエーの血液循環に關する實驗的研究によりて、近世科學の方法がはじめられ、それより、ひきつゞき、分類學、組織學、解剖學、生理學、發生學、細胞學、原形質化學、細菌學、遺傳學、化石學、進化學等の分野に行はれた進歩を、人と學說との兩面から、興味深く說述したものである。この種類の書物には、今少しく詳細な著述もあつてもよいであらう。

一〇

以上にあげたのは、前にもことはつたとほり、ほんの私の眼をとほして、今想起し得る書物だけであつて、この他に以上の書物と等しい、又はそれ以上或は以下の重要さをもつた科學者が澤山あらはれたことは言ふまでもない。

最後に、明治十四年に創刊した、ヴエネラブルな歴史を有する「東洋學藝雜誌」が、震災後休刊してゐたのが、この五月から續刊を發行するに至つたことは、一言附記するだけの意義を十分にもつであらう。

十四年度の文藝思想界

小島德彌

（一）

大正十四年度の文藝思想界を回顧するとき、それが文藝思潮とはッきりと云はれるほど理路整然たるものかどうか頗る疑問だが、ロマンチシズムからリアリズムへの新潮流である。文壇的に云ふならば、技巧派の凋落から人生派の擡頭への新傾向である。無論、細かく、部分的に、個々の作家或は、作品に就て云ふならば、一概に斯樣な觀察を下すことが出來ないかも知れないが、我が文藝界全體の調子から云つて何となくさういふ感じがされはしないか。

表現主義、未來派、ダダ、新感覺派と、大體に於てロマンチシズムによつて一とまとめにすることの出來る歐米の文藝思潮を、例の歐化主義とやらに變に進歩派がつて皮相淺薄に模倣したことは、やがて醜い行詰まりのていたらくを曝露し、昨年末から今年の始めにかけて二三の有力なる批評家の俎上に置かれて縱横に料理せられた結果、徒に新式の小道具大道具を使つたゞけで中味は依然として古いものであるといふことが明かになつた。我が文藝界に於ける皮相淺薄なるロマンチシズムの滅亡と云つては早まりすぎるが、元來が自然主義の反動として起つた享樂主義、耽美主義などによりてそのスタートをきられた我が文壇のロマンチシズムである。やがてはそのごんづまりに來るのは知れたことでないか。

我が文藝界に於ける新進、然かもその一部の人々の作風を呼んで云ふらしき新感覺派への、技巧派のエピゴーネンとしての非難攻擊の狼火が、諸方面より揚つたのは本年の中頃のことである。新感覺派が技巧派のエピゴーネンなるが故に非難攻擊されることは、また、技巧派が非難攻擊されること、卽ち我が文藝界に於ける皮相淺薄なるロマンチシズムとしての技巧派が非難攻擊されるものと見なければならぬ。而して、斯かる我が文藝界の新傾向を目して、すこし早合點かも知れぬが、人生派の勃興、卽ち、健實にして內容的なリアリズムの復興と見るべきではあるまいか。

蓋し、中村武羅夫、戸川貞雄などの作家は、雜誌「新潮」を舞臺として、新人生派文藝のために熾んなる提唱を試み、これに和する人々もまた尠くなかつた。新感覺派を對象に置いたやうな新人生派の文藝論には、どうかすると保守的反動派を思はせるやうなところはないでもなかつたが、新人生派的文藝論は、新らしき意味に於ける文藝上のリアリズムの提唱として、皮相淺薄なるロマンチシズムの行詰まつた我が文藝界を打開して新生命を吹込むものと思はれた。

無論、今年中に於て、此の新人生派的文藝論、一般的に云へば、新現實主義的文藝思潮を充分に裏づけて吳れるだけの作品に接することが出來なかつたが、かの大正十二年秋の大震災以來のプロレタリヤ文藝の衰頽によつて再び皮相淺薄なるロマンチシズムの跳梁跋扈に委せられやうとした我が文藝界に於て、新感覺派攻擊のために發せられたる彈丸が圖らずも似而非浪漫主義的文藝思潮を排擊して新現實主義的文藝思潮を築き上げることになつたのは、よしんばそのスタートに於て反動的な懷ひがあつたとしいへ、文藝界の現狀を打開するものとして悅ぶべきことではなかつたか。

しかし、注意すべきは、吾々が今日及び今後に於て育て上ぐるべき文藝思潮は新現實的といひ、新

人生派的こいつても、決してかの自然主義のそれの復活を意味するものでない。自然主義は云ふまでも現實的こいはれ、人生派的こいはれる文藝思潮であつた。だが、こゝに「新」こいふ文字を附して呼ばれるには、自からそれだけの意義がなくてはならぬ。新現實主義に於ける「現實（リアル）」は、自然主義の場合の「現實（リアル）」に較ぶれば、ずつこ廣い内容を持つてゐる。新人生の諸相こいつても、その中には、人類的愛、正義感、プロレタリヤ的感情、階級意識、反抗的精神こ云つたものまで含まれてゐなければならぬ。斯かる廣汎なる「現實」の内容を持てる新現實主義的文藝思潮の中からは、一方面、一階級に限られたものでないこころの人間生活のオーケストラこしての文藝が生まるべきである。

こころで、本年度に於て、新人生派の人々によつて提唱せられた新現實主義的文藝思潮は、上述の如き廣汎なる「現實」の内容を持てるものであるかごうか、一局面に限られたものでないこころの人間生活のオーケストラこしての文藝の生まるべきこを豫測するものであるかごうか。新人生派の人々の言説を通じてみるこき、此の點がいくらか曖昧であつたやうに思はれる。

（二）

扨て、斯くの如き我が文藝思想界に於ける新現實主義的風潮若しくは新人生派的傾向は、文藝雜誌又は新聞の文藝欄に掲げられたる片々たる論説によつて窺はれたのであつて、一箇のまこまつた著書なごは無論出なかつた。本間久雄氏に依つて譯出せられたウイリヤム・モリスの「吾等は如何に生くべき乎」、馬場哲哉氏によつて譯出されたアルツイバーシエフの「作者の感想」、茂森唯士氏に譯出されたトロツキイの「文學こ革命」の如きは、たしかに新現實的者しくは新人生派的傾向を助長すべき好著であるこ思はれたが、果してごれだけまでに我が文藝界の新風潮こ密接なる關係があるかごうか頗る疑問である。

だが、兎に角、此の三著の如きは、何等かの意味で、文藝こ生活こを喰付けて考へさせるものであつて、殊に、アルツイバーシエフの「作者の感想」こトロツキイの「文學こ革命」この二著は、我が文藝界に於ける新現實主義派系、新人生派系の作家を刺戟するこころ決して尠くなかつたやうである。此の際、譯者の勞を謝さなければならない。

序に、文藝に關する概論式又は講話式のもので、本年中に世に現はれた主要なるものを列擧すれば、植田壽藏氏の「藝術哲學」、金子馬治氏の「藝術の本質」、北村喜八氏の「表現派の戯曲」、木村毅氏の「小説研究十六講」、茅野蕭々氏の「世界文學思潮」、菊池寛山本修二兩氏の「英國愛蘭近代劇精髄」、宮島新三郎氏の「明治文學十二講」、また、評論集こ思へるものには、本間久雄氏の「近代藝術論序説」、宮島新三郎氏の「藝術改造の序曲」なごがあつた。

此等の中で、植田氏の「藝術哲學」、木村氏の「小説研究十六講」、宮島氏の「明治文學十二講」の如きは、微細にみれば無論種々の缺點もあり、不滿足なこころもないこいへないが、夫々熱心な研究の餘になれるものであるだけに、ごこか讀み應えのするこころがあつて、本年度文藝界に於ける好著こ云ふべきである。

十四年度の小説

山川亮

（一）

大正十四年は空前の出版界の不況の爲めに、殆んど目星しい文藝作品は出なかつた。翻譯方面に於ても、露西亞からする文藝品は革命以前の作品は、大部分は翻譯され盡したかの觀があり、革命後の作はまだこれと云つて目を聳たしむるものなく、僅かに佛蘭西文壇の寵兒ポールモーラン其他の現代並に近代の作家の作品が、我國文壇を風靡するかの觀があつたが、それも畢竟は大正十三年から引續いて來た流行の餘波に過ぎない。

大正十四年度の收獲としては、谷崎潤一郎の『痴人の愛』が改造社から出版されたのと、里見弴の『凡人愛』が新潮社から出版されたのとを除けば、他の既成作家は悉く疲勞倦怠を來してゐる。唯、その中で佐藤春夫だけが、婦人公論に『この三つのもの』と云ふ長篇を發表してゐるのが目立つ位である。

佐藤春夫の『この三つのもの』は從來春夫が書いて來た樣々の短篇の一大集成とも觀る可きもので、彼は玆に自己の新しい出發點を印しやうと心懸けてゐるかに思はれる。天分に於て狹くはあるが傑ぐれたるものを持つ彼は、現在の作家中でも最も多く未來を持つ作家である。潤一郎の『痴人の愛』や弴の『凡人愛』が、兎も角も既に絶頂を示して、これ以上に他へ動きやうがないかの如くに思はせるに反して、佐藤春夫の『三つのもの』は確にある新しき出發への暗示を含むと思はれる。

加藤武雄の『珠を拋つ』は新聞小説としての最も傑ぐれたものであつた。その清純なリリシズムに於て、藝術的な香りに於て、そのテーマの新しさに於て、新聞小説の權威者の如くに評されてゐる菊池寛や久米正雄の諸作を、遙かに凌駕したものであつた。菊池、久米の兩作家が既に老大家の域に入つて、辛ふじて舊來の型通りに、安易な境地に執筆しつゝある時に、加藤武雄の『珠を拋つ』の出たことは、新聞小説に倦怠を感じつゝあつた讀者に對して、確かに或種のセンセエションを起した。

（二）

今野賢三の『薄明の下に』は長篇三部作『曉』の第二部であるが、これのみを考えても『薄明の下に』は獨立した作品であると云へる。今野賢三は今日プロレタリア派と稱せられる作家群中での最も未來を期待されてゐる新進である。『薄明の下に』は所謂小説の型を脱した、長篇叙情詩とも考えられゝば、また獨白的自叙傳とも云ひ得られる。主觀の最も强烈濃厚に描出された作で、その結果は讀者をして倦怠に陷らしめる恐れがなくもない。それと較べて、同じく新潮社から同時に出版された中村能二の『默示する人は』筋の面白さ、場面の廣大なるに於て、確に『薄明の下に』よりも、より以上に讀者をひく力を持つてゐる。更らにより以上に讀者を魅するものに、池谷信三郎の『望鄕』がある。まさに新感覺派の代表作とも云ふ可きで、多くの挿話的物語が、輕快なメランコリーに點綴せられて、全篇を形成してゐる。『薄明の下に』を鄕土的と云ひ得るならば、『望鄕』はまさにコスモポリタンの心境であると云へる。

同じく佐々木千之の『憂鬱なる河』がある。その質實な精緻な描寫は、よく北國人の型を出してゐる。然しながらこの『憂鬱なる河』に依つて吾々は、如何なる未來を感ずるであらうか。そこに描か

れたものは、一點一劃もゆるがせにしない忠實な世相の描寫であることは思ふ。然しながら作者が未來に意圖するものは、遂に其處からは些かも窺ひ知る可くもない。私は佐々木千之の『憂鬱なる河』に他の三者(今野、池谷、中村)よりも深い期待を懸けると同時に、この一點を遺憾に考えるものである。

山川亮の短篇集『決鬪』は異色ある作品集である。從來嘗て取材されなかつた、社會主義運動の一側面を描いたものとして、僅かに加藤一夫の諸短篇と江口渙の長篇『戀と牢獄』があつた他には、斯の如き取材の作品は我國には生れなかつたものである。

中西伊之助の『この罪を見よ』は出版即日、不幸にも禁止にあつて、闇から闇へ葬られて終つたが、彼の達筆は益々冴えて來るのを覺える。加藤一夫の『村に襲ふ波』は彼の一新境地を開拓せんとする意志を伺ふに、相應しい作品で、從來の慌しさから漸やくにしてゆとりのある落着に入らんとしてゐる彼の昨今を窺知するに足る作品である。

雜誌文藝戰線に現れた作品中で、最も注目すべきは武藤直治の『おしげ姉妹と母親』並に葉山嘉樹の『淫賣婦』とである。兩者ともに取材を哀れな淫賣婦に採つてゐるが、より深刻により痛切に胸を打つものは、武藤直治の作品である。その純正リアリズムに立脚して、冷靜な理智に映つたどん底の世相を、彼は落着き拂つて觀察し表現してゐる。露西亞のチエホフの踏んだリアリズムの道を、最も正しく踏んでゐるものは、この『おしげ姉妹と母親』である。葉山嘉樹の『淫賣婦』は世評最も高かつたものである。エクゾチツクな匂と、プロレタリア的氣禀とを盛り上げた作品で、初期のゴオリキイを思はせる。理想主義的リアリズムの代表的作品とすべである。

新感覺派と稱せられる一群の作家中で、佐々木茂索は最も新感覺派らしく思はれる作家である。その短篇集『春の外套』は彼の氣質をよく說明する。橫光利一、河端康成、片岡鐵兵等の諸作家中で、兎も角も相當の才氣を把持して今後も續け得るかに思はれる者は、彼佐々木茂索のみである。然しながらそれは唯才氣のみの作品であることを思はなければならぬ。プロレタリア派中で佐々木茂索と才氣に於て匹敵する作家に、林房雄がある。而して林房雄には佐々木茂索よりも、より深き教養と未來に對する敏感とがある。この點に於て佐々木は『今日の作家』であり、林は『明日の作家』である相違が嚴存する。

(三)

大正十四年の出版界に燦然として輝くものは、春陽堂發行の『鏡花全集』であらう。鏡花が紅葉門下の秀才として文壇に顏出ししてから、確に三十年は經つであらう。春葉死し風葉故鄕に匿れ、唯秋聲のみが依然として自然派の大家として殘つてゐる中に、鏡花が何れの黨派からも超然として、幾度か抹殺されんとして然かも嚴然として今日まで文壇の一角に確立して來たのは、何と云つても役の天才の然らしめる所であらう。

同時に小川未明もその獨自の地步を踏んで、廿年以上の文壇生活を續けて來た今日、『未明選集』が出版された事は、一の劃時代的な事である。大正十四年の文壇に多くの全集刊行があつた。新潮社のそれ、春陽堂、聚芳閣、國民圖書株式會社、近代社其他の刊行物があつたが、大正十四年度に記念さる可き全集は『鏡花全集』と『未明選集』の二つであらう。

既成作家は行詰りの狀態にあり、新進作家は一つとして新しきものを產み出す可き氣力に缺けて、當然の結果として文壇は沈滯と萎靡とに襲はれて始んど大正十四年の出版界はフィリスチンの橫行で

あつた。この俗衆主義の渦卷く中に、鏡花と未明の二作家の舊作が新裝せられて、市場に出現したことは正に大正十四年掉尾の一大皮肉である。一大暗示である。この意味に於て文壇は正に轉換期にあることを思はしめる。

宇野浩二が芥川、久米、等の全盛期の末に突然文壇に飛び出して、その落日の餘光を華やかに飾つたが如くに、それとは別の意味で大正十四年に於ける細田源吉の活動は、人目にはつかなかつたが、多くの收獲を殘してゐる。纖細な浮世繪式の描寫は、秋聲の老巧に白鳥の敏感を加味したやうな味ひを思はせる。中堅作家としての細田源吉の位置は、最早や何物を以てしても動かされぬ。彼の作品は現在の文壇に於て價値高く評さる可きであるにもかゝはらず、横行する俗衆主義の爲めにその怒號の中に常に埋沒せられつゝあるのは、前述の武藤直治の場合と同樣である。然しながら武藤と云ひ細田と云ひ、兩作家共に現在の我國文壇に存在する作家中で、眞に豐かなる天分を持つ少數の人達である。細田源吉は大正十四年に於て『こゝろ叫ぶ』と『はたち前』の二長篇を出してゐる。これらは佐藤春夫の『この三つのもの』佐々千之の『憂鬱なる河』山川亮の『決鬪』と共に、大正十四年度に記憶さる可き作品であることを特筆したいと思ふ。

さて最後に飜譯方面を回顧するに當つて、實に寂寥の感に打たれざるを得ない。數へ來つて僅かに、米川正夫譯の『勞農ロシア小說集』尾瀨敬止譯の『イワン・ダ・マリヤ』(ピリニャーク)馬場鐵哉譯の『遠い國』(ザイツエフ)、岡野かほる譯の『小間使の日記』(ミルボウ)原白光譯の『人間の波』(アルチバアセフ)等の數種を擧げ得るの他は、大村版の『ゲーテ全集』があるのみである。

一時飜譯全盛で我國の創作界は、殆んど全滅の感があつた往時に比すると問題とするに足りない。而かも創作界も前述の如く、決して誇り得る年ではなかつた。その量に於ては如何に多くとも、その質は驚く可き低下を示したのであつた。誤譯拙譯、出駄羅目譯の頻出する最近に於て、米川正夫、岡野かほるの如き飜譯者の譯書のみは安心して推賞し得ることゝ、その『勞農ロシア小說集』に於ても、『小間使の日記』に於ても、作品として推賞するに足りることを附加へて、玆に大正十四年小說界の回顧を終らうと思ふ。

十四年刊行の演劇書類について

武藤直治

演劇が文化的に向上した、今日以後の社會では、重要ないはゞ一種の生活必需品と云つてもよい位ひになつてゆくことは、確かに豫測されることです。今日に於いても、すでに演劇は、他の藝術一般に比較して、優つてゐることも劣らざる興味と、熱情とをもつて迎へられてゐること、古代のアテナイや、ルネッサンス期の倫敦とくらべられるものがありはしますまいか。都會的文化だけは著るしく發達した日本では三都の演劇熱が、昨今はことに著るしい發展をしてゐるのを見ます。就中、震災後の東京は演劇に對する一時の若々しい熱情や興味が、いくぶん客觀的の、研究的の調子をもつて來てゐます。幾多の小劇場が、歐米の古典的名作や新進の作品をつぎ〳〵に演出し、傍はら、日本の劇作家の作品の、ことに演出的に冒險や困難を伴なふ種類のものを好んで上演したことなどはこの研究的時代の一面を現はしてゐます。

勿論研究的時代のつねとして、そのすべてが成功とは云はれない許りでなく、企てられた計劃や、抱負が大きい割りにその收穫は甚だ貧弱なものだつたのはまぬがれませんでした。然し、新劇運動が、震災を境ひとして、さらに第二期の進展をはじめたことは覆ふ可らざる事實です。これに反して、いはゆるコムマーシャリズムの劇場では、非常に保守的な、むしろ懐疑的な、躊躇して、時代の進む方向を把捉しかねて居た傾きが、ことに十四年度に於いて見うけられました。歌舞伎十八番物とか、南北ものとか云つた、たゞたゞ保存すべき日本古劇がすでに觀客の好尚に遠ざかりかけ、默阿彌ものとその以後の新歌舞伎劇では、觀客の新しいセンセーションをよびおこすには足らず、さりとて、大膽に新劇や、新しいメロドラマを演出するにはその多くの事情が未だこれを許さない狀態にあるので、一體に躊躇し、懐疑して、小劇場や大膽な素人劇團の仕事をうかゞつてゐたらしくも見うけられます。

○

演劇に關する著書や雜誌が、この研究的の傾向を反映して、比較的に、地味な研究的態度を持してゐたことは當然でせう。いつたい演劇に關する著書や雜誌が、劇場の實際運動と不可分の、緊密な、相對的關係にあることは事實です。演劇に關する著書や雜誌等が讀書界の好尚に投ずることは、同時に、やがては新しい演劇運動が劇場中心に勃興する結果になり、新しい劇場の實際運動は、讀書界を演劇に關する著書や雜誌への興味と熱情をよびさまします。十四年度の研究的傾向は、日本古劇の飜刻や歐洲の古典的名戯曲或ひは演劇や戯曲の理論的名著の飜譯等を促がしました。それに比較して、新しい歐米の新作家の戯曲の飜譯も相當の量にのぼりましたが、日本の現在の劇作家の創作戯曲集には殆んど著るしい劃時代の作品が見當らなかつた現象に比較して、またそれらの人々の作品集の出版は平々凡々、むしろ沈滯したことは止むを得ません。

即ち一言にして、十四年度の演劇界と、並びに出版界の演劇書目には、研究的傾向に於いては價値多く努力の拂はれた年であつたが、創作的傾向、同時に創造的、獨創的、革新的氣運に於いてはあまり見るべきものがなかつたと云はれます。

演劇に關する研究的傾向の、出版界に現はれた特徴を觀察しますと第一は、日本古劇の飜刻であつて、十三年の秋に企劃された大南北全集と、默阿彌全集の第二回刊行との二種、豫約出版十四年度にはひつてからは、元祿歌舞伎傑作集の大册全二卷があります。日本古劇の歴史的研究に關しては、井原青々園氏の舊著日本演劇史の全二卷が新刷され、さらに新しく後藤慶二氏の日本劇場史や前島春城氏の近松研究序篇も新刊されました。近松巢林子の全集が二種ほゞ、新裝して刊行されたのも、廣告によればいづれも舊版に比して未刊行の若干種を採錄して特長を出したといふことでした。河竹外二氏編の世話狂言傑作集も數册すでに現はれましたし、同じく時代劇傑作集も最近第一册を出しました。院本正本日本戯曲名作大系も三卷迄刊行しました。歌舞伎十八番全集も十五年度早々刊行されることきいてゐます。

歐洲の古典的名劇の飜譯書類は、十三年度秋からの豫約刊行物での古典劇大系及び、同じく二種のゲーテ全集は量に於ける最大のものです。專門の演劇論やさらに、藝術論や演劇美學に關する飜譯書類で、我々貧乏な讀書子の食指を空しく動かせたこと、今年の如きも今迄にないことでせう。十三年度未刊行のアリストテレスの詩學をはじめ（内容はギリシャ悲劇論故、演劇書目にはひるべきもの）フォルケルトの悲壯美の哲學（悲劇論である）の新刊、ベルグソンの笑の哲學（喜劇論を含む）ブラ

ツドリイのシエクスピア悲劇の研究、ハアゲマンの舞臺藝術等の重刷、まで一寸數へたところでこの位ひです。この種類では、震災前の出版の訂正重刷もので貴重なものが少なくありません。

歐洲演劇の研究的の著作書類には、何よりもまづ新關良三氏の希臘悲劇論の大著述中第一、第二兩卷の刊行をあげねばなりません。上田整次氏の沙翁舞臺と其變遷の新刊、山本菊池兩氏共著英國愛蘭近代劇精髄の新刊、その他表現派に關する二三の小著中、北村喜八氏の表現主義の戯曲、昇曙夢氏のプロレタリア劇と映畫と音樂、神原泰氏の未來派研究の中の未來派演劇の研究なども異色ある演劇研究書目にあげられます。

また歐米演劇の古典的名作の飜譯では、イブセンの大作皇帝とガリラヤ人が新譯、ラシイヌ傑作集の企劃とその第一卷ブリタニキスの刊行等を筆頭に、その量に於いてめざましい刊行をみたのは、やはり新進劇作家、カイザア、トルラア、ハーゼンクレイフエル、オニイル、ピランデロ、モルナア、エルヴエ、ルノルマン、ロマン●ロオラン其の他の人々で、新潮社の海外文學新選、同社の現代佛蘭西文藝叢書や金星堂の先驅藝術叢書や、春陽堂の佛蘭西文學叢書劇の部、その他第一書房、至上社、プラトン社等からも、續々パンフレット型をもつて刊行されてゐます。これらが演劇及び戯曲を研究する青年たちを教養したことは一とほりではないでせう。勿論、ストリンドベルヒ、ヴエデキンド、シユニツレル、愛蘭諸作家、或ひはイブセン、ヘツベル、トルストイ、アンドレイフ、アルツイバアセフ、その他の作品の飜譯も重刊若しくは改訂新版のかたちで現はれてゐます。然し、十四年度の著るしい傾向としては、新進劇作家の作品の夥しい飜譯と、古典的名劇の譯本への新しい研究的讀書欲が色々な形ちで刺戟されつゝある氣運の醸成と、この二つの傾向を明らかに看取することが出來ませう。

現代のわが劇作家の作品集の刊行は平々凡々として、こり立てて見るべきものがありませんが、十三年度末から續いて豫約出版されてゐます『現代戯曲全集』は十七乃至十八卷で完結の豫定とかで、坪内氏岡本氏等以後新進劇作家のすべてを網羅する計劃で、いくぶん人選にはジヤーナリスティックな傾きはないでもありませんが、明治大正の代表的戯曲を、上演本位に採錄してあります。この出版も文藝界に於ける明治文藝研究の傾向と共に、現代のわが文藝乃至演劇の本質的價値や功績について、眞面目に研究し、反省する氣運の一端にふれてゐます。

單行の創作集では、岡本綺堂氏の綺堂戯曲集、中村吉藏氏の錢屋五兵衛、菊池寛氏の戀愛病患者、久米正雄氏の安政小唄、正宗白鳥氏の人生の幸福、眞山青果氏の平將門及び、玄朴と長英の二著、谷崎潤一郎氏の無明と愛染、吉田絃二郎氏の運命とその人々、秋田雨雀氏の骸骨の舞跳、以上は重なる劇作家の新著集で、この他に新進劇作家の作品集の中では、故鈴木氏の鈴木泉三郎戯曲全集、岸田氏の岸田國士戯曲集、永見德太郎氏の和蘭の花、永田衡吉氏の厩戸皇子は量と値に於いて大家の作品集に比較されるべきもの許りであります。その他に島村民藏氏の創作兒童劇集踊り熊などの特殊な戯曲集も二三種は數へられます。

○

演劇に關する研究及び創作發表の雜誌類には、新潮社の演劇新潮が十四年六月號まで、廢刊したのに對して、それに代るべき大企模の演劇雜誌はついに現はれませんでした。この種のものは演藝畫報がただ一種續刊されてゐるにすぎず、その他は同人組織若しくはそれに類似の形式をとつた比較的高級な研究的態度を持した演劇の專門雜誌には、九月號創刊の新劇、四月創刊の演劇研究、數年來續刊

してゐる所の大阪の劇壇に地盤をもつた舞臺評論、その他人と藝術、戯曲、戯曲時代等が數へられます。この他に歌舞伎座の歌舞伎、築地小劇場の同名の雜誌などは元來その劇場の機關雜誌ながらも、相當高級な研究的記事を毎號掲載します。また文藝雜誌の重なものや、中央公論、改造等には、殆んど毎號創作戯曲や翻譯戯曲を見ない月はありませんでした。

然し、創作戯曲について注意すべきは、そのあるものはいはゆるレーゼドラマの域を脱せず、あるものは唯だひたすら舞臺技巧の完美を專一に心がけると云つた有さまで、眞に演出効果もあれば、文藝的思想的內容も豐富であるところの佳篇力作が甚だ乏しかつたことは注目すべきでせう。現在のわが演劇界と、劇作家との關係ほど、不自然な、不健全な狀態はないやうに思はれましたが、昨今いくぶん演劇界の一角では、創作戯曲を眞面目に求め出し、作家もまた、舞臺技巧や演出効果を眞面目に研究する必要を反省しかけて來たらしくも見うけられます。それはまた創作戯曲や翻譯戯曲を讀む場合にも舞臺技巧や演出効果を一つ一つ味はひ、且つ想像しながら讀み得るまでの教養が讀書階級に普及しかけてきたのではないかと思はれます。とにかく現在までのところでは戯曲を讀みものとして十分味はひ得る習慣と教養とがまだまだ一般化して居ないことは事實です。

十五年には以上の傾向や、氣運がどんな風に、またどの程度まで展開して行くでせうか。一般讀書界と一般觀客との興味と熱情とがいかに導びかれて行くでせうか。（完）

美術上の出版物

一氏　義良

大正十四年度の美術上の出版物は、他の方面に比して、割合に少なくなかつたやうです。これといつてまとまつた大著作は見られなかつたとしても、少くとも、アルスとアトリエ社とで試みられた叢書や畫集の如きは特筆すべきものだと思ひます。殊に今年の五月からアルスで大美術講座が發行されたことは、わが美術上の出版物にとつて、一つのエポックを劃するものです。從來もこれに類したもの、たとへば日本美術學院の日本畫と洋畫の講義またアルスの講座と前後して、同學院ではじめた彫刻講義の如き（これらは、この春から一まとめにして美術講座とよばれてゐる）これまでの効績からいふと、かなり大きかつたにちがひありません。しかしそれをアルスの大講座に比較しますと、多くの點で格段の進歩が見えると斷言してよろしいのでせう。第一に、從來の講義が日本畫、西洋畫などの分科的になつてゐたものを綜合したことです。これは帝展にさへすでに和洋畫の區別を排し、大體に美術上の差別撤廢が實現されつゝある今日、わざ〳〵これを區分することは時代遲れにちがひありません。また研究者の要求もさうであらねばなりますまい。次に、比較的程度の高いことです。これまでは、專ら美術の初步の人にのみ必要な程度の講義であつて、少くとも常識ある現代人の修養たるには餘りに幼稚すぎました。中等學校で、すでに美術が重んぜられかけてゐる上に、高等學校としての美術は到底これまでの程度で滿足し得られないのが當然です。まして今日は美術家自身が各方面の

修養を必要とする時機ですから、すでに專門家であり、一家をなしてゐる畫家や彫刻家が、綜合的に進んだ美術常識を要求してゐることも當然といはねばなりません。そこでこれらの、現代の進歩した人々を相手とする講座を試みたのが、このアルスの大美術講座です。第三に、この講座では、流派とか、傾向とかを離れて、現代の代表的美術家を拉し來り、それ〴〵特意の專門的講義を擔任せしめたことです。そのために、これが美術上の立派なインサイクロビジアをなしてゐます。これだけのまとまつた綜合的美術百科辭典の試みもまたなかつたといつてもよろしいのです。第四に、豐富なそして鮮明な挿畫です。美術は專ら目に訴へるもので、殊にそのテクニックは讀んだゝけで理解し得べき性質のものではありません。アルスの講座は、特にこの點に注意して、その大半をさいて解說、引例の口繪、挿畫に用ゐてあります。第五に、紙質と印刷の鮮明に注意してあることです、その他珍奇な實例を集めることか、會費を低廉にすることかでも、かなりの苦心を費してゐます。要するにこの大講座が實現し得たことによつて、美術上の校外敎授が完成されたといつてよろしく、專門家も、非專門家も大いに得るところがあるでせう。おそらく今年を轉期として、美術上に一躍進が行はれることでせう。

なほ、アルスでは、今年から特に美術上の出版物に力を入れることゝなり、すでに美術叢書をこの春から刊行し續けてゐます。これまでできたものは、セザンヌ、ゴオホ、ゴーガン、ピカソ、カンデインスキー、マチス、ルツソオ等で、寫樂とミレーとミケルアンゼロとも、最近出ることになつてゐます。セザンヌは二科會の首領で、セザンヌ研究の大家である有島生馬氏の著、ゴオホは春陽會の新進中川一政氏の著、ゴーカンも春陽會の山崎省三氏、ピカソは三科の大建物として知られる神原泰氏、カンデインスキーは三科とマヴォとの流行兒村山知義氏、マチスは二科會の一代表者である正宗得三郎氏、ルツソオも春陽會の花形で、その專攻家たる足立源一郎氏の著であります。また寫樂は、仲田勝之助氏、大雅堂は小杉未醒氏、ミレーは相良德三氏、みな一粒よりの專門大家であります。その外高村光太郎氏のロダン、梅原龍三郎氏のルノアール、橋本關雪氏の玉堂と米山人なども近刊の豫定になつてゐます。全部で六十卷を第一期の計畫としてゐますから、これが完成した時には、有明堂文庫集にも比すべき一大美術館をなすといふべきです。ただ一般に讀ましめるため、價格を低廉にし、携帶に便にしたため、四六判でやゝ小形の感じを與へ、また寫眞が時として鮮明を缺くのは遺憾に存じられます。

なほこのアルスから本年出版の美術書としては、僕の西洋美術の知識もありますが、これは美術についての一般的な常識の材料に書いたものであるといふ以上に、何事も申しません。

アルスの出版物と同樣に、本年に入つて活躍してゐるのはアトリエ社です。同社はその經營者がアルスと關係あるために、異名同體のやうに思はれますが、全く別なものです。そこで發行する雜誌「アトリエ」は、昨年五月の發刊で、最初は素人の同人雜誌のやうな感じがあつて、美術家仲間でも、雜誌界でもあまり重んぜられなかつたやうですが、最近めき〳〵と發展して來ました。なにしろ美術雜誌は經營の困難なもので、これまで屢、起つても長く續きかねました、ただ「みづゑ」と「中央美術」と、また同人關係のやうではあるが「國民美術」とが割合に長く續刊してゐるに過ぎません。中にも一般からは「中央美術」が最もポピュラーとなつて發刊部數も五千前後を占めてゐます。これに對抗して「アトリエ」も今では殆ど同樣な部數に達してゐます。內容では「中央美術」はさすがに老巧な編輯振で、うまく讀者をアツトライトしてぬけめがありません。そのかはり、どこかにジャーナリズ

ムの臭が鼻につきます。「アトリエ」はむしろまじめくさくて、まだ垢拔けしかねたところがあり、當世風のはでさを持ちませんが、それだけに讀みこたへする記事は多いやうです。殊に「アトリエ」が新聞廣告費を簡減して、それだけ雜誌にかけていくため、雜誌としての勉强ぶりが玄人間に受けてゐます。なほ「みづゑ」は十年一日の如く、堅實な地盤によつて、大した部數も出さない代りに、眞面目で價値のある紹介を續け、專門家に重んぜられてゐるのは、この雜誌のため大いに喜ぶべきことです。他に最近の美術雜誌として「美の國」があります。これはもと「行樂」から變形したもので、文藝美術雜誌と銘をうつてゐます。石川宰三郎氏が單獨でやつてゐるものですが今のところ何とも云へません。ただ健全な發展を心から望む次第です。それから「國華」は美術雜誌の仲間に入れるのは惜しいほどジャナリズムをはなれて存在してゐます。最近では發行部數五百に足りないとさへいはれますが、これは、いかに現代人が高等な鑑識眼に乏しいかを語るものです。明治二十年以來續けて、文化に最も偉大な影響を及ぼしてゐる、この「國華」の將來の運命を祝福したいものです。その點で瀧精一博士と村山龍平氏とに感謝しなくてはなりません。

美術上の出版物を一わたり見ますと、中央美術社から、川路柳虹氏の「現代日本の美術界」、石井柏亭氏と西村貞氏との共譯「油繪法」橋本關雪氏の「關雪隨筆」などが出てゐます。川路氏の著書は、最も廣く現代の美術界に通曉してゐる氏が、プレーンな流暢な筆でバーズアイビュウをなしたものだけに、極めて重寶な手引です。これを見ることによつて現代の美術の姿をはつきり知り得るのは、美術家も、アマチュアも喜びとするところでせう。石井氏と西村氏の共譯は、その原著が有名なもので、油畫の研究上缺くべからざる書物ですから、何人にも役立つ知識を得らるれでせう。更に關雪氏の自由奔放な筆は、その繪にも劣らない面白みをもつてゐるものですから、氏が美しい詩想をのせて支那やヨーロッパに遊んだ印象を讀むことは、何人も好むところでせう。

岩波書店から、赤松義磨氏の「ファン・ホッホ論」が出ました。これはわれ〳〵のヴァ・ゴオホとよんでゐる。オランダの畫家の研究で、オランダ語を知り、ホッホについて特別な研究をした赤松氏のものであるだけに、今年中の權威ある研究書の一つでせう。古今書院から出た金原省吾氏の「東洋畫論」も權威のある良書です。金原氏は、專ら支那美術を畫論の方から研究してゐる篤學の士で、その方面の第一人者ですから、東洋美術の研究の盛んな今日では、稗益するところ少くありません。この書と共に紹介すべきは、大村西崖氏の「東洋美術史」で、これは國本刊行會の出版で、殆ど自費出版とも見るべく、一般には知られてゐませんが、美術學校の教授にして、東洋美術研究のオーソリティであり、博覽强記、殊にその學說の堂々としてゐる點で、東洋美術史の世界的名著だといつてよろしいでせう。

古典方面から新興美術の研究に轉じますと、まづ神原泰氏のイデア書院から出した「未來派研究」があります。神原氏の未來派の研究については、われも人もゆるすところで、殊にこれは研究論文的の態度で書いた、非常に確實なドキュメントですから、新興美術に對する學者的研究の好著としておすゝめしたいと思ひます。次に村山知義氏の「現在の美術と未來の美術」が長隆舍から出ました。村山氏の新興美術に關する地位も、今さら申すまでもありません。同氏の藝術上の見解も、これによつてうかがひ知ることができます。

なほ、その他本年出版の美術書としては、アトリエ社ではじめた畫集叢書に、ルノアール、ゴオホ、

セザンヌ、ドーミエなどがあります。これもミレー、ゴヤなどを續刊し、梶原龍三郎、中川一政等諸氏の畫集も加はることになつてゐます。この叢書は四六倍大の大判で、鮮明な寫眞版が四十枚、それに簡單な解說を加へたもので、畫集としては我國にも珍しい理想的なものです。また新潮社で出した「近世歐洲繪畫十二講」は伊達俊光氏の著でルネスサンス以來の繪畫の傾向につき、懇切に說明したもので、一般の要求に適するだらうと思ひます。

十四年の詩壇

白鳥省吾

一、主なる詩集

大正十四年の詩壇を約說すれば、これまでの旣成詩壇と呼ばれてゐる人々に詩作が寡く、ともかく新進の詩人はその量に於ては驚くべきもので、詩集も三十餘册を數へることが出來るし、稍その個性的な色彩を明らかにするやうになつた。だが旣成の詩人も、詩集の上からは沈默のやうな狀態を呈したが、かくべつ例年以上に沈滯したわけでもない。そして叙事詩、詩劇、散文詩に或る黎明期が感ぜられる。その詩集として擧ぐべきは萩原朔太郎の「純情小曲集」と百田宗治の「靜かなる時」の二册ぐらゐのもので、新進の詩人のものでは、中西悟堂の「武藏野」、松村又一の「野天に歌ふ」、松原至大の「海の愛」、小方又星の「古典的な風景」、田中淸一の「永遠の思慕」、八木重吉の「秋の瞳」、渡部信義の「灰色の藥に下がる」、萩原恭次郎の「死刑宣言」等がある。

萩原朔太郎の「純情小曲集」は、鄕土望景詩十篇をのぞいては、古い頃の詩である、大正四五年頃に彼が「詩歌」や「感情」に發表したほんに詩壇に出たての頃の詩風を思ひ出す、その頃の文語の詩は自然らしい表現ではあつたが、最近そうしたものに類する文語詩を書く心持は私達が手紙を書くときに、候文に或るなつかしい愛着を感ずるのと似通つたものではないかと思ふ。この詩集の尊いところは直情的な簡素な表現である。

百田宗治の「靜かなる時」は彼のこれまでの詩集と比して何の遜色がないばかりでなく、比較的に長いものを集めただけに、技巧と修辭が勝つてゐるが充分な力倆を示したものである。

百田君はこの詩集の內容や表現に寧ろ一の袂別したいと言つてゐるが、最近の彼の詩を見るに、思想的な强氣を棄てゝ、本然の稟質にたちかへつて、弱氣をはぐくみうたはんとする態度に出てゐる。

中西悟堂の「武藏野」は未刊の原稿を加へると第五詩集に相當する由である。これは第一詩集「東京市」などに見る晦澁な造語が洗はれたやうになくなつて、むしろ詩作の最初のころで、彼がパンフレット「詩の本」を出した時代の平明さにたちかへつてゐるが、彼の生地の淸朗な稟性を表現し得てうれしい。

松村又一の「野天に歌ふ」は、彼の第二詩集で、やはり前詩集の「畑の午餐」からひきつづいて、大和の百姓としての牧歌的氣分の濃厚なもので、社會人としての反抗意識よりも、家庭人としての惱みや喜びが愛すべき風格をもつて盛られてゐる。

これに對比して渡邊信義の「灰色の藥に下がる」は、田園生活の陰鬱、不安、悲慘に對する感情で一貫した反抗的な社會人としての叫びがある。やゝ心境の表はしかたが單調だが、農村の現實を歌つ

た詩集として、新進の異彩である。

松原至大の「海の愛」は實に春日の海をみるごとき穩やかな愛に溢れてゐるもので、詩をつくる意識といふものがなさ過ぎるほど平明に歌ひ流されてゐる、どこか家庭的な淡々しい善良さが何といふこともなく心惹かれる。

八木重吉の「秋の瞳」はこんな短い氣息を生地のまゝに飾りなく投げ出した詩もめづらしい。今詩壇の何物にも似てゐない自分自身の表現で、幼いたゞ〳〵しさもあるが、ほつり〳〵と歩るいてる詩人だ。

田中清一の「永遠への憧慕」は彼の第二詩集で、前集「生命の戰士」が、人道的な思想詩であつた系統をひいて、自分のゆく路をはつきりと意識して人生の路をすゝみゆく著者の姿が見える、早く完成しないで、勇敢に人間性の複雜さを歌ひこなして行つたなら大きい路がひらけて行くだらう。

萩原恭次郎の「死刑宣言」は最近詩壇の一傾向として可成りの眞劍さを持つてゐるプロレタリアートの心境から出發したダダイスト風の詩であつて、同傾向の人々の中にあつて頭角をぬくものである、活字の大小を自由に用ゐる詩風は嘗て平戸廉吉が外國の未來派の詩から暗示を得て試みたものであるが、萩原君のは內容としてプロレタリア意識を持つところに立場の相違がある。この表現にしろ內容にしろこれだけでは仕方のないものだが輕卒に否定も出來ないもので、作者のとしての新しい努力に期待する外はなからう。

二、三つの詞華集

詩話會は年刊詩集として「日本詩集」を今年にて七册刊行した。新人として本集に推奬したのは、相川俊孝、石川善助（仙臺）、內野健兒（朝鮮）、後藤大治（臺灣）、杉江重英、中野秀人、中村恭二郎、平木三六、福原清（神戸）、藤田健次の十氏で、これは中央集權的な文壇に比して、地方の詩人を重視してゐる一證でもある。

詩話會から二月、「明治大正詩選」が出た、明治十五年の新體詩創始以來、今日に及ぶ詩人の作品から代表的なものを選んで年代的に瞰景し得る選集である。新體詩といふものも詩史的に回顧され論評される時代になつて來てゐるので、こうした詞華集は好箇の文獻である。湯淺半月に始まり金子光晴に至る作家八十四人、一人每に代表詩と共に肖像と小傳とを附したもので、卷末に五十年間の精細な詩壇年表と出版詩書一覽とを附した。その編纂にあたれるは、川路柳虹、福田正夫、白鳥省吾の三人である。

今年になつて野口雨情等の奔走によつて、はじめて童謠詩人會が組織されて、日本の童謠詩人を網羅した機關が生れた。詩人對詩話會の如きものである。これはこれまでも生るべくして生れなかつたものが綜合されたわけで、六月に第一の年刊童謠集として「日本童謠集」が出た。編纂者は北原白秋、野口雨情、三木露風、西條八十、竹久夢二、川路柳虹、白鳥省吾の七人である。網羅された作家は三十三人で、藝術的な立場から現代の童謠詩人を批判して會員としたもので、相當世間的に知名な人でも省かれたものが二三あるが、「日本詩集」が止むを得ず二三の有力な詩人を缺いてゐるのとは性質を異にするものである。

この卷尾にある「童謠年鑑」は明治三十一年から大正十三年までの童謠に關するあらゆる事項を記述したものである。

三、叙事詩、詩劇、散文詩

今年詩壇の後半期から、やや顯著となつて來たのは叙事詩、詩劇、散文詩の機運である。

叙事詩は新しい現代詩として、福田正夫が大正十一年以來、たゆざる努力をして、今年は「筑波の白百合」を發表した、彼の第四作品である、彼の叙事詩はあまいとか通俗的であるとか批難される短所もあるが、こもかく叙事詩といふ形式を最も適當として流れるやうに表現してゆく情熱がある。あまいといふのはその情熱が、センチメタリズムになり過ぎる場合を指すのである。

叙事詩として福田君の外に書いたのは、私の「青春の地へ」だけである。これは信州伊那地方の共産黨事件を背景として、田園の青年子女の惱みを描いたものである。

福田正夫の詩劇「死の島の美女」は、彼がこれまで書いた詩劇中の最も圓熟した大作である。死の島の魔女が愛戀の美男美女の仲を裂かうとして裂き得ない三角關係を描いたもので、書きやうによつては單純なものだが、立體的によく劇化されてゐる。

福田正夫はさらに長篇散文詩といふものを試みて、「死の子守唄」「情熱の翼」の二作を發表した。「死の子守唄」はその書き方に不透明な濁りが感ぜられる。構想は大きくて筋として面白いが、新鮮味がなくて通俗的である。それに比すれば「情熱の翼」の方が內容として深さが感ぜられる。

しかし散文詩の新しい運動として認めねばならないのは、長篇散文詩と稱するものでない。長篇散文詩といふ稱呼も言へないことはないが、散文詩の本質としては詩と散文の中間に、獨立した詩形としての、詩にちかい散文詩を指すのである。わかり易く言へばツルゲエネフやボオドレールの散文詩を正系とするものである。

この意味に於て、詩壇に散文詩が最近かなり多く見えるやうになつたのは喜ばしい。

叙事詩、詩劇が注目されるにつれて、聚芳閣から出た叙事詩叢書は、すでにモリス、ユーゴー、イエーツ、ツルゲネーフの叙事詩、詩劇の飜譯を出した。

四、詩論と詩評

詩論の新しい提唱としては川路柳虹の「新律格の提唱」(日本詩人三月)がある。川路君の此の論は同君としても完成したものでないと言つてゐるが、紛亂の狀態にある口語の自由詩といふものも、見やうによつては一句が十七音乃至二十音ぐらゐに整理し得るといふことを示したところに意義があつた。しかしその詩形で、言はば定型詩風に詩が書けるかといふことになると、存外に不自然さが目立つものであることは、その作例三篇によつても、その短所があらはれてゐた、しかし、川路君は自由詩の創始者であるだけに、こうした提唱も注目に價し、ひいては岩野泡鳴、福士幸次郎などの手をつけた日本語の韻律に就いても、熱心な研究者が今後出て來なければならないと思ふ。

その後、詩壇に何々詩派といふやうに、うるさいほど新詩人によつて提唱されたものがあるが、強いて異をたてんとする程度のもので、泡沫の如く消え去り、いくらか注意をひいたのは西川勉の聯想詩派の提唱ぐらゐのものである。

泰西の詩壇の研究は目ぼしいものがあまり出てゐない、實際むかふの有名な詩人の詩などが、紹介のなかに感心されて引用されてゐるのを見ると、どこがいいのか理解に苦しむ平凡低劣な作品があつたり(それを原語でよむとしても)、何でもないことに力瘤を入れてる紹介の多いのが、ほんとうに詩のわからない語學から入門した研究者の常だ、そのなかで長沼重隆のホイットマン研究は、おさき走

りの際物ひろいでないのがよかつた。

冗漫な愚論の代表としては、日夏耿之介の「日本輓近詩潮の鳥瞰景」(中央公論六月十五日號)があつた。彼が嘗て「日本近代詩の成立」を明治文明に介在しての詩の位置から論じたのも、文明に對する見解がまるで成つてないだけに、その知つたかぶりが甚しく滑稽臭味のものであつたが、それでもその中に出てくる詩人は、彼と利害關係がないだけにまだよかつた。然るにこの「鳥瞰景」になると、彼と同時代の詩人を標價する故に、人一倍傲慢な憎惡感の強い彼は、全く常軌を脱した書き方に墮してゐた。

これはもとより詩史でもなく詩論でもなく、ゴシップ式な駄辯の羅列に過ぎない。こういふやうなものになると單に筆者の人格を疑はれるばかりでなく、ひいては編輯者の文學に對する笑ふべき無理解をさらけ出したものである。

洋樂界片々

小泉洽

□□

大正十四年度の音樂界は、近來稀に見る所の一大飛躍振りを示した。この春の樂季節までは、未だあの怖ろしい不景氣風に祟られて、沈默をよぎなくさせられてゐたのであるが、秋に入つてからといふものは、俄にデニショウ舞踊團の來朝をきつかけとして、十二月の押迫つた暮頃までも、毎日毎晩演奏會やレサイタルが、ひつきり無しに、東京市内の各所で催されてゐたのである。

恁うした現象は、音樂界の事情を能く知つてゐる我々にとつても、あまり經驗しない事柄で、いづれの方面から見るも面白いことであると思ふ。

□□

ある時の如きは、一日の裡に堂々たる音樂會が五六個所で催されたこともあつた。外國では、こんな事は少しも取るに足らない事柄であらうが、我邦に於ては大正十四年の秋の樂季節が最初の事であつたやうである。

不景氣のさ中に、こんなに方々で音樂會を催したのだから、さぞかし彼等は大損をしただらうと云ふ人があるかも知れないが、事實は之と正反對であつて、十中の八九まではプラス・マイナスか或は儲かつてゐるのが可成りあつたと云ふことである。

□□

かゝる現象は、洋樂といふものが一般に獨立した藝術であることが、充分に理解され、之を尊重する風潮が益々旺盛になつて來た證據であるとも看做されるのである。

一般の聽衆が、右の如き始末である許りでなく、音樂家も舊來の半眠的他動的狀態から、自主的研究的態度に一轉し來り、所謂お座なり式に、ステージの責任丈を果すのみで滿足しないやうになつて來た。この如き傾向は、眞面目の音樂家が、爭つてレサイタルを催さうと希望してゐる所からも、明瞭に判るのであつた。

此等の眞面目な諸音樂家の裡でも、松平里子氏、武岡つる代氏等の聲樂家を始めとして、榊原トリ

オ、ハイドウン・カルテツト、ベイトーフエン・トリオの諸氏などは、精進勇闘の最も顯著なる藝術家であつた。

□□

樂界の諸樂人をして常に鞭撻奬勵せしめ、今日の隆盛に少からぬ貢献をなした者に、音樂批評家の一團がある。此の一團は、既に十年程以前より樂界の一部にあつて、多くは西洋音樂に關する知識の紹介に從事してゐた者であつた。が、最近に至り音樂批評の本然的職能に力を注ぐやうになつてゆき、この一團の勢力は、玆に勃然として昂るに至つた譯である。

音樂批評家として今日樂界に重きをなす者には、大田黑元雄氏、牛山充氏、野村光一氏、堀内敬三氏、伊庭孝氏などである。

音樂的文献の如きも、西洋に於て又さうであるやうに、此等の音樂批評家の手になるものに傑作大著が多いやうである。就中、西洋の音樂的文献の移植に就て貢献せる者には、柿沼太郎氏、牛山充氏馬場次郎氏などがある。柿沼氏の「ベートーヴェンの一生と作品研究」及び「チャイコフスキーの一生と作品研究」、牛山氏のリリー・レーマンの「唱歌法」などは特に矚目するに足るものである。

最初の音樂辭書の編纂者としては、又伊庭孝氏の功業が擧げられる。その他の一般的音樂文學の著作家としては、大田黑元雄氏を以て、隨一人者として氏の右に出る者はあるまい。

けれども、此等の著作物以外にも數々の音樂書が刊行されて居るが、多くは飜譯を主とした著作物のみであつて、オリジナルの研究になる文献は鮮いことも事實である。之は又止むを得ないことであつて、西洋音樂は未だ我邦に紹介されてから歲月が淺いものであるからして、小說や劇のやうに充分に人々の間に咀嚼さるゝ所となつて居ないからして、怎うしても、今日飜譯的著作物が一番多いことふても當然な譯である。

けれども、之も數年ならずして段々眞の研究的著作物が、現れるやうになることは信じて疑はない次第である。

□□

音樂的文献といふも、今日の所では未だ二種類しか出てゐない。卽、音樂文學、詮り音樂大家の傳記とか、音樂の入門書及び樂曲の說明書と、第二は實際的必要上に立脚したる理論書、(之を「理論」と稱してゐるのは、少々當つてゐない。リーマンは彼の「音樂學原論」の裡に於て "Musikalische Fachlehre" と呼んでゐるが、之の方が更に適當した呼方であると思ふ。)例へば和聲法、樂典、作曲法などの著作物のみである。

けれども、音樂文化が進んで來るに從ひ、純音樂理論に關する文献がどし〳〵出版されるやうにならねば、本當であると云へないであらう。

純理論と云へば、音響學、音心理學、音樂美學、和聲法原論、理論音樂史等の諸學問に關する文献である。

甘い遊戯半分のアメリカものゝ、下手な飜譯書などには、そろ〳〵既に、一般は飽いて來てゐる今日、怎うしても此等の部門の本當の研究書が出づる必要があると思ふ。

□□

大正十四年の音樂界にとつての收獲は十月と十一月とに來朝したる二人のピヤノの大家の連續的演

奏會にあつたと云へやう。

一人は、フランスの若いピアニスト、ジルマルシエックスで、も一人はロシアのピアニスト、レヴキッキーであつた。二人とも各天分の豐かな藝術家で、前者は卽ジルマルシエックスは心の人、後者は技巧の人として特異な方面を持合せた者共であつた。

由來、日本人は、西洋音樂に用ひられてゐるやうな樂器に就ては、全然經驗のない人種であつたのであるが、それでもヴァイオリン種の樂器や、笛類の樂器などの取扱方に對しては、多少日本音樂の方のそれ等と近似したものがあるので、全く途方に暮れるといふやうなことは無かつたのである。けれども、ピヤノやオーガンの如き有鍵樂器になると、日本人は全く經驗したことのない樂器であつたので、今日の如き洋樂隆盛の時代に於てさへ、未だこの樂器に對する取扱方——云ひ換へれば演奏法に狎れないのである。

されば、外面から之を觀察すると、ピヤノやオーガンのやうな「和聲」を奏出することを主にした復雜極まる樂器は、日本人のやうな單順な旋律のみしか知らない國人にとつては、あまりに復雜過るが故に、之を演奏し得ないかにさへ思はれる位であつた。

それ程、今日の樂界には、眞のピヤニストといふ者が居ない。否、てんで、ピアノを彈いても、ピヤノの音が出てゐない。

□□

かゝる貧弱極まる今日のピヤノ界にとつて、上述の如き二大樂人が相次いで來朝したことはいづれの方面から見るも慶賀すべき事であつた。

多くの日本人は、ピヤノよりもヴァイオリンのあの肉感的な音色を愛するといふことは、ヴキクタレコードのヴァイオリンの諸大家が、日本に來た時の、あの熱狂振りを見た丈で一目瞭然たるものがあらう。それだのに、未だこのヴァイオリンの演奏家にも、之と見るに足るべき人が出ないのも不思議な事である。

ピヤノやオーガンやヴァイオリン、或はチエルロ音樂よりも、未だ稍取るに足る音樂的部門は聲樂であると思ふ。

けれども、之も矢張り西洋人の記方を、猿のやうに模倣するといふ以上に、日本人獨特の唱歌法といふやうなものも、工夫されるまでに至つて居らないのである。

今日の音樂界を代表するものは、そんなものよりも、ハーモニカにあるやうにさへ見える。

□□

怪しい半音も出せないやうな弄具によつて、下らない音樂の一節を吹奏する丈が、西洋人も三舍を避ける程度まで熟達してゐるとは、ラオコンならねど泣いて良いのか笑つていゝのか判らないことである。

然し、これ等の幼稚極まる遊戯に非ざる眞劍な藝術的分野にあつても、新らしい年と俱に將來ある代表的の藝術家が、續々と現れるに相違ないと信じてゐるのである。漫然と唯しか、自分獨りが信じてゐる許りではない。事實の上に於て、着々と眞面目なる藝術家等が、生命がけで太陽の一路をめがけて進んでゆく有樣がまざ〳〵と見られるといふのは、何んと嬉しいことであらうか。

今日の音樂文化は、これ等の眞面目なる藝術家と眞摯なる音樂批評家の手に仍つてのみ、健全なる

發達が就げらるべきであつた。決して從來のやうに、二三の羅馬法王的の樂壇の寄生虫どもによつて、蔭ひさるべきでは無かつたのである。

□□

音樂教育の方面も、着々とその眞摯なる研究と努力とが爲し就げられつゝあつた。特に毎夏の休暇を利用して、山本正夫氏、草川宣雄氏、小泉洽氏等の人々が、各地方々々の講習會に列席して、學校音樂の改善に努力してゐるのは見遁すことが出來ない。

作曲界もやうやく流行を極めてゐた薄つぺらなる童謠曲から、一歩を進めた作品の創作に指を染めるに至つて來た。此等の作曲家の裡に於ても、山田耕作氏、草川信氏等の如きはその運動の急先鋒を爲してゐる。

樂界の消息は、未だ之丈ではない。蓄音機の世界、ラジオ音樂界、日本音樂界などに就ても語るべき多くのものがあるけれども、紙面が盡きたから筆を擱く。

十四年の教育界を顧みて

原田實

一

遲々として進境の見えないのが常で、凝固し切つて睡つてゐるのではないかとすら門外の人々には見えさうな、我が國の教育界にも、その領域の内に立つて、具さにこの一個年が辿つて來た跡を顧みて見ると、そこにも、向上への生みの苦しみと見れば見られる事柄のなか〳〵に少なくなかつたことが思はれる。

一々の事象に就いて具さに觀察して見ると、見るに從つて、それが直接になり、間接になり我が國の教育事業なるものゝ如何に貧弱なるものであるかを證據立つてゐるものであると同時に、またそれらの事象盡くが、その貧弱なる現在の狀態に滿足し得ないといふ謂はゞ自覺々醒の母胎から發生した事象であつて、官僚も民衆も、おしなべて國民が、兎も角も教育事業をこのまゝに捨てゝおいてはならぬといふことを漸次感知し自覺するに至つて來てゐるといふことを證據立てゝをらぬものはないといふことが、了解される。

この意味に於て、一面現狀の貧弱さに心たまらないとともに、他面また多少の樂觀が出來ぬではない次第である。卽ち、眞の覺醒に依る革新への悶きと言はうか、革新前夜の希望を交へない混沌と言はうか、兎もあれ、本年度の教育界各事象を通算相殺して、混沌のうちに少しく曉の薄明を感じ得ることは確かであると言へよう。

二

文政の當局者は、相變らず無理解な鈍頑な頭腦を擔ぎつづけて、或は思想取締りと稱して高等諸學校の學生の間に芽生えた社會科學の研究を阻止したり、或ひは二三地方において普通教育に於ける學校教育上の新しき試みを抑制したりして、その年中行事を怠りはしなかつたが、然しながら、それも彼等當局にとつては、せい一ぱいの神經質と愚直とを以て教育事業を愈々益々大切なものに考へてそれに罅隙や失態を出來すまいとした餘りの所行にほかならぬものであることは、所詮疑ひなきところ

である。

往々これ等を或る思想的背景を持つかの如く例へば或る主義に依る所行であるかの如くに見ようとする向きもあるやうであるが、私はさうは思はぬ。なぜならば、彼等は決して思想上の主義や信念を持つほどに素朴でもなければ眞摯でもないものだからである。彼等は、官僚主義なり右傾思想なり乃至愛國主義なりを飽くまで維持し固執するといふ如き人々ではない。

そんなみづ〳〵しさ誠實さは、元來彼等の親類でもなければ緣者でもない。彼等はその日暮らしの事勿れ主義一點張りであるのだが、その彼等が自分の仕事たる教育事業を愈々益々大切なものだと考へて來た結果、その「その日暮らし」がそれに應じて神經過敏になり戰々競々の度が烈しくなつて、ひたすらに過ちなからんとせるところから、それ學校で芝居をした、これは一大事だ、それ一二の學生が社會主義といふ字を書いた、共產主義といふ言葉をつかつた、これは一大事だ、それ一小學校が机の並べ方をかへた、これはとんだことだ――といふ風にあはて騷ぐといふ次第であつて、これもまた、教育事業の大切であるといふことに對する彼等の自覺の具體的一證であると思へば、そしてまたそれシキの彼等の阻止や抑制や禁止やに依つては新しい力はとても凹み死するものでないことを思へば、敢へて腹を立てるまでのこともないではないか。試みに、今年、學校劇や子供の音樂が、彼等の禁止命令に依つて、果してどれだけ死んだらうかと、考へて見たら思ひ半ばに過ぐるものがあるだらう。

三

軍事教育とてもさうである。愈々今年の四月から實施されたのであるが、やがて早晩、幽靈よりも淡く立消えになるにきまつてゐる。が、これもまた、政府當局と一部の國民が教育を大切なもの、このまゝ捨てゝおいてはとんだことである、何らかの新手段を講ぜねばならぬと考へた爲めに現はるゝに至つたものであるからして、出來るだけ犧牲を少なくする工夫を講じつゝ、私たちは暫くだまつて見てゐたい氣持ちがするのである。

軍事教育の不都合なものであることは、識者の等しく理解して居るところで、既に多くの批評が確乎とした結論を構み立てゝゐる。精神的內容の上からは勿論、法規の上からもまた、甚だよろしくない。自分も曾て二三の機會に於てこれを論評したのであるが、文部大臣が斯く陸軍大臣に隷屬する現役將校に自己所管の學校における教練（政府當局は軍事教育といふ言葉を甚だ嫌ひであつて、いつも教練といふやうだ）を擧げて委任したといふことは、文部大臣が己れの教育機關に依つて養成し乃至は己れの權限に依つて任命したる教師の力にては教練を全うし得ないと自覺した結果であると見ねばならぬものである。大臣自ら既にかゝる意味のことを告白してゐたのであるが、さらばこれは、文部大臣が教育上の自信を失うたのであつて、文部大臣は一國の教育學藝及び宗教に關する事務を管理するといふ官制の規定を守り得ぬものであるからして、法規が既にこれを許し得ない。卽ち彼は須らく桂冠して罪を皇帝と國民とに謝せねばならぬものである。

法規の上から言へば、陸軍海軍の諸學校すら當然文部大臣の管理に屬すべきものであるのに、それが文部大臣の權利でも義務でもあるのに、そんな自己の地位には盲目にて、更にまた自己の責任でもあり權利でもある教育の一部を割いて陸軍大臣の管理に移管せんとするが如き失態を敢へて演じてゐるやうな文部大臣に、國民精神の作興などゝいふことが論じられたり計畫されたりして、それで果していゝものかどうか、そんな力倆が期待されるかどうか、抑もこれからしてが問題である。

が然しながら、これも既に述べたるごほり、文部大臣が兎も角も教育こいふ事業を重大視して、ごても自分の力では全うし得ないものごして、陸軍大臣に援助を乞うたのであつて見れば、これまた教育がその向上の一歩を歩まうごして惱んでゐるごごの一證ではあるまいか。

四

軍事教育の實施については、その蔭に軍閥の勢力擴張ごいふ蔭武者が働いてゐるごごろ見られてゐる。私も、たしかにそれがあるごごろ思ふ。が然しながら、それよりももつごごろ甚だしい原動力は、やはり、軍事教育に依つて、青年の精神的弛緩の匡救が出來る、即ち質實剛健の風を青年の間に作興するごごが出來るごいふ迷信そのものにあるごごろ私は信ずる。ほんたうに心の底からさう信じてゐる人々、然かも誠實な人々、が少なくないのである。これは軍人のうちには殊に多い。が然しそれは言ふまでもなく迷信だ。それは教育の本義を理解しないごごろから來る迷信であるのである。

然し、軍事教育が精神上から見て、即ち教育の本義の上から見て、不都合のものであるごいふごごは、既に各所に論斷されてをるから、今一々ごゝには論じないが、果せるかな最近の小樽高等商業學校に於ける極めて常識的なる（然り軍人に取りては極めて常識的なる）演習想定によつて、軍事教育が如何に非教育的な不都合な要素を含んでゐるものであるかの一端が先づ以て暴露された。この事件は、陸軍、少なくも學校に配置されてをる軍事教官には一種の反省の機會を與へたごであるごごろ私は確信する。そしておそらくは、教育の如何なるものであるかに就いての理解に向上一歩するの機會にもなつたに違ひない。

私は、曾て軍事教育の計畫された當時、この問題の批評を試みたうちで、

一體、この軍事教育の案が實施せられて、日本全國津々浦々の諸學校に現役軍人が教師ごして赴任し、教員室の一員ごなり、生徒學生ごごろ接觸し、社會の實狀に觸れるに至るならば、それが如何に人間生活上に於ける軍力の位置に就いて自覺なき輩であつたにせよ、それこそ眞の社會教育によつて、己れ等の考へてゐるごごろ、即ち特定の人々よりなる軍隊ごごろ一般社會を混同してこれを同等に取扱はんごしてゐるごごの、謬りであるごごを自ら氣付くに至るであらう。而してその施す軍事教育なるものに、必ずや豫期せざる變化が來るであらう。それは、今日豫後備將校がおのづから實證してゐる。

今日豫後備將校が文政當局から不信任扱ひさせらるゝに至つてゐるのごごろ同じ運命を、再び現役將校が繰り返へし重ねるに違ひないのだ。こゝに至れば文政當局は、自分の繩で自分の首を絞めるごごろ同じ結果になる。これは彼等の自滅であるごごろ同時に、正しき意味に於ては彼等に眞の覺醒を促す機會ごなるごごであらう。また現役將校並びにこれが背景をなす軍事當局に對しても、同じく覺醒の機會を與へるごごになつて、この點だけを單獨に考ふれば、必ずしも、この思ひつきを一つ實施せしめて見るごごも亦無意義でないではないかなごごも考へられぬではない、云々。（大正十三年十月十五日發行『教育時論』所載拙稿「軍事教育問題の批判」）

ごごろ述べたのであつたが、實にこの小樽高商事件のやうなのを繰返してゐるうちに、彼等もやがて本當の教育、即ち生命の培育、に對して眼が開いて來るに違ひないのである。なぜならば、前述するごごろ通り、彼等も亦教育の現狀を改めてよき教育を行ひたいごごの欲望を心のうちに持つてをるものであるには違ひないのだからである。

五

然し、この今年から行はるゝに至つた不都合な軍事教育をば、かなり少なくない一般無識の（聰明でないといふ意味）正直な人々が贊成してゐることいふ事實を、見逃すことが出來ぬ。これは何故であるか。

が、これも亦要するに、一般の人々が教育は大切なものだ、從來のやうでは不安心でならぬ、何とかしてこれを一新してその効果を擧げるやうにせねばならぬと、衷心から思ひついて居る結果、なるほど軍事教育を課したならば教育の革新充實が見られるだらうと漫然考へるに至つた爲めにほかならぬ。事につけ物につけ、常に因習的な無批判な動き方をせないではゐられない彼等にとつては、これまた止むを得ない道順ではないか。卽ち軍事教育にたよつたといふことは選擇の誤謬であつて正さによろしくないが、兎にも角にも、軍事教育にすらたより出してゐる彼等の內心の教育改善の要求は、これを十分に認めねばならぬ。蓋し、彼等に軍事教育の教育的意義如何を實感せしめさへすれば、彼等の誤謬を改めしめることは、おのづから可能だからである。

卽ち、彼等の軍事教育贊成もまた、革新前夜の一種の混沌的現はれとして寬大に許容すべき性質のものではないか。こゝに於てか、再び繰り返すが、軍事教育に對しては、出來るだけ犧牲を少なくする工夫を講じつゝ、暫く成り行きを見るのも一法ではないかと。燈火の將さに消えんとするや光り少しく明るくなるのが、世の常である。

六

私は文政當局者の小心な抑制禁止のたぐひや軍事教育の實施やすらに、なほ人々が教育を革新してよりよき効果を擧げるやうにと求めあせつてゐることの證據の見られることを說いた。その他の本年度教育界の事象、例へば、公民教育乃至成人教育の創始や振興やの運動、高等小學校改善の主張、義務教育年限延長の叫び、議會に於ける教育革新の建議案、女子高等教育擴張の運動、師範學校改善の主張、少靑年男女の體育熱、教育費國庫負擔額の增額、學習本位教育の主張並びに傾向、入學試驗撤廢の叫び並びに運動等、皆これ、人々が教育事業の直接關係者たると一般民衆たるとを問はず、おしなべて國民がよりよき教育を求むる要求の實證ならざるはない。

これら個々の主張や傾向や運動やの內容は、皆それ〴〵尤もな然し解りきつた事柄に屬するので、わざにこゝでは煩雜を避て論じない。ただそれらの主張や傾向や運動には、その熱度に於て、またその深刻さに於て、薄弱なところ乃至不明確な點なごに就ての差があるのみで、それらの事象がともにともに教育革新の前夜における混沌を形成しつゝそれ〴〵の役目を働きつゝあるものであるといふことを指摘しておくに止める。

激情を暫し抑へて、少しく呑氣に構へれば、我が教育界は先づ樂觀していゝといふこころであらう。風船玉は急激に吹けば吹くだけ鮮やかに腫らむが、人の生命の生長はさうは行かぬ。あせると逆戻りが多い。ゆつくりと歩まねばならぬのも據處あるまい。（十二月三日）

十四年の新聞

坂口二郎

一部の批評家——殊に新聞社の以外に立つ人からは、今の新聞も遂に行き詰つてゐると言はれながら

ら、さて新聞當事者から見れば、ソレが何うにも動きのとれぬ嫌ひがある、畢竟新聞事業の經營方針、即ち營業化からくる結果に相違ない、多くの民衆を相手に『客ごり』氣分で新聞を作らなければ、民衆の方でも一向見て呉れぬ世の中に、理窟を何うこね廻はしたところで、新聞が急に變はらう筈はない。

大正十四年の新聞を見ても、勿論殊更らに新らしい傾向といふやうなものがある譯はない、『朝日』が訪歐飛行機の一件から、目立つほどに大字を使ひ、同時に集中主義をとつた爲めかして、各新聞とも又候大字を使ふ傾きを見せた、本來『東日』は集中主義で行つた新聞で、殊に夕刊などには、今日もその面影があるが、然し十四年の新聞だけで言へば、むしろ『朝日』にその色があつた。

夕刊の裾の方にある各紙の短言短評と謂つたやうなヤツは、讀者や一般批評家側から、近年特に攻擊をうけた形跡があるが、多少とも改善せられて、少くとも所謂危險思想の酵母視せられることを避ける風がある、然しおよそ現代の新聞において、あの短評ぐらゐ現代式、現代風なものはない、時としてアレが現代そのものゝシンボールであるかの如く見える感がある、輕薄とも皮肉とも、自暴自棄的だとも言はずばなるまい、長いものを讀む忍耐のない人、ソレを書きつづるだけの絡つた思想や批評のない人が、自他の利害一致から、アゝしたものを作り、作られて居るやうな氣がする。

『續きもの』に對する各新聞社の注意は、矢張り營業方面からくる趣向に基調を置いて、相當に周到である、が、この方面でも、從來の講談では行かず、と言つて、探偵ものでもあきたらず、結局昔ものを今やうに書きおろして行くのが流行してゐる『朝日』の落花の舞を始め、同じ作者がその他の新聞に書くもの、或は『報知』の太閤、若しくは富士に立つ影――ある意味では『日々』の大菩薩峠までも、今更らの作物ではないとしても、前記の傾向を見せたものと言へば言へぬ事もない。

經濟記事の改善に關しても、各社は相當に注意をはらはれて居る、コゝでも『朝日』の經濟欄が、他を引きずつて居る形がある、然し多少と言ふだけで、各社とも目立つほどの改善も新工夫もないのは、この方面の記者になほ大なる天才が出ない結果であらう。

社會部の記事は、數年前にくらべて事件もの、又は警察だねを輕く見て、所謂よみ物に苦心する傾向があるが、正直によみ物を書き、或は採取することゝ、今の新聞が各その記者に求むるところには、大なる衝突がある、自然、おもしろいと思ふほどのよみ物を載せるものは少ない。

遂に政治部面を見ると、およそ今の新聞記事中、政治部面の材料や書きぶりほどおくれて居るものはない、既成政黨を相手に、時代おくれの政治家達を友人にして生活する結果かも知れぬ、この方面は所謂營業政策と多少は懸けはなれても宜い筈であるから、今少し各社の政治者記がお互ひに識見と自重とを以てのぞんだら、今少しは改善、進歩の跡が見えさうにおもふ、この點は特に各社の政治記者に要望するところである。

末筆ながら、新聞の綜合編輯といふものは、『讀賣』の試みによつて、全くその缺點を暴露したかの觀があつたが、同紙自から最後には多少その方針を緩和せられた形跡があつた、社會部だねの趣きを異にする西洋の新聞から思ひついて、直譯的に綜合編輯とかを試みても宜い筈はない、結局、夕刊の一部にその日の主なる記事を綜合的に配列するぐらゐのことで解決がつくかも知れぬ。

十四年度の主なる出版圖書

【社會】

著者	書名	發行所	定價
ルイスブデイン 山川均譯	マルクス學說體系	白揚社	二、五〇
木村靖二	日本農民騷動史	二松堂	四、〇〇
横濱社會問題研究所編	新カント派の社會主義觀	岩波書店	一、六〇
森戸辰雄	青年學徒に訴ふ	改造社	二、〇〇
栗城精一	米問題と農村	丁未出版社	一、五〇
民友社	憶富猪一郎國民小訓	人文會	、八〇
ジャン・ジャック・ルソオ 平林初之輔譯	民約論	新潮社	二、〇〇
クロポトキン 中山啓譯述	田園・工場・仕事場	有斐閣	一、〇〇
河田嗣郎	社會問題大系(第一)	聚英閣	二、七〇
パーネス 新明正道譯	社會學と政治理論	白揚社	二、八〇
マックス・ベーア 西雅雄譯	古代の社會鬪爭	白揚社	一、八〇
ハインドマン 山川菊榮譯	階級鬪爭の進化	白揚社	二、五〇

ウエルネル・ゾンバルト 田中九一譯	社會科學大系(二ノ一) 奢侈と資本主義	而立社	三、五〇
ベンジヤミン・キツド 佐野英譯	社會科學大系(二ノ二) 社會進化論	而立社	四、〇〇
ユリアン・ボルハルト 水谷長次郎譯	科學的社會主義序論	同人社	一、六〇
ウエルネル・ゾンバルト 森戸辰雄 細野三千雄譯	勞働運動の理論と歷史	同人社	一、六〇
佐久間原譯	マルサス人口理論	早稲田大學出版部	二、八〇
田所輝明	歐洲社會運動史	白揚社	二、〇〇
砂川寛榮	日本家族制度史研究	中文館	二、五〇
西村文則	水平民族史物語	中央出版社	一、七〇
那須皓	公平なる小作料	岩波書店	、三〇
小酒井不木	近代犯罪研究	春陽堂	二、三〇
富士辰馬	新興露國の種々相	白鳳社	一、八〇
奥むめお	婦人問題十六講	新潮社	二、五〇
土田杏村	社會哲學原論	內外出版	四、六〇
高田保馬	階級及第三史觀	改造社	二、八〇
守田有秋	自由戀愛と社會主義	文化學會	一、〇〇
ミルコーテイン 河西太一郎譯	社會主義と農業問題	同人社	一、八〇

	同人社	二、〇〇	
カアル・カウツキー 河西太一郎譯	農業の社會化	改造社	二、五〇
河田嗣郎	農政四十三講	岩波書店	二、五〇
氣賀勘重	農村問題	自疆館	一、六〇
藤田軍太	小作爭議の研究	新潮社	一、五〇
高畠素之	社會問題辭典	アテネ書院	五、〇〇
高畠素之	社會進化思想講話	同人社	一、九〇
井口※親	ローザ・ルクセンブルグの手紙	大鐙閣	一、五〇
ヴヰルブランド 赤松要譯	カール・マルクス研究		二、〇〇
杉山榮	社會學十二講	新潮社	二、五〇
永井享	婦人問題研究	岩波書店	三、二〇
山川菊榮	婦人問題と婦人運動	文化學會	一、〇〇
タウシッグ 長谷部文夫譯	勞働問題	弘文堂	二、〇〇
布施辰治	復興計畫と住宅對策	自然社	一、五〇
	同人		三、五〇
シドニー・ビアトリス・ウエッブ 丸岡重堯譯	大英社會主義國の構成	白揚社	二、五〇
石川三四郎	非進化論と人生	同人社	二、五〇
大原社會問題研究所編	十四年度日本社會事業年鑑		二、五〇

	新光社	三、〇〇	
平野學	近世社會思想とその運動	更生閣	四、三〇
波多野鼎	社會思想史	新潮社	一、二〇
アルビオン・スモール 高畠素之譯述	社會學思想の人生的價値	岡書院	一、五〇
デコルケーム 山田吉彦譯	社會學と哲學	同人社	一、五〇
高野岩三郎	社會統計學史研究	聚英閣	二、〇〇
隈部征夫	中間階級の研究	同人社	一、〇〇
倉敷勞働科學研究所編	勞働科學研究	內外出版	七、〇〇
田崎仁義	支那古代經濟思想及制度	大阪屋號書店	五、八〇
宇高寧	支那の勞働問題	白揚社	二、〇〇
青野季吉	無產政黨と社會運動	アテネ書院	一、六〇
アーサー・レウ井ス 高畠素之譯	社會學講話	文化學會	一、〇〇
淺野研眞	インターナショナル發達史	同上	一、〇〇
安部磯雄	產兒制限の理論と實際	希望閣	、七〇
稻村隆一	農村問題の現在と將來	實業之世界社	二、五〇
荒畑寒村	受難のロシア	希望閣	一、八〇
スコット・ニアリング 角田敬三譯	大資本の制覇		

同人社　四、五〇

大原社會問題研究所　大正十四年日本勞働年鑑　岩波書店

アーノルド・トインビー　芝野十郎譯　十八世紀英國產業革命史論　有斐閣　三、〇〇

河田嗣郎　社會問題大系　同文館　三、二〇

北澤新次郎　無產階級運動と資本主義　內閣印刷局　二、二〇

內閣統計局編　大正十二年日本帝國人口動態統計摘要　非賣

佐田弘治郎編　農勞露國研究叢書　大阪每日新聞社　四、二〇

レーニン　青野季吉譯　改譯　帝國主義論　希望閣　一、二〇

【哲學】

大村書店

ボンデルバンド　戸坂潤譯　意志の自由　改造社　二、〇〇

ウンターマン　森喜一譯　哲學思想の詩的考察　玄黃社　二、〇〇

ショーペン・ハウエル　增富平藏譯　宇宙及人生上卷　同人社　四、五〇

ツガン・バラノウスキイ　水谷長三郎譯　唯物史觀批判　新潮社　一、六〇

ニイチェ全集　生田長江譯　權力への意志下卷　岩波書店　二、五〇

哲學古典叢書　大庭米治郎譯　シラー美學論集　弘文堂　二、五〇

米田庄太郎　ヴインデルバントの歷史哲學　聚英閣　二、四〇

ギユイヨオ　井上勇譯　社會學的に見たる藝術　東京堂　二、五〇

金子筑水　藝術の本質　叢文閣　二、八〇

アンリ・ボアンカレ　岡谷辰治譯　輓近の思想　廣文堂　二、三〇

前田喜代治　精神分析學　大村書店　一、二〇

ヨハンネス・フオルケルト　金田廉譯　悲劇美の哲學　玄黃社　五、五〇

ショーペンハウエル　增田富藏譯　宇宙及人生中卷下卷　各四、〇〇　聚英閣　二、〇〇

ギユヨオ　井上勇譯　時間觀念の創成　春秋社　三、二〇

フリードリヒ・パウルゼン　伊達保美　丸山岩吉譯　インマヌエル・カント　彼の生涯とその教說　新生堂　三、〇〇

ダンテ　中山昌樹譯　饗宴（上卷）　新潮社　高須芳次郎　東洋思想十六講　改造社　二、五〇

石原純　戀愛價値論　岩波書店　一、六〇

桑木巖翼　科學に於ける哲學的方法　アテネ書院　、四〇

クロポトキン　安倍浩譯　クロポトキン倫理學　アルス　二、八〇

クロポトキン　內山賢次譯　倫理學其の起源と發達　甲子社　二、八〇

宇井伯壽　印度哲學研究　三共出版社　五、五〇

永野芳夫　論理學概論　大村書店　四、五〇

ウイルヘルム・デイルタイ　勝部謙造譯　哲學の本質　同人社　二、〇〇

佐野文夫譯　フオイエルバツハ論　一、二〇　岩波書店
朝永三十郎　デカート　二、八〇　聚英閣
リボン山田吉彦譯　變態心理學　三、八〇　文省堂
伊藤千眞三　道德哲學の發達　二、〇〇　同文館
浦口文治　ジアン・ラスキン　三、二〇　岩波書店
ライプニツツ河野與一譯　形而上學叙說　三、八〇　中央出版社
バアカー柳井和助譯　美學概論　四、二〇　人文會
ジョンスチユアートミル近江谷晋作譯　自由論　二、〇〇　アルス
ワイニンゲル村上啓夫譯　性と性格　二、八〇　第一書房
土田杏村　戀愛の諸問題　二、三〇　寶文館
芦田正喜　道德哲學の根本問題　五、五〇　大村書店
勝部謙造　新カント學派の敎育說　二、八〇　白揚社
エムベーア西雅雄譯　中世の社會思想　一、八〇　岩波書店
阿部余四郎　生命論　二、二〇　希望閣
デボーリン志賀義雄譯　レーニン主義の哲學　一、〇〇　岩波書店

【宗敎】

アーガング・キング寺澤智丁譯　高野正治譯　宗敎の發達　三、〇〇　內外書房
津田敬武　神代史と宗敎思想の發達　四、八〇　警醒社
柏井園　ヨハネ傳研究　二、八〇　丙午出版社
權田雷斧　我觀密敎發達史　三、〇〇　改造社
ステイルネル辻潤譯　自我經　二、八〇　三共出版社
比屋武安定　日本宗敎史　一〇、〇〇　博文館
帆足理一郎　宗敎哲學概論　五、八〇　四方堂
ヘンドリツク・ウイレム・ヴアン・ルーン近市子譯　バイブル物語（書きかへられた聖書）　二、八〇　玄黃社
忽滑谷快天　禪學思想史（下卷）　六、五〇　岩波書店
金子大榮　彼岸の世界　二、三〇　新生堂
山本秀煌　日本基督敎史　上卷　三、五〇　下卷　四、五〇　丙午出版社
加藤咄堂　民間信仰史　四、〇〇　博文館
石橋智信　メシア思想を中心としたるイスラエル宗敎文化史　五、二〇　春秋社
松崎實　切支丹殉敎記　一、八〇　丙午出版社
金山龍重譯　世界宗敎史　三、〇〇　寶文館
龜谷聖馨　華嚴聖典研究　五、六〇　嚴松堂

【政治・法律】

職山政達	政治學の任務と對象	有斐閣	四、五〇
牧野英一	法律に於ける意識的と無意識的	有斐閣	三、三〇
平野義太郎	法律に於ける階級闘爭	警醒社	二、五〇
吉野作造編	島田三郎全集(4) 政教史論	改造社	四、〇〇
大山郁夫	現代日本の政治過程	太陽堂	二、五〇
村瀬武比古	政治的認識の基礎	新潮社	三、二〇
西村二郎譯述（ロベルト・ミヒエルス）	政黨心理の研究	白揚社	一、二〇
永井柳太郎	世界政策十講	清水書店	二、〇〇
中村進午	法制上の女子	有斐閣	二、八〇
土橋友四郎	日本憲法比較對照世界各國憲法	日本評論社	
信夫淳平	國際政治の進化及現勢	弘文堂	三、五〇
西島彌太郎譯（レオン・ドユギー）	私法變遷論	同人社	二、〇〇
大内兵衛	現代イギリスの政治過程	岩波書店	二、〇〇
三浦周行	續法制史の研究	弘文堂	九、五〇
末川博	民法に於ける特殊問題の研究	岩波書店	五、〇〇
東郷實	植民政策と民族心理	清水書店	
安井英二	勞働協會法論	叢文閣	三、三〇
山川均	無産政黨の研究		一、二〇

【經濟】

竹田武男譯（フランツ・ジイジエーク）	應用統計學	有斐閣	六、〇〇
大山千代雄譯（トオマス・ニクソンカアバア）	分配論	岩波書店	一、八〇
古屋美貞	經濟原論	内外出版	四、〇〇
本庄榮治郎	常平倉の研究	内外出版	一、五〇
米山勝美譯（イングラム・スコフト增補）	經濟學史	早稲田大學出版部	三、五〇
鷲野準太郎譯（カール・ディール）	リカルド經濟學	而立社	三、五〇
今西兼二	我財界の過去現在及將來	中外經濟社	一、五〇
神永文三譯述（アダム・スミス）	富國論	新潮社	一、二〇
大塚金之助譯（アルフレッド・マーシアル）	經濟學原理	改造社	三、五〇
谷口彌五郎譯（ウイリアム・スアート）	經濟價値論解說	白揚社	二、〇〇
那須皓	經濟政策學の本質並に生産政策原理	岩波書店	二、五〇
山口正太郎	中世寺院法と經濟思想	改造社	一、五〇
高橋龜吉	金融の基礎知識	東洋經濟新報社	三、〇〇
高橋龜吉	未期の日本資本主義經濟と其轉換	白揚社	二、五〇

猪俣津南雄　金融資本論　希望閣　二、六〇
高橋誠一郎　經濟學史研究　大鐙閣　一三、〇〇
高畠素之（カール・カウツキー）譯　資本論解說　アテネ書院　二、〇〇
井上準之助　戰後に於ける我國の經濟及金融　岩波書店　二、〇〇
石巻良夫　手形交換所論　文雅堂　四、〇〇
高橋貞樹　世界の資本主義戰　白揚社　二、三〇
神戸正雄　租稅研究　弘文堂　三、七〇
石川準十郎（カール・カウツキー）譯　マルクス經濟學入門　新潮社　一、二〇
堺利彥　實業之世界
上田茂樹　勞農ロシアの資源及貿易　弘文堂　二、五〇
河上肇　マルクス資本論略解（第一卷第三分冊）　白揚社　一、三〇
山川均（ウンタアマン）譯　マルクス經濟學　新潮社　二、〇〇
高畠素之（マルクス原著）譯　資本論（第一卷）　日本評論社　八、五〇
太田正孝　經濟讀本　日本評論社　一、〇〇
北澤新次郎　資本主義社會主義經濟と　同人社　二、〇〇
佐野文夫（ニコライ・ブハリン）譯　轉形期經濟學　同人社　二、〇〇

【商業】

武田英一　商業通論　商學研究發行所　三、八〇
東京商科大學　商學研究　二、〇〇

【科學】

木村德藏　兩性問題と生物學　警醒社　五、五〇
竹中繁次郎　生物學上より觀たる「死」　丙午出版社　一、八〇
横山又次郎　世界の反響　早稻田大學出版部　二、八〇
横山又次郎　生物地學講話　早稻田大學出版部　三、〇〇
安成次郎（アンリイ・ファブル）譯　家畜の歷史　アルス　二、五〇
山根義行（アンリイ・ファブル）譯　昆蟲の風習　聚芳閣　二、二〇
椎名其二（アンリイ・ファブル）譯　昆蟲記（3）　叢文閣　三、〇〇
小川琢治編　温泉の研究　內外出版株式會社　二、〇〇
横田千元（フーゴーバ・フリース）譯　生物突變說　白揚社　三、八〇
松山基範　輓近の地震學　大阪每日新聞社　三、二〇
箕作新六　理論化學　裳華房　七、〇〇
中島宗治　力學　日進堂　一、五〇
平林初之輔（ピーエル・デルベ）譯　科學と實在　叢文閣　四、三〇
助川己之七　原子構造論　內田老鶴圃　二、五〇

早稲田大學出版部
安藤博 無線電話之研究 三、五〇
岩間政雄編 ラヂオ年鑑 ラジオフアン社 三、七〇

【文學】

新潮社
木村毅 小說研究十六講 二、五〇

新生堂
中山昌樹譯 ダンテ 新生・詩集 三、〇〇

春秋社
辻潤譯 デケンシー 阿片溺愛者の告白 一、二〇

春秋社
內田魯庵 貘の舌 一、二〇

アテネ書院
武者小路實篤 泉と鐘 一、四〇

新潮社
吉田絃二郎 木に凭りて 一、二〇

聚英閣
白鳥省吾 土の藝術を語る 一、六〇

改造社
若山牧水 樹木とその葉 二、〇〇

早稲田大學出版部
市島春城隨筆 頼山陽 二、八〇

アルス
島崎藤村 春を待ちつゝ 一、五〇

二松堂
日本年鑑協會編 文藝年鑑（一九二五） 二、七〇

古今書院
齋藤清衛 國文學の序說 三、二〇

柯公全集刊行會
大庭柯公 柯公全集 三、〇〇

文獻書院
小日向定次郎 ダンテイ・ロゼッテイの研究 二、六〇

文省社
本間久雄 近代藝術論序說 二、三〇

新詩壇社
宮島新三郎 明治文學十二講 二、〇〇

新潮社
早大文學部文學思想研究會 文學思想研究 二、八〇

古今書院
關根秀雄 佛蘭西文學史 四、二〇

大村書店
青木昌吉 ゲイテとクライスト 三、二〇

春陽堂
尾崎久彌 江戸歌派雜考 五、五〇

春秋社
內田魯庵 思ひ出す人々 二、八〇

教文社
小島德彌 明治大正 新文學史觀 四、二〇

早稲田泰文社
宮島新三郎 藝術改造の序曲 二、〇〇

雄山閣
藤澤衛彦 日本民謠史 二、二〇

大阪屋號
馬場孤蝶 柴煙 一、五〇

春陽堂
正木不如丘 特志解剖 二、〇〇

改造社
トロツキイ 茂森唯士譯 文學と革命 二、〇〇

柯公全集刊行會
大庭柯公 血と涙 三、〇〇

新潮社

武者小路實篤　人生を斯く考へる　岩波書店　一、〇〇
中勘助　沼のほとり　春秋社　一、四〇
荻原井泉水　芭蕉と一茶　新生堂　一、六〇
ダンテ　中山昌樹譯　俗語論・水陸論　改造社　三、〇〇
里見弴　文藝管見　春陽堂　一、二〇
島田青峰　青峯集　聚芳閣　二、七〇
海外藝術評論叢書　無産者文化論　聚芳閣　一、二〇
スピンガン　遠藤貞吉譯　創造的批評論　事業之日本社　一、二〇
尾瀬敬止　革命ロシヤの藝術　甲子社　二、〇〇
小野玄妙　佛教文學概論　至文堂　五、三〇
久松潛一　萬葉集の新研究　岩波書店　三、五〇
新村出　南蠻廣記　至上社　三、〇〇
新居格　近代心の解剖　民友社　二、三〇
德富猪一郎　蘇峰隨筆　新潮社　二、五〇
國木田獨歩　獨歩病牀錄　弘文社　一、七〇
大原外光　啄木の思想と生涯　有朋堂　一、五〇

塚本哲三編　徒然草解釋（全）　修文館　四、〇〇
沼波瓊郎編　徒然草講話　大同館　二、八〇
小林榮子編　源氏物語活釋　大同館　四、八〇
小林榮子編　大鏡活釋　至上社　二、〇五
生田長江　超近代派宣言　新潮社　二、八〇
文學思想研究會　文學思想研究（第二卷）　至上社　二、八〇
小牧近江　プロレタリヤ文學手引　弘文堂　一、〇〇
鈴木虎雄　支那文學研究　大雄閣　六、五〇
【小說・戲曲】
タゴール　佐野甚之助譯　ゴーラ　新潮社　三、八〇
前田河廣一郎　脅威　新潮社　一、五〇
宇野千代　白い家と罪　新潮社　一、五〇
谷崎潤一郎　神と人との間　新潮社　二、〇〇
正宗白鳥　人生の幸福　金星堂　一、二〇
米川正夫　勞農露西亞小說集　一人社　二、〇〇
大月隆伏　嗜欲の一皿　叢文閣　二、三〇
秋田雨雀　骸骨の舞跳　一、六〇

シンクレヤ 堺利彦譯 石炭王 白揚社 二、六〇

フイオナ・マクラオド 松村みね子譯 かなしき女王 第一書房 一、八〇

守田有秋 石に打たるゝ女 一人社 二、二〇

廉生久 人生を横きる者 新光社 二、〇〇

ボツカチヨ 梅村北明譯 デカメロン 南歐藝術刊行會 全二八〇

トルストイ 米川正夫譯 戰爭と平和 岩波書店 三、〇〇

志賀直哉 雨蛙 改造社 二、五〇

野上彌生子 新しき命 岩波書店 二、三〇

山田順子 流るゝまゝに 聚芳閣 二、〇〇

德田秋聲 叛逆 聚芳閣 二、五〇

細田民樹 逆プラトン社 二、〇〇

武者小路實篤 或る男 新潮社 二、五〇

鈴木泉三郎 お傳地獄 春陽堂 二、四〇

正木不如丘 顏 春陽堂 一、〇〇

德富健次郎 德富あい 富士（第一卷） 福永書店 二、〇〇

カアペンター 宇佐美文藏譯 愛と死の戲曲 聚芳閣 一、九〇

坪内逍遙 渥美清太郎 大南北全集（第四卷） 非賣 春陽堂

ボオルモオラン 堀口大學譯 夜とざす 新潮社 一、四〇

ハアゼン クレエフエル 小山内薰譯 人間 金星堂 、六〇

小說家協會編 日本小說集 新潮社 二、〇〇

佐佐木茂索 夢ほどの話 新潮社 、五〇

中河與一 午前の殺人 文藝日本社 、五〇

横光利一 無禮な街 聚芳閣 一、〇〇

千一谷義三郎 青草 春陽堂 一、九〇

豐島與志雄 狐 聚芳閣 一、九〇

南部修太郎 鳥 寶文館 一、二〇

長谷川如是閑 秋刀魚先生 叢文閣 二、〇〇

松岡讓 法城を護る人々 第一書房 二、三〇

高倉輝 長編小說 阪 アルス 一、八〇

山川亮 決闘 四紅社 一、八〇

狩野鐘太郎 戲曲 市場・工場 聚芳閣 、六〇

河竹繁俊 濱村米藏編 渥美清太郎 世話狂言傑作集（第三卷） 春陽堂 三、〇〇

河竹繁敏 濱村米藏編 渥美清太郎	世話狂言傑作集（第五卷）	春陽堂	三、〇〇
レイモント 加藤朝鳥譯	農民（秋）	春秋社	二、五〇
ボオル・モオラン 堀口大學譯	レヰスとイレエン	第一書房	一、八〇
シャルル・ルイ・フイリップ 井上勇譯	貧と母と子	至上社	一、八〇
マアテルリンク 山内義雄譯	モンナ・ヴンナ	新潮社	一、九〇
志賀直哉	夜の光	新潮社	一、三〇
吉田絃二郎	草路	春陽堂	一、五〇
谷崎潤一郎	痴人の愛	改造社	二、〇〇
鶴田秋聲	二つの道	新潮社	二、二〇
木村毅	兎と妓生と	新詩壇社	一、七〇
江戸川亂歩	創作探偵小說集心理試驗	春陽堂	二、〇〇
河竹繁敏 濱村米藏編 渥美清太郎	世話狂言傑作集（第四卷）	春陽堂	三、〇〇
高木辰之 黑木勘藏校訂	元祿歌舞伎傑作集	早稻田大學出版部	二五、〇〇
トルストイ 米川正夫譯	戰爭と平和（第二卷）	岩波書店	三、〇〇
ストリンドベルク 秦豐吉譯	魂の發展史	新潮社	二、二〇
ハーデイ 内田精一譯	薄命のヂユード	改造社	三、二〇

フイリップ 小牧近江譯	小さな町	新潮社	一、六〇
三島才二校訂	院本 正本日本戲曲名作大系（第二卷）	聚芳閣	五、〇〇
河竹繁敏 濱村米藏編 渥美清太郎	時代狂言傑作集	春陽堂	三、〇〇
レイモント 加藤朝鳥譯	農民（冬）	春秋社	二、八〇
稻垣足穗	鼻眼鏡	新潮社	一、五〇
佐々木千之	憂鬱なる河	新潮社	一、八〇
水守龜之助	愛に甦る	大阪屋號	
池田小菊	歸る日	朝日新聞社	一、五〇
白井喬二	富士に立つ影	報知新聞社	二五〇
下中芳岳	西郷隆盛	萬生閣	一、八〇
岸田國士	岸田國士戲曲集	第一書房	一、六〇
江馬修	羊の怒る時	聚芳閣	一、七〇
今野賢三	薄明のもとに	新潮社	一、五〇
池谷信三郎	望郷	新潮社	二、五〇
中村能二	默示する人	改造社	一、五〇
細井和喜藏	工場	改造社	二、〇〇

細井和喜藏　女工哀史　改造社　二、〇〇
ドストエフスキ　米川正夫譯　カラマゾフの兄弟（一）　新潮社　二、五〇
原白光譯　アルツイバーシエフ戯曲集　春陽堂　二、四〇
石丸梧平　梧平戯曲集　人生創造社　非賣
高木文　明治全小説戯曲大觀　聚芳閣　三、二〇
中里介山　大菩薩峠（第五）　春秋社　三、〇〇

【劇】

新關良三　演劇論集　岩波書店　一、八〇
日本年鑑協會編　一九二五　演劇年鑑　岩波書店　二、二〇
新關良三　希臘悲劇論　岩波書店　四、〇〇
上田整次　沙翁舞臺とその變遷　岩波書店　三、〇〇
菊地寛　山本修三　英國愛蘭　近代劇精髓　新潮社　一、八〇
後藤慶二　日本劇場史　岩波書店　四、〇〇

【詩歌・俳句】

土岐善麿　漢詩和譯　アルス　鶯の卵　紅玉堂　一、二〇
松村英一編　現代一萬歌集　新潮社　二、三〇
詩話會編　明治大正詩選　新潮社　二、八〇

勝峰晋風　芭蕉七部定本　岩波書店　二、八〇
薄田泣菫　泣菫詩集　大阪毎日新聞社　五、〇〇
深尾須磨子　呪詛　朝日書房　二、〇〇
川路柳虹　小曲詩集　海の微風　新詩壇社　一、二〇
福田正夫　長編叙事詩　筑波の白百合　新潮社　一、〇〇
上田敏　上田敏詩集　第一書房　三、八〇
詩話會編　大正十三年　日本詩集　新潮社　一、八〇
深尾須磨子　焦躁　新しき村出版部　二、〇〇
岡村二一　幻想君臨　抒情詩社　一、七〇
尾上篤二郎　歌集草籠　紅玉堂　二、五〇
白鳥省吾　長編叙事詩　青春の地へ　聚芳閣　一、二〇
福田正夫　幻想詩劇　死の島の美女　新潮社　一、四〇
童謡詩人會編　日本童謡集（一九二五年版）　春秋社　二、二〇
生田春月　ハイネ全集（一）の詩本　聚芳閣　二、五〇
白鳥省吾　ウイリアム・モリス譯　理想國の處女　紅玉堂　一、八〇
金子光晴譯　近代佛蘭西詩集　一、六〇

抒情詩社
小方又星詩集　古典的な風影　二、〇〇
第一書房
堀口大學譯　月下の一群　四、八〇
惠風館
鳴海要吉詩集　土にかへれ　一、〇〇
實業之日本社
北原白秋・葛原齒雨・野口雨情・西條八十選　日本童謠集　一、五〇
改造社
與謝野晶子自選歌集　人間往來　一、八〇
有朋堂
武笠三　俳風柳樽通釋　三、〇〇
明治書院
鹽井正男　新古今和歌集詳解　八、〇〇
萬生閣
高群逸枝　東京は熱病にかかつてゐる　一、九〇
萩原朔太郎　新しき欲情　アルス　二、八〇
アルス
北原白秋・川路柳虹・三木露風共編　日本現代詩選　三、五〇
有朋堂
顯原退藏編　蕪村全集（全）　五、五〇

【美術】

二松堂
美術年鑑編纂所編　美術年鑑　二、三〇
イデア書院
神原泰　未來派研究　二、六〇
新潮社
昇曙夢編　新ロシア美術大觀　一、三〇
岩波書店
植田壽藏　近代繪畫史論　七、〇〇
雄山閣
今泉雄作・小森彥次　日本陶瓷史　五、二〇
アルス
北原鐵雄編　アルス大美術講座　非賣
中央美術社
村松梢風　本朝畫人傳　二、八〇
岩波書店
赤松義麿　フアン・ホツホ論　二、五〇
朝日新聞社
朝日新聞社編　日本寫眞年鑑　二、五〇
アルス
一氏義良　西洋美術の知識　三、八〇
中央美術社
川路柳虹　現代日本美術界　二、三〇
イデア書院
相良德三　日本美術史　二、四〇
新潮社
伊達俊光　近世歐洲繪畫十二講　三、五〇
中央美術社
黑田重太郎　構圖の研究　三、〇〇

【音樂】

第一書房
太田黑元雄　洋樂夜話　二、〇〇
岩波書店
兼常清佐　音樂巡禮　二、二〇
第一書房
太田黑元雄　歌劇大觀　四、〇〇
竹中書店
樂報會編　音樂年鑑　一、〇〇
アルス
服部龍太郎　百大音樂家の生涯と藝術　三、五〇
第一書房

太田黒元雄　華やかなる回想　中央美術社　一、六〇
竹内逸　藝術音樂　アルス　二、五〇
小泉洽作曲者別　泰西名曲の知識　白眉社　二、五〇
小泉洽　グリーグとその音樂　岩波書店　一、五〇
田邊尚雄　西洋音樂講話　第一書房　二、八〇
大田黒元雄　西洋音樂入門　内外書房　一、三〇

【歴史・傳記】

鳥居龍藏　有史以前の跡を尋ねて　雄山閣　二、五〇
金田一京助　アイヌの研究　三、五〇
柳澤健　ジャン・ジョレス　改造社　一、五〇
和田萬吉譯　モンタヌス日本誌　丙午出版社　七、〇〇
島田增平編　分類日本歴史年表　文友社　一、〇〇
徳富猪一郎　近世日本國民史　徳川幕府上期（下）　民友社　三、〇〇
清野謙次　日本原人の研究　岡書院　二、七〇
永田衡吉　厩戸皇子　四紅社　二、五〇
梅原北明・杉井忍譯　イー・エル・ウイリアム　露西亞大革命史　朝香屋書店　二、五〇
小山勝清　或村の近世史　聚英閣　一、八〇

中村久四郎　歴史及歴史教育　共立社　一、八〇
關根正直　服制の研究　古今書院　二、二〇
徳富猪一郎　近世日本國民史　元祿時代（上）—政治編—　民友社　三、〇〇
矢野仁一　近代蒙古史研究　弘文堂　四、五〇
原勝郎　世界大戰史　同文館　六、五〇
大阪毎日新聞社編　大阪文化史—大大阪記念講演集—　大阪毎日新聞社　四、五〇
ジョンバチエラー　アイヌ人とその説話　富貴堂　三、五〇
柳田泉譯　フランス大革命—ギロチン—　春秋社　三、〇〇
今泉眞幸　猶太民族史　イデア書院　一、三〇
稲葉君山　朝鮮文化史研究　雄山閣　三、六〇
藤澤衛彦　日本傳説研究　大鐙閣　二、五〇
松岡靜雄　太平洋民族誌　岡書院　三、八〇
大類伸　西洋中世の文化　富山房　四、八〇
鳥居龍藏　人類學上より見たる我が上代の文化（一）　叢文閣　三、八〇
ヴェウルグロ　科學の詩人（フアブルの生涯）　椎名其二譯　叢文閣　三、〇〇
酒卷芳男　歴史以前　岡書院　五、〇〇

【地理・紀行】

山本幸雄　推理的日本地理（上卷）　中文館　一、八五
上野陽一　能率學者の旅日記　プラトン社　二、〇〇
田山花袋（史蹟名勝）　花袋行脚　大日本雄辯會　二、三〇
荻原井泉水　山水巡禮　聚英閣　一、八〇

【教育】

久保良英　兒童研究紀要（八卷）　中文館　四、三〇
長田新（ナトルプに於けるペスタロッチの新生）　イデア書院　一、二〇
關寛之（最新）　兒童心理學　廣文堂　二、八〇
仲曾根源和　勞農露西亞新教育の研究　弘文堂　二、〇〇
鎌塚扶（カーウエン）譯　幼兒教育の新研究（モナス）　イデア書院　一、八〇
福島政雄　ペスタロッチをめぐりて　三田書房　一、三〇
淺野研眞　勞働學校研究　イデア書院　一、三〇
細井次郎　若き日のペスタロッチ　明治圖書　一、八〇
神保格　國語音聲學　內外出版　二、九〇
土田杏村　藝術美の本質と教育　教育出版社　二、八〇
增田榮　道德教育の哲學的基礎　目黑書店　二、五〇
佐々木秀一　教育の方法學に就て　目黑書店　二、四〇
齋藤薰雄　教育生活と體驗　更新出版社　二、〇〇
山本壽喜太（ギューリック）譯　遊戲の哲學　富山房　三、〇〇
木村正義　公民教育　三共出版社　一、八〇
大杉謹一譯述　公民科概論　金の星社　一、八〇
沖野岩三郎　日本の兒童と藝術教育

【醫學・衛生】

長尾美知（學理と實際）　白揚社　一、八〇
高峰博　乳のみ兒の病と手當　岩波書店
藤卷良知　ビタミン　日本精神醫學會　二、八〇
葛西又次郎（ラオデユル・リボー）譯　記憶の變態　日本精神醫學會　一、六〇
葛西又次郎（ラオデユル・リボー）譯　意志の變態　日本精神醫學會　一、六〇
葛西又次郎（ラオデユル・リボー）譯　人格の變態　右文館　一、六〇
關正次（最新）　運動生理學　寶文館　二、五〇
小倉篤　最新生理學　文化生活研究會　六、〇〇
福島東作　スポーツマンの心臟　白揚社　一、五〇
高峰博　性と神經衰弱　アルス　二、〇〇

竹内薫兵 子供の病氣 實例と手當 二、八〇

【工學】

大澤一郎 櫻井省吾 建築衛生工業 早稲田大學出版部 六、〇〇

戸田海一 工業經濟論 弘文堂 五、五〇

佐野利器 住宅論 文化生活研究會 二、八〇

高尾正明 應用力學精學 パワー社出版部 四、八〇

澤莊平 最新應用電氣工學 日比野書房 二、八〇

永積純次郎 採鑛學通論 丸善株式會社 三、七〇

佐藤佐 日本建築史 文獻堂 三、五〇

工學會編 明治工業史 化學工業編 工學會 一五、〇〇

工學會編 明治工業史造船編 早稲田大學出版部 八、〇〇

小栗逞治 吉田茂夫 有用織物の製造 大倉書店 五、〇〇

三橋四郎 改訂增補 大建築學 丸善 非賣

矢野道也 印刷術（上卷） 五、五〇

【數學】

佐藤林藏 初等解析幾何微分積分學 金刺芳流堂 四、五〇

溝口好忠 立體圖學（上卷） 丸善株式會社 四、五〇

【語學】

山崎貞 新々英文解釋研究 研究社 一、八〇

井上十吉 井上フオネティ英和辭典 至誠堂 三、五〇

エー・ダブリユー・ノドレイ 入江祝衛譯 モダーン和英辭典 有朋堂 二、八〇

三省堂編輯所編 ジエム英和和英辭典 三省堂 二、八〇

【農學】

横井時敬 農村制度の改造 有斐閣 二、五〇

上原敬二 實驗造園樹木 養賢堂 四、八〇

中井五二 人工孵化法 明文堂 二、三〇

西ケ原叢書刊行會 久保田喜代太郎 陸稻の作り方 二、五〇

【兒童書類】

佐藤春夫 ピノチオ 改造社 一、八〇

神戸伊三郎 兒童の昆蟲學 東洋圖書株式會社 一、八〇

童話研究會編 千一夜物語 博文館 一、六〇

前田晁 森の梟 第一出版協會 一、六〇

山村暮鳥 地獄の門 イデア書院 一、六〇

小泉一雄（レイボルド・ヘルン）譯 支那童話集 金蘭社 一、五〇

島村民藏 兒童劇 踊り熊 東光閣 二、五〇

誠文堂

原田三夫 飛行機の巻 一、七五

誠文堂

原田三夫 汽車の巻 一、七五

世界文庫刊行會

松宮春一郎 アメリカ小學讀本（七年—八年） 一、六〇

世界文庫刊行會

松宮春一郎 イギリス小學讀本 一、六〇

世界文庫刊行會

松宮春一郎 ドイツ小學讀本（七年—八年） 一、六〇

世界文庫刊行會

松宮春一郎 フランス小學讀本（七年—八年） 一、六〇

世界文庫刊行會

松春一郎 ロシヤ小學讀本（一年—八年） 一、六〇

イデア書院

沖野岩三郎 黑船物語 一、六〇

金星堂

金子洋文 チヨコレート兵隊さん 一、七〇

イデア書院

小原國芳 岸英雄 奥野庄太郎 田中末廣 編 小學兒童文學讀本 —三年上卷— 一、五〇

イデア書院

山村暮鳥 小さな世界 一、〇〇

文敎書院

濱田廣介 童話集 ひろすけ小鳥と花と 一、八〇

文敎書院

濱田廣介 ひろすけ童話讀本 一、八〇

イデア書院

貴志敏雄 理科物語 地球の夢 一、七〇

【映畫】

東京朝日新聞社

アサヒグラフ編輯局編 日本映畫年鑑 一、八〇

【大正十五年度年鑑】

大阪朝日新聞社

朝日新聞社編 朝日年鑑 一、八〇

大阪毎日新聞社

大阪毎日新聞社編 毎日年鑑 一、〇〇

報知新聞社出版部

報知新聞社編 報知年鑑 一、〇〇

時事新報社

時事新報社編 時事年鑑 二、五〇

民友社出版部

國民新聞社編 國民年鑑 一、五〇

【豫約全集出版物】

柯公全集刊行會

柯公全集 卷六 申込期限 一四、三、五

日本評論社

通俗經濟講座 一二 一四、三、一〇

聚芳閣

日本名著大系 三 一四、三、一〇

聚芳閣

院本正本 日本戲曲名作大系 三 一四、三、一〇

新潮社

現代小說全集 一五 一四、三、三一

廣文庫刊行會

廣文庫 二〇 一四、三、三一

廣文庫刊行會

群書索引 三 一四、三、三一

アルス

アルス大美術講座 一二 一四、三、三一

國民圖書

校註日本文學大系 新しき村出版部内世界文獻刊行會 二四 一四、四、一五

世界婦人文獻 一二 一四、四、二九

世界短編小說大系	近代社	一三　一四、四、三〇
大杉榮全集	大杉榮刊行會	一〇　一四、四、三〇
世界名作集大觀	國民文庫刊行會	五〇　一四、四、三〇
鏡花全集	春陽堂	一五　一四、五、五
近松全集	朝日新聞社	一〇　一四、五、二〇
澤柳全集	富山房	六　一四、六、一〇
日夏耿之介定本詩集	第一書房	三　一四、六、
萬有科學大系	新光社	六　一四、六、一〇
創作圖案集	國民圖書	一二　一四、六、三〇
農村問題大系	日本評論社	一二　一四、一〇、一五
日本古典全集	新しき村出版部内日本古典全集刊行會	五〇　一四、一〇、三一
未明選集	文化學會出版部	六　一四、一〇、三〇
ドストエフスキ全集	春秋社ドフストエフスキイ全集刊行會	一四　一四、一〇、一〇
福澤全集	國民圖書	一〇　一四、一〇、二八
大町桂月全集	興文社	一三　一四、一二、五
大日本人名辭書	同人社内大日本人名辭書刊行會	三　一四、一二、一〇

大原社會問題研究所パンフレット

マルクス剩餘價値學說史

『剩餘價値學說史』は資本論の姉妹篇である。もとエンゲルスがそれから資本論第四卷の編成を志し、カウツキイがその並行著作として發表したもの、前者と列んで經濟學に關するマルクス文獻の二大双璧をなす。階級鬪爭的見地に立つ資本主義經濟學說の批判的史論が、吾々の蒙を啓くこと多きは勿論、それは屢々天才的巨匠の思想製作場を窺はしめる。之が邦譯は最善の意味に於て古典經濟學の理論的研究を復活し、行詰れる經濟學界の局面打開に新たな衝動を與へるであらう。「大原社會問題研究所パンフレットとして分割、刊行の筈で約四箇年を以て完結する豫定である。」

定價壹册參拾錢送料二錢毎月約一册發行豫定前金壹册一圓五拾錢（送共）同十册參圓（送共）

飜譯者
高野岩三郎
櫛田民藏
大内兵衛
森戸辰男
久留間鮫造
細川嘉六
諸氏

第一分册（パンフレット第十九册）

一、邦譯發刊に方つて＝二、例言＝三、『剩餘價値學說史』第一卷總目次＝四、『剩餘價値學說史』について（カウツキイ）＝五、アダム・スミスの勞働價値說（マルクス）

第十八册　キーンスの「幣制改革論」…大内兵衛
第十七册　資本主義ヨーロッパと社會主義ロシア……越智道順
第十六册　本邦最近の社會統計資料　高野岩三郎
第十五册　勞働黨内閣の財政策……大内兵衛
第十四册　ヴェブレンの產業組織論……北澤新次郎
第十三册　英國議會に於ける勞資の對戰……大内兵衛
第十二册　資本主義社會に於ける再生產の問題……久留間鮫造

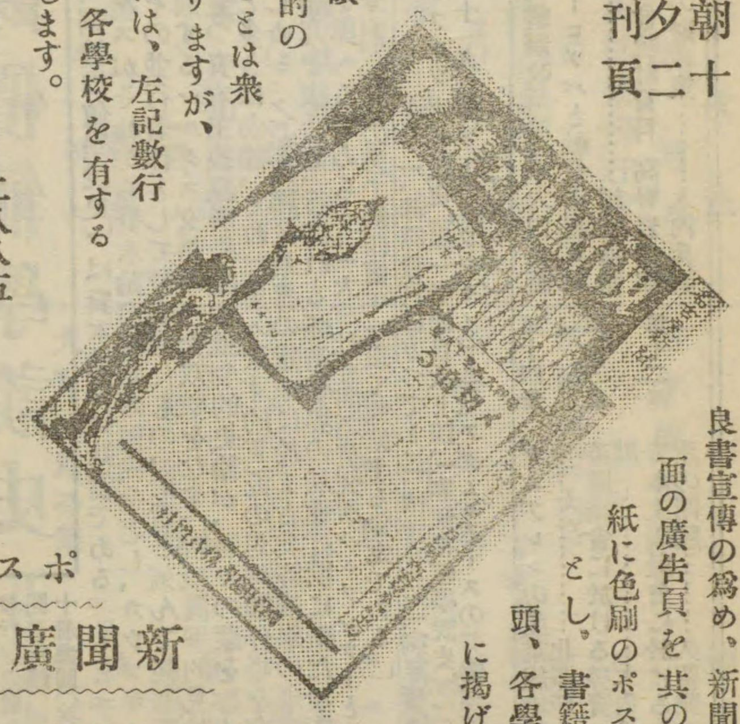
發兌　同人社　東京西紅梅町　電話大東京五八五〇　振替手京二七六五

は中部日本に於ける

其の理由

弊紙が中部日本に於ける知識階級、即ち讀書階級に絶對的の勢力を有することは衆知の事實でありますが、特に愛讀者中には、左記數行の示す書籍商、各學校を有することを誇りとします。

書籍商……二八八五
中等專門學校……二五二
小學校……五〇〇〇餘



朝十
夕二
刊
頁

良書宣傳の爲め、新聞第一面の廣告頁を其の儘良紙に色刷のポスターとし、書籍店々頭、各學校等に掲げます

ポスター

新聞廣告の

名古屋

本社	東京大阪
東京支局	東京支局
大阪支局	大阪支局
名古屋市東區宗勢町	名古屋市東區針屋町
名古屋市東區伊勢町	名古屋市東區針屋町
名古屋市北區橋町	名古屋市北區十郎町
名古屋市北區伊勢町	名古屋市北區三町

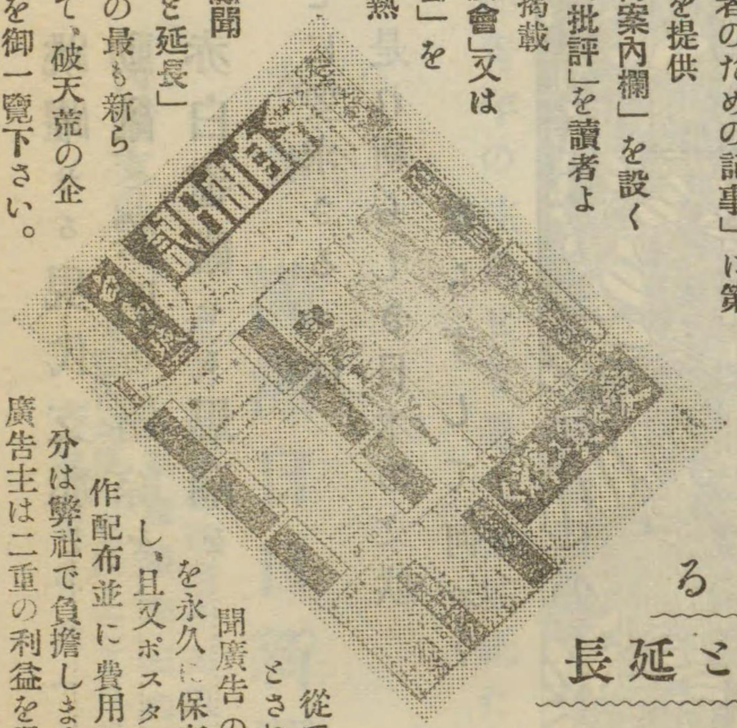
電話 四七四〇
電話銀座 四四四二
電話 四七四一
電話 四七四二
電話 四七四三
電話 四七四四
電話 四七四九
電話 四七四六

權威對絶の告廣籍書

出版界への奉仕

一、毎日「讀者のための記事」に第三面約半頁を提供
一、「新刊着荷案内欄」を設く
一、「懸賞新刊批評」を讀者より募集して掲載
一、「讀書講演會」又は「讀書座談會」を開いて讀書熱を鼓吹
一、「ポスター」に依る新聞廣告の保存と延長」

これは弊社の最も新らしい試として、破天荒の企です、下記を御一覧下さい。



に依る

保存と延長

新聞社

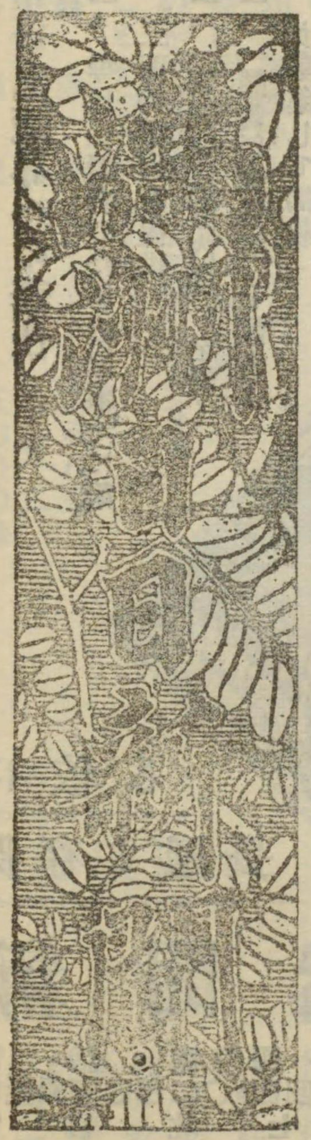
從て短いとされた新聞廣告の生命を永久に保存延長し、且又ポスターの製作配布並に費用の大部分は弊社で負擔しますから廣告主は二重の利益を得ます

日本文化の生命

朝夕刊十二頁

見よ！ 跳躍せる現代支那を……。
見よ！ 動亂と黎明の錯綜を……。
見よ！ 赤白遼亂せる思潮を……。

——そこに要求さるゝは
是れ新らしき日本の文献
ならずして何ぞ？



滿蒙にあり は

◈殖民地新聞中通信網の完成せる果た亦書籍廣告行數に於て我社は常に超優秀の位置を占む

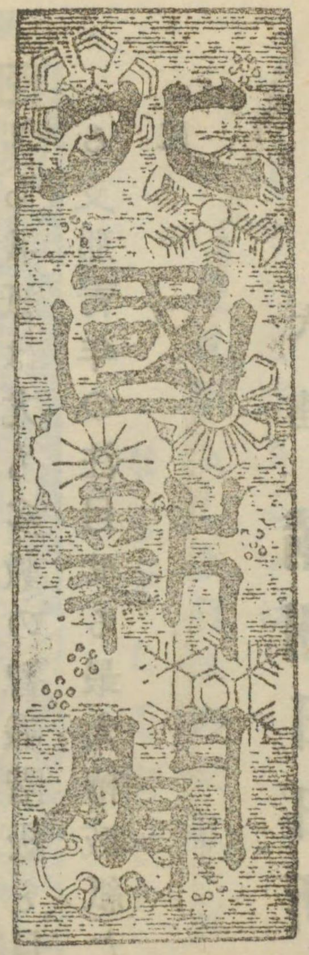
◈即ち我紙は尤も多數の智識階級と目醒めたる支那青年の注目せる最大權威紙たるが故に

大連 滿洲日日新聞社

東京市京橋區宗十郎町十一番地
電話銀座三四七〇番
大阪市北區曾根崎上三丁目一七七番地
電話北六一八四番

內國支社

北日本の太陽!!!



東京支局　東京市京橋區銀座二丁目四番地
電話銀座五三八二番
本社　金澤市南町九十三番地

技術本位の
十一屋製版所
電氣銅版
寫眞銅版
亞鉛凸版
京橋區弓町三番地
電話銀座七六一一番

河北新報

第二編　大正十四年度圖書目錄

〔發行所別五十音順〕

アテネ書院

代表者　秋田忠義

東京市麹町區内幸町一丁目五番地
振替東京六七六七五、電話銀座三七五四

著者	書名	定價
賀川豐彦	地球を墳墓として	二、四〇
新居格譯	パビーニ自叙傳	二、四〇
關寛之	兒童學原理	三、五〇
トムソン著 内山賢次譯	科學概論	二、〇〇
堀江歸一	日本の經濟的危機	三、二〇
アルソイパアシエフ 内山賢次譯	結婚三部曲	二、八〇
武者小路實篤	泉と鐘	一、四〇
カール・カウツキー 高畠素之譯	資本論解說	二、〇〇
安倍浩譯	クロポトキン倫理學	二、八〇
高畠素之	社會進化思想講話	一、九〇
マクドーガル 宮崎市八譯	社會心理學概論	三、二〇
アーサー・レウ井ス 高畠素之譯	社會學概論	一、六〇

アルス

代表者　北原鐵雄

東京市小石川區表町一〇九番地
振替東京二四八八八　電話小石川三五七〇

著者	書名	定價
前田夕暮	綠草心理	二、〇〇
土岐善麿 漢詩和譯	鶯の卵	一、二〇
大木篤夫 詩集	風光木の葉	二、〇〇
與謝野晶子	瑠璃光	一、八〇
島崎藤村	春を待ちつゝ	一、五〇
土岐善麿	朝の散歩	二、〇〇
高倉輝	女人焚殺	二、〇〇
同	阪（上）	二、〇〇
與謝野晶子	砂に書く	一、八〇
三木羅風	詩歌の道	一、五〇
萩原朔太郎	新しき欲情	二、八〇
正岡子規	子規全集	非賣
中川一政 アルス美術叢書	ゴオホ	一、八〇
神原泰同	ピカソ	一、八〇
村山知義	カンヂンスキー	一、八〇
正宗得三郎	マチス	一、八〇
山崎省三	ゴーガン	三、八〇
一氏義良	西洋美術の知識	非賣
北原鐵雄編	アルス大美術講座	
ガルシン作 内山賢次譯	紅い花	一、二〇
シエンキウ井ッチ 村上啓夫譯	麵麭を求めて	一、二〇
アマデウス・ホフマン 野上巖譯	天國と地獄の間	一、二〇
ライダー・ハガード 三好十郎譯	不死の女王	一、二〇
マンスフィルド 平田禿木譯	蜜月	一、二〇
フラマリオン著 大沼十太郎譯	死とその神秘	二、八〇
ワイニンゲル著 村上啓夫譯	性と性格	二、八〇
クロポトキン著 内山賢次譯	倫理學の起源と發達	二、八〇
平岡威馬雄譯	田園の保護者	二、五〇
戸川骨秋譯	THE ARMADA 對譯 T. R. GREEN	一、二〇

アンリー・ファブル 安成二郎譯	家畜の歴史	二、五〇
フロウア作 服部龍太郎譯	ピアノの彈き方	二、〇〇
百大音樂家の作曲者別	生涯と藝術	三、五〇
小泉洽	泰西名曲の知識	二、五〇
横山信	建築構造の知識	三、五〇
北原白秋 お話	日本の童謠	二、五〇
竹内薫平	子供の病氣	二、八〇
武井武雄	新しい刺繍圖案	一、二〇
周田松枝	リボン刺繍	一、二〇
澤本清嗣	純粹フランス料理	一、二〇

新しき村出版部

代表者　長島豊太郎

東京市外長崎村一六二
振替東京五二五四七　電話小石川七〇九九

竹越與三郎	日本經濟史	非賣
石山徹郎編	世界婦人文獻（第一卷） 本邦女訓選集	非賣
永見健一	世界造園圖譜	四、〇〇

深尾須磨子詩集 焦躁 二、〇〇
高村光太郎（エミイル・エルハアラン）譯詩集 天上の炎 二、〇〇
武者小路實篤 自選詩百篇 一、二〇

朝日新聞社出版部

（東京市京橋區瀧山町一丁目一、二、三、四番地
（大阪市北區中ノ島三丁目
振替（東京一七三〇 電話（東京銀座一一一—一七
（大阪五五〇 （大阪本局三五〇〇—三五〇五

朝日新聞社 正ちやん冒險（第四卷） 一、五〇
同 同（第五卷） 一、五〇
同 同（第六卷） 一、五〇
同 同（第七卷） 一、五〇
番匠谷英一戯曲 黎明 一、〇〇
本田美禪 三人姉妹（前編） 一、三〇
同 同（後編） 一、三〇
吉田百助 大地は微笑む（上卷） 一、五〇
同 同（下卷） 一、五〇
朝日新聞社 普選早わかり 一、三〇
藤井紫影 近松全集（第一卷） 七、〇〇
同 同（第二卷） 七、〇〇
朝日新聞社 成人教育 一、五〇
同 十四年運動年鑑 一、〇〇
內務省 運動競技全書 二、五〇
朝日新聞社 二科 一、六〇
同 院展 一、六〇
同 佛展圖錄 一、六〇
池田小菊 歸る日 一、五〇
朝日新聞社 小供服の裁ち方 一、八〇
同 十五年朝日年鑑 一、八〇
ジョージ・マクマナス 親爺教育（第二輯） 一、〇〇
前田曙山 落花の舞（前編） 一、五〇
同 同（後編） 一、五〇
朝日新聞社 ラヂオの話 一、六〇

朝日新聞社 通俗ラヂオ問答 一、六〇
同 日本映畫年鑑（大正十三、十四年版） 一、八〇
同 日本寫眞年鑑（大正十三、十四年版） 二、五〇

岩波書店

代表者 岩波茂雄
東京市神田區南神保町十六番地
振替東京二六二四〇 電話四谷五七〇、七二六七

高橋穣 哲學叢書第十二編 改訂版 心理學 一、八〇
大庭米治郎譯 哲學古典叢書(2) シラー美學論集(上) 二、五〇
河野與一譯 哲學古典叢書(3) ライプニッツ形而上學叙說 三、八〇
朝永三十郎 哲人叢書(1) デカート 二、八〇
菊池慧一郎譯 プラトンプロダゴラス 二、〇〇
桑木嚴翼 ローマ字書き 西洋近世哲學史 二、五〇
田邊元 數理哲學研究 三、五〇
谷川徹三 感傷と反省 一、八〇
安倍能成（カイケン）譯 大思想家の人生觀 四、五〇
那須晧 經濟政策學原理 第一卷經濟政策學の本質 故に生產政策原理 一、八〇
大山千代雄譯 カアバア 分配論 一、八〇
鳩山秀夫 民法研究（第一卷總則） 三、〇〇
穗積重遠 改訂 親族法大意 上製 一、四〇 並製 一、〇〇
土方成美 經費論講義 一、五〇
小泉信三 改訂 社會問題研究 三、五〇
左右田喜一郎監修、橫濱社會問題研究所編 新カント派の 社會主義觀 一、六〇
柴田雄次閲 玉蟲文一 水島三一郎 植村琢 譯 ペラン原子 三、〇〇
中村清二述 科學普及叢書第二編 一千九百二十三年九月東京に於ける大地震による大火災 、六〇
桑木嚴翼 科學普及叢書第三編 科學に於ける哲學的方法 、四〇
岩瀨慶三 三元金相論 五、〇〇
阿部余四男 實驗 實驗生命論 二、二〇

藤巻良知　榮養學全書　ビタミン　二、八〇
石原純　永遠への理想　一、八〇
慶應義塾大學編　現代思潮講演集　一、一〇
勝峰晋風　芭蕉七部集定本　二、八〇
夏目漱石　漱石俳句集　一、三〇
倉田百三　標立つ道　二、〇〇
野上彌生子　新しき命　二、三〇
上田整次　沙翁舞臺とその變遷　西洋劇場史研究　三、〇〇
新關良三　演劇論集　一、八〇
新關良三　希臘悲劇論（第一册）　西洋演劇史（第一卷）　四、〇〇
新關良三　希臘悲劇論（第二册）　西洋演劇史（第一卷）　二、八〇
トルストイ著　米川正夫譯　戰爭と平和（第一卷）　三、〇〇
植田壽藏　近代繪畫史論　七、〇〇
赤松義麿　ファン・ホッホ論　二、五〇
兼常清佐　音樂巡禮　二、二〇
寺澤智了譯　高野正治　キング　宗教の發達　三、〇〇
成瀨清　小牧健夫　獨文　近代ゲーテ論集　一、二〇
田中秀央　羅甸文法　二、五〇
井上準之助　戰後に於ける我國の經濟及金融　二、〇〇
氣賀勘重　農村問題　、六〇
那須皓　公正なる小作料　、三五
田中正義　鐵筋鐵骨建築構造の規準　二、五〇
永井亨　婦人問題研究　三、二〇
中勘助　沼のほとり　一、四〇
トルストイ著　米川正夫譯　戰爭と平和（第二卷）　三、〇〇
震災豫防調査會編　震災豫防調査會報告　第百號（甲）　關東大地震調査報文、地震篇　五、五〇
同　震災豫防調査會報告　第百號（乙）　關東大地震調査報文、地變及津浪篇　三、五〇
同　地震豫防調査會報告　第百號（戊）　關東大地震調査報文、火災篇　八、〇〇
新村出　南蠻廣記　三、〇〇
金子大榮　彼岸の世界　二、三〇
三浦周行　續法制史の研究　九、五〇
東郷實　植民政策と民族心理　二、〇〇
長與善郎　竹澤先生と云ふ人　二、五〇
新村出　續南蠻廣記　三、〇〇
島木赤彦　萬葉集の鑑賞及其批評　二、〇〇
アーノルド・トインビー　芝野十郎譯　十八世紀英國產業革命史論　三、二〇

イデア書院

代表者　高井能

東京市牛込區山伏町十四番地
振替東京一五四二三　電話牛込三六五六

日比谷圖書館にてなされた兒童讀物の良書選奬に於て四十種のうち十種は實に本書院發刊のものであつた。本書院の兒童圖書館運動の價値を裏書されたものと言へる。

小學兒童文學讀本の發刊は內容の優秀なる點に於て敎育界に多大の歡迎を受けてゐるが、尙ほ臨時國語調査會案にかゝる「新かなづかい」の採用は少からぬ反響を呼びつゝある。

小學校最低學年用の讀物は從來極めて稀であつた。本書院はそこに感ずる所あり、その方面にも已に數種の優良讀物を送つて好果を擧げてゐるが、これは極めて大事な問題と思ひ更に深重なる研究を行つてゐる。

文科大學講座の刊行。文科大學の課程に準じ斯界のオーソリチーを講師に網羅した事とて購讀者極めて多く、名に背かざる內容は智識階級のベストラインを殆ど吸收してゐる。

山村暮鳥　詩集「雲」　一、八〇
奧野庄太郎　世界英雄物語　一、六〇
鷲尾知治　ふしぎなお庭　一、一〇
松浦一　魂の故郷　一、八〇
小島政一郎　汽車の話　一、四〇
仲原善忠　日本外交史　一、九〇
北村壽夫　おもちや箱　一、四〇
神原泰　未來派研究　二、六〇
長田新　ナトルプベスタロッチの新生に於ける　一、二〇
北村壽夫　蝶々のお手紙　一、六〇
山村暮鳥　地獄の門　一、六〇

遠藤早泉　世界偉人物語　一、九〇
小原、岸、奥野、田中共編　小學兒童文學讀本　各册、五〇
沖野岩三郎　黑船物語　一、六〇
佐藤繁彥　聖サンダル・シング　一、四〇
山村暮鳥　小さな世界　一、〇〇
山村暮鳥　童謠集　よしきり　一、六〇
小原國芳　母のための教育學（上）　二、〇〇
田中末廣　國語研究書（卷十一、卷十二）　各、六〇
成城小學校研究部　お話と聽方教授資料（上、下）　各三、五〇
小山內薰　三つの願　一、六〇
福島政雄　ペスタロッチをめぐりて　一、三〇
山谷省吾　基督教の本質　二、八〇
濱野重郎　ガリバー旅行記　一、一〇
細井次郎　若き日のペスタロッチ　一、八〇
谷口武　こどもアラビアンナイト　一、二〇
山田耕作　ホームソングス　各、八〇
貴志敏雄　地球の姿　一、七〇
門馬常次　こども今昔物語　一、四〇
相良德三　日本美術史　二、四〇
ミス・ブリッヂス　英語唱歌讀本（一）　、八〇
今泉眞幸　猶太民族史　一、六〇
奥野庄太郎　こどもアンデルゼン　一、二〇
山本秀煌　聖フランシスコ・ザベリヨ　一、五〇
近藤宗男　黃金の薔薇　一、四〇
濱田青陵　百濟觀音　三、五〇
近藤宗男　シエクスピヤ物語　一、七〇
上里朝秀　祖先の文化　一、八〇
細井次郎　ゼンチエレの教育論　一、八〇
藤森淳三　婚約（メーテルリンク）　一、四〇

越山堂　代表者　帆刈芳之助
東京市牛込區筑土八幡町二十一番地
振替東京一一九五四　電話牛込一七五九

從來賣行良好であつた小說類が財界不況の影響を受け賣行不良になつたので、人生哲學宗教經濟書類の發行を企て豫想以上の好成績を收めた。

人生哲學研究會　高僧傳（上）　一、八〇
同　同（中）　一、八〇
中西伊之助　我宗教觀　一、八〇
經濟研究會　新選一萬歌集　二、〇〇
臼田亞浪　芭蕉全集　二、〇〇
同　亞浪句鈔　二、〇〇
人生哲學研究會　名僧の人生觀（上）　一、八〇
同　同（中）　一、八〇
長尾大學　禪林の秘密境（上）　一、六〇
同　同（下）　二、〇〇
江原小彌太　現實の宗教　二、五〇
岡本一平　富士は三角（上）　二、〇〇
同　同（下）　二、〇〇
長野朗　吾等世界に何を學ぶ可き乎（上）　一、八〇
堀川美哉　通俗經濟十二講　二、八〇
經濟パンフレット、第一輯　安田王國の解剖　一、三〇
同上　第二輯　成金沒落史（上）　一、三〇
同　同（下）　一、三〇
人生哲學研究會　近代人の人生觀　一、三〇
同　聖哲の懺悔　一、八〇
江原小彌太　中西伊之助　人生論十二講　二、八〇
岡本かの子　歌集俗身　二、〇〇
岡本一平　江原小彌太　人生問答　一、八〇
藤原五郎七　我を救ふ者は何處に在りや（上、中）　各二、八〇
發賣禁止

磯部甲陽堂　代表者　磯部辰次郎
東京市日本橋區鐵砲町六番地
振替東京一五〇五六　電話大手六六八七

鳥居龍藏　武藏野及其有史以前　二、〇〇
同　有史以前の日本　七、〇〇

太田亮　日本國誌資料叢書　近江　三、〇〇
同　同　丹波丹後　二、三〇
同　同　武藏　五、〇〇
同　同　攝津　四、〇〇
同　同　河內　二、五〇
同　同　和泉　一、八〇
內務省　特選神名牒　一〇、〇〇
大野雲外　古代日本遺物遺跡の研究　二、三〇
山本瀧之助　青年修養着手の個所　一、五〇
ピヤード博士　米國近世政治經濟史　二、五〇
恒松安夫譯　常用漢字　いろは新辭典　一、〇〇

合資會社育英書院　代表者　日黑甚七
東京市牛込區白銀町二九番地
振替東京七四二　電話牛込三一五一

保科孝一　大正女子國文讀本　全十冊
同　大正國語讀本　全十冊
同　大正日本文法　全五冊　九五
同　大正副讀本　ニューフアウンテンリーダース　全五冊
吉岡源一郎　リテラリー！サイドリーダース　全四冊
同　ニューメソッド　イングリッシュコンポジション　全三冊
岡部一太郎　英文沙翁物語　九〇
小林愛雄　更級日記錯簡考　三、〇〇
玉井幸助　更級日記新註　二、〇〇
同　國文學の鑑賞　一、三〇
小山正　戀史話童話　一、二〇
下山　編輯部編　補充小讀本　十二冊
藤村與六　大事宗　一〇
島田鈞一　漢文新抄　日本外史　七一
同　同　十八史略　六六
松本洪、外二名　中等漢文讀本　全五冊
保科孝一　大正漢和字典　二、三〇
湯澤幸吉郎

編輯部編　ペン字練習　現代習字帖　上、三六　下、四〇
芳賀矢一　現代文範　一、一二
同　女子現代文範　八一
ガントレット　ロンハンドレット　アントワンカンヴアセイション　フオーア　六三
メタ・ブラッデー　ヤングスチューデンツ　オヴ　イングリッシュ　英語對話集　四〇

內田老鶴圖　代表者　內田作藏
東京市日本橋區大傳馬町
振替東京一二一四六　電話浪花一三三五

川北清編　物理學（上卷）　力學及物性　六、〇〇
西澤勇志智　新兵器化學　五、〇〇
須藤新吉　論理學通論　四、八〇
山崎榮作　平面幾何學講義　三、五〇
庄司彥六　高等教育物理學計算問題集　二、五〇
佐藤充　近世無機化學講義　七、八〇
塚本又三郎
竹內時男　新原子論講話　一、五〇
助川已之七　原子構造論　二、五〇
本多光太郎　增訂改刻　物理學通論　八、〇〇

岡書院　代表者　岡茂雄
東京市麴町區上六番町五番地
振替東京六七六一九　電話四谷四三四九

左の如き趣旨の下に「民族」と稱とする隔月一回發行毎號二百頁內外の學術雜誌を十一月一日より發行す。

一、日本民族を主體とする文化史的諸研究の記錄。
一、人類學、考古學、民俗學等に關する內外學界の消息。
一、鄉土研究者殊に民間傳承採訪者の聯絡と交詢。

清野謙次　日本原人の研究　二、七〇
高木敏雄　日本神話傳話の研究　五、〇〇
松岡靜雄　太平洋民族誌　三、八〇
酒卷芳男　歷史以前　五、五〇
白井光太郎　植物妖異考　三、三〇
新村出　典籍叢談　三、五〇

デユルケム　社會學と哲學　一、五〇

大倉書店

代表者　大倉保五郎
東京市日本橋區茅場町
振替東京二三八　電話濱花四一四〇

三橋四郎　改訂增補　大建築學　非賣
八杉貞利　改訂　露西亞語學階梯　二、〇〇
饗島睦美　教育舞踊　青い目の人形　一、五〇
中山晋平曲　饗島睦美歌　學校舞踊　一、五〇
昇曙夢譯　マルコとワシカ　一、四〇
宇野彌太郎　實用西洋料理法　二、五〇

大岡山書店

代表者　新村武之進
東京市外大岡山高工前
振替東京六九八七二

柳田國男編　鄉土會記錄　二、五〇
柳田國男　海南小記　三、二〇
小野武夫　鄉土制度の研究　二、五〇

梅原末治　鑑鏡の研究　六、五〇
小金井良精　人類學研究（十二年初旬刊）

大阪屋號書店

代表者　濱井松之助
東京市日本橋區數寄屋町一番地
振替東京三七五　電話大手三七三七・四二七九

水上龜之助　愛に甦る　二、五〇
馬場孤蝶　紫煙　一、五〇
村松梢風　碁と將棋の話　一、八〇
沖野岩三郎　私は生きてゐる　一、二〇
同　人間なるが故に　一、二〇
畑耕一　怪異草紙　二、〇〇
同　笑ひきれぬ話　二、〇〇
藤本辰雄　超神の創生　二、五〇
松原寛　哲學の門　一、五〇
田中香涯　女性と愛慾　二、三〇
横山正男　洋食の食べ方と洋服の着方　一、三〇

藤澤弘　租稅の智識　二、五〇
藤澤弘　現行國稅地方稅總覽　三、〇〇
同　納稅經濟　二、二〇
同　保全會社と所得稅　一、八〇
同　最新所得稅法義解　二、五〇
同　株式配當と所得稅　二、〇〇
安河內升　倉庫證券の研究　三、五〇
同　本邦稅關及關稅詳解　四、五〇
早坂喜一郎　銀價と銀爲替　四、五〇
吉田政治　上海に於ける外國爲替及金融　二、八〇
井村薰雄　支那の金塊投機と銀相場　五、〇〇
上海出版協會調査部編　揚子江の富源と需給　五、〇〇
同　支那の同業組合と商慣習　五、〇〇
宇高寧　支那勞働問題　五、八〇
米田祐太郎　支那童話歌謠研究　一、八〇
井上十吉　井上日英會話　二、五〇

鈴江萬太郎　北京官話俗諺集解　一、二〇
下永憲次　新々實用支那語會話　一、九五
加藤鎌三郎　打碁と要領　二、二〇
野澤竹朝　圍碁先手必勝法　四、〇〇
鈴木爲次郎　村を襲ふ波　一、二〇
加藤一夫　圖書の整理と利用法　四、八〇
林靖一　北京官話ローマ字發音付　支邦語會話　一、三〇
本田清人　手輕な惣菜向　支那料理　一、三〇
同

大阪出版社

代表者　島屋政一
大阪市南區上本町二丁目二十三番地
振替大阪五八二六七　電話東二九七五

英文大阪毎日學習號編輯局　英語から生れた　現代語の辭典　一、五〇
同　英語會話　米國人のロンドン見物　一、二〇
同　英和　大大阪　一、三〇
同　英語初步より三年迄　一、五〇
同　英語三年より五年迄　一、八〇

毛利八十太郎　活きた英語の研究　一、〇〇
英文大阪毎日學習號編輯局　英語ポケット先生　一、〇〇
同　英和對譯　西洋占ひ　、二〇
名尾愈生　英語ユーマーの研究　一、〇〇
英文大阪毎日學習號編輯局　英文毎日五千語　、八五
島屋政一　大阪毎日新聞社大觀　一、五〇
同　大阪毎日評壇　一、〇〇
來海篤　普通文官受驗手引　一、〇〇
森崎善一　近代廣告學　二、二〇
島屋政一　現代活版術　二、五〇
木村小舟　現代青年文範　一、七〇
島屋政一　嘗公の晩年を偲びて　、五〇
大阪出版社編輯局　活版印刷開業案内　一、〇〇
同　石版印刷開業案内　一、〇〇

大村書店

代表者　大村郡次郎
東京市牛込區矢來町八番地
振替東京四六九七五　電話牛込五一四九

ボンデルパント戸坂潤譯　意志の自由　二、〇〇
國伊能　バルナスの巡禮　二、五〇
ヨハンネス・ワオルケルト金田廉譯　悲劇美の美學　五、五〇
青木昌吉　ゲエテとクライスト　三、二〇
デイルタイ著勝部謙造譯　哲學の本質　二、〇〇
金子大榮　親鸞教の研究　二、〇〇
勝部謙造　新カント學派の教育說　二、八〇
大村郡次郎　ゲーテ全集（第一卷）　非賣
同　同（第十四卷）　非賣

岡田日榮堂

代表者　岡田榮太郎
東京市外西巢鴨町宮仲二六七一番地
振替東京六二九五八　電話小石川三一四九

スタンホード著門馬直衛譯　作曲法　三、〇〇
ヘンダースン著門馬直衛譯　オーケストラ講話　二、五〇
門馬孝吉　シンプリシチーラヂオ　一、二〇
門馬直衛　毎月一回一日發行　樂星　、一〇
個人雜誌

大阪毎日新聞社出版部

大阪市北區堂島
振替大阪四五〇

中川昌雄　實用無線電話の話　一、八〇
サンデー毎日編　水は飲むべし　一、三〇
薄田泣菫　泣菫詩集　五、〇〇
上田正次郎　見たまいのブラヂル　、八〇
枝元長夫編　科學を基礎とした文化生活　二、〇〇
高柳松一郎　英米に於ける勞働者餘暇利用法　、五〇
井上吉次郎　右やひだり　一、五〇
佐田弘治郎編　勞農露國研究叢書　四、二〇
大阪毎日新聞社編　北樺太　二、二〇
同　但馬丹後震災畫報　一、〇〇
大内秀麿　支那傳奇物語　一、七〇
久保田義雄　KKS式毛糸編物圖解（下）　二、〇〇
赤阪東司　常識無線講座　一、〇〇
大阪毎日新聞社編　毎日年鑑（十五年度）　特一、五〇　一、〇〇
文化大學叢書　圓價崩落と爲替對策　、五〇
松山基範　輓近の地震學　三、〇〇
大阪毎日新聞社編　大阪文化史　四、五〇

改造社

代表者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替東京八四〇二　電話高輪四九九三

堀江歸一　續國際經濟と國民經濟　二、五〇
マーシヤル原著大塚金之助譯　マーシヤル經濟學原理（三）　三、五〇
同　同（四）　三、七〇
山口正太郎　中世寺院法と經濟思想　一、五〇
プハリン著富士辰馬横田千元共譯　唯物史觀　三、八〇
孫田秀春　勞働法總論　二、六〇
森戸辰男　青年學徒に訴ふ　二、〇〇

高田保馬　階級及第三史觀　二、八〇
小野武夫　農村研究講話　一、五〇
本庄榮治郎　近世農村問題史論　二、三〇
平野義太郎　法律における階級鬪爭　二、五〇
河田嗣郎　農政四十三講　二、五〇
末弘嚴太郎　法窓閑話　二、五〇
森莊三郎　法制講話　二、五〇
坂内務事務官　三宅司法書記官　共著　普通選擧法要綱　一、六〇
細井和喜藏　女工哀史　二、〇〇
佐藤充　共著　庄司彦六　共著　近代物理學概觀　三、〇〇
トロツキイ原著　茂森唯士譯　文學と革命　二、〇〇
里見弴　文藝管見　一、二〇
石原純　戀愛價値論　一、六〇
親佛文學會編　ゆかり　三、五〇
志賀直哉　改版　壽々　二、五〇
里見弴　改版　直輔の夢　一、五〇

菊池寛　啓吉物語　二、〇〇
トマス・ハーディ著　内多精一譯　薄名のヂユード　三、二〇
泉鏡花　番町夜講　二、〇〇
谷崎潤一郎　痴人の愛　二、〇〇
吉田絃二郎　運命の秋　二、〇〇
志賀直哉　雨蛙　二、五〇
齋藤茂吉　朝の螢　一、五〇
島木赤彥　十年　一、五〇
古泉千樫　川のほとり　一、八〇
中村憲吉　松の芽　一、八〇
釋邊空海　やまのあひだ　一、八〇
木下利玄　立春　一、八〇
與謝野晶子　人間往來　一、八〇
前田夕暮　原生林　一、八〇
土岐善麿　空を仰ぐ　一、八〇
若山牧水　樹木と其の葉　二、〇〇

野口米次郎　坐る人間の評論　二、〇〇
幸田露伴　幽秘記　二、五〇
矢代幸雄　太陽を慕ふ者　一、五〇
細井和喜藏　工場　二、〇〇
芥川龍之介　支那游記　二、〇〇
スティルネル著　辻潤譯　自我經　二、八〇
ウンターマン著　森喜一譯　哲學思想の史的考察　二、〇〇
松本亦太郎　智能心理學　九〇〇
柳澤健　ジヤン・ジョレス　一、五〇
岸田劉生　圖畫教育論　三、五〇
關寛之　學校兒童心理學　二、七〇
三宅大輔　改版　野球　二、八〇
梅澤親光　改版　水泳　二、〇〇

巖松堂　代表者　波多野重太郎
東京市神田區中猿樂町二番地
振替東京六五五六　電話四谷五九四四

蠟山政道　政治學の任務と對象　四、五〇
森田良雄　失業保險論　三、〇〇
藥師寺志光　民事判例研究　四、五〇
霜山精一　親族相續先例類纂　四、五〇
山田幸太郎　大藏省預金部論　二、〇〇
石坂橘樹　農業經濟學綱要　二、五〇
田中德次郎譯　ヒューブナー氏　海上保險　三、〇〇
久禮田益喜　日本刑法總論　五、〇〇
穗積重威　法律小話　二、五〇
荻田才之助　重要貿易の研究　三、〇〇
森丘次郎　ルール　二、〇〇
杉山元治郎　農民組合の理論と實際　一、八〇
寺尾元彥　株式會社資本減少論　二、〇〇
棟尾松治　米國新聞の研究　二、五〇
沼義雄　民法要論（擔保物權）　一、三〇
矢部克己　手形法論　一、四〇

永井亨 新産業政策論 四、五〇
小川市太郎 經濟學史 三、三〇
揚内田祥 薩繁隆共著 古代支那思想の新研究 四、五〇

科學思想普及會

東京市外高田町二二番地

麻生久 無産政黨の理論と實際 、六〇
岡部久四郎 農村新社會政策論 二、八〇
村島歸一 勞働爭議の實際知識 一、二〇

解放社

代表者 山崎今朝彌
東京市芝區新櫻田町十九番地
振替東京三六九四四 電話銀座二〇七七

「解放」復活

外交時報社

代表者 上原好雄
東京市麴町區下二番町六八番地
振替 東京 五一八六八

松原一雄 國際條約集 二、八〇

金星堂

代表者 福岡益雄
東京市神田區今川小路一丁目四番地
振替 東京 三三二八

杉浦翠子 歌集 みどりの眉 一、八〇
米川正夫 勞農露西亞小說集 二、〇〇
武野藤介 表現の研究 一、〇〇
川路柳虹 詩を作る人へ 一、二〇
田山花袋 隨筆集 夜坐 一、八〇
小山内薰 ハーゼンクレエフエル著「決定」「黑死病」 人間 他 、六〇
本田滿津二 ユウヂイン・オネイル著 皇帝ジョーンス 、六〇
趣味の科學叢書 大發明物語 一、七〇
同 世界進化物語 一、七〇
鈴木善太郎譯 リリオム 、八〇
同 痴人の愛 、八〇
同 白鳥 、八〇
荻原井泉水 井泉水句集 一、〇〇
矢島歡一 現代作家辭典 一、〇〇
今東光 痩せた花嫁 一、五〇
田山花袋 流 矢 一、三〇

希望閣

代表者 市川義雄
東京市外代々幡町三〇〇番地
振替 東京 六七五一九

猪俣津南雄 金融資本論 二、六〇
レーニン著 青野季吉譯 帝國主義論 一、二〇
レーニン著 資本主義展開期に於ける農村問題 一、五〇
大木陽一郎譯
稲村隆一 農村問題の現在と將來 、七〇
スコット・ニアリング 角田敬三譯 大資本の制覇 一、八〇
山川均 無産階級政治運動の基調 、四〇
デボーリン 志賀義雄譯 レーニン主義の哲學 一、〇〇

近代社

東京市京橋區南傳馬町三丁目第一相互館
振替 東京 六七九五七

大正十四年度圖書目錄（キ）

古典劇大系 非賣
世界短篇小說集（全十六卷）非賣
童話大系刊行會 世界童話大系 非賣

鄕土研究社

代表者 岡村千秋
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地
振替 東京 二三九一七

弊社の事業の如き營利を主とせざる地味な出版物が稍世間の注目を惹くに至れる事は讀書界の爲に愉快な傾向と思つてゐます。

宮良當壯 沖縄の人形芝居 、八〇
槇本楠郎 吉備郡民謠集 、八〇
寺石正路 土佐風俗と傳說 、八〇
東恩納寬惇 流球人名考 、九〇
佐喜眞興英 シマの話 、八〇
垣田五百次 井上忠彦 口丹波口碑集 、九〇
坪川孝太郎 羽後飛島圖誌 一、〇〇
本山桂川 與那國島圖誌 八〇

佐々木喜善　紫波那昔話　一、〇〇
中道等　津輕舊事談　、八〇
柳田國男　諏訪本地詞章　、八〇

洪洋社

代表者　高梨由太郎
東京市牛込區市谷臺町十番地
振替二一八二四　電話四谷四四六二

建築寫眞類聚刊行會　レストランとカフェー（一）　一、一〇
同　レストランとカフェー（二）　一、一〇
同　表現主義の彫刻　一、一〇
同　停車場建築　一、一〇
同　公衆浴場　一、一〇
同　アメリカ近代住宅　一、一〇
同　店頭裝飾（1）　一、一〇
同　店頭裝飾（2）　一、一〇
同　和蘭近代住宅　一、一〇
同　日本趣味の折衷住宅（1）　一、一〇
同　日本趣味の折衷住宅（2）　一、一〇
高梨由太郎　ハンブルグの智利館　一、〇〇
同　和蘭ヒルヴエルサムの建築　一、〇〇
同　遊泳場と別莊　一、〇〇
同　和蘭の新建築　一、〇〇
同　萬國工藝美術博覽會（1）　一、〇〇
同　萬國工藝美術博覽會（2）　一、〇〇
同　メンデルゾン作品集　一、〇〇
峰彌太郎　現代小學校の建築と設備　三、〇〇
千葉憲雄　木製玩具製作圖集　一、五〇
佐野利器　歐米中央市場圖集　四、三〇
松井清足　東京震災記念事業協會　大正大震災記念建造物競技設計圖集　二、七〇
大藏省營繕管財局　震害及火害の研究　六、〇〇
大熊喜邦　和蘭の新住宅　三、二〇
高梨由太郎　表現文樣集　三、〇〇
田邊泰　表現主義版畫集　一、一〇

田邊泰　鉄格子意匠集　一、一〇
同　絨氈圖案集　一、一〇
同　原始藝術集　一、一〇
大熊喜邦　古鐔圖錄　三、三〇
洪洋社編輯部　アフリカ土人の藝術　一、六〇
同　濠洲及南洋土人藝術　一、五〇

京文社

代表者　鈴木芃
東京市本郷區元町一丁目三番地
振替東京八二二六　電話小石川五九八六

田邊尚雄　音樂概論　三、〇〇
小林愛雄　歌劇の研究　二、三〇
田中敬一　作曲の入門　三、九〇
時高庸紀　童謠名曲の敎へ方　二、七〇
外山國彥作曲　時高庸紀伴奏　新曲童謠　大風小風　、九〇
篠原齒歌作
佐藤謙三　ヴイオリン奏法の研究　三、三〇
田邊尚雄　日本音樂の研究　二、五〇

敎文社

代表者　海老原丑之助
東京市麴町區飯田町四丁目二〇番地
振替東京三三七二四　電話四谷四二一一

小島德彌　明治大正　新文學史觀　四、二〇
小寺菊子　美くしき人生　三、二〇
遠藤隆吉　思想講話　三、八〇
大島正義　新式掌中記入自在六法全書

警醒社書店

代表者　福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
振替東京五五三　電話銀座一五八七・一六九九

兼れて外遊中の賀川豐彥氏を迎へ、その個人雜誌『雲の柱』に新彩を加へ、發行部數月次增加す。
基督敎界の權威十三氏の分擔執筆にかゝる『對註聖書』は出版直後震災に逢ふたが其後二ヶ年を經て漸く改版成り、十二月迄に豫約申込者に限り特價四圓五十錢にて提供せり。
朝鮮思想界の新人たる柳一宣氏の日本語著作『朝の生命に燃えて』は天皇、后皇兩陛下の天覽、攝政殿下に后殿下の臺覽を賜ふ。

木村德藏　兩性問題と生物學　五、五〇
山本一清　宇宙開拓史講話　二、〇〇
松村介石　新宇敎　二、二〇
道族泰誠　ラゴラの出家　一、八〇
村田勤　我子の思ひ出　二、五〇
柳一宣　朝の生命に燃えて　二、〇〇
逢坂信悉　暗黑より光明へ　二、三〇
植村正久　信仰の友　一、〇〇
武本喜代藏　戸外に叩く主　一、五〇
谷口茂壽　創世記及馬太傳正解　二、五〇
八卷穎男譯　三人の伴侶の著はせる聖フランチェスコ傳　一、五〇
高垣勤次郎譯　バウロ傳　三、五〇
柏井園譯　ニコル・基督傳　二、五〇
柏井園　ヨハネ傳研究　二、八〇
山田寅之助　耶蘇傳　二、五〇
吉田源治郎譯　宗敎科學より見た基督敎　一、九〇

鑓田研一譯　ユウセビウス信仰史（前篇）　二、八〇
谷津直秀　母の愛・動物の母と人の母　一、八〇
賀川豐彦　神との對座　一、二〇
內村鑑三　ガリラヤの道　二、五〇
小北寅之助　甦らんとする歐米　一、五〇
野々村戒三　バウロ研究　二、〇〇
田中義一　試煉の坩堝　二、五〇

敬文館　代表者　樫村喜久太郎
東京市神田區小川町四十一番地
振替東京一二三三六　電話大手六五九六

鈴木芳公　久保田俊藏　中等學校リーダ講義　各　一、五〇
栗津清達　英文手紙の研究　一、三〇
間崎勝義　受驗英文法　一、八〇
鈴木芳松　受驗生の英文和譯　一、二〇
鈴木芳松　新聞英語の讀み方　一、五〇
天野一之丞　平面幾何の講義（上卷）　特三、五〇　三、〇〇

中等英語研究會　敎科書連絡　中學新英文法　一、〇〇
藤野了祐　代數學解き方の構義　一、八〇
眞邊仙一　手によりて解義せる代數學　二、八〇
小山寅　學生參考　化學の講義　二、〇〇
佐野春雄　國語の解き方の講義　一、六〇
中里左右太　物理學計算問題の解き方　一、八〇
上杉愼吉　普通選擧の精神　一、〇〇
堀七藏　科學常識　電氣の威力　二、八〇
川島清治郎　日本一戰論　一、八〇
橫尾誠治　小學文庫　物語讀本（四年）　、七〇
高木敏雄　お伽文庫（第八編）新日本敎育昔噺　一、二〇
同　お伽文庫（第九編）日本家庭昔噺　一、二〇
高木敏雄　お伽文庫（第十二編）日本國民傳說　一、二〇
小笠原省三　オーガン獨奏名曲集　二、〇〇
小川一朗編　小ゼラール將軍說　一、五〇
吉田三男也　日本史園　一、五〇
吉田三男也　西洋史園　一、五〇
間崎勝義　和文は斯如く英譯せよ　一、八〇

株式會社建築書院　代表者　今津源右衛門
東京市神田區錦町三丁目二番地
振替東京九四一八　電話神田九二七

杉本文太郎　日本庭造圖面百種及其說明　一五、〇〇
同　自動車工學大成（卷一）　二、八〇
同　自動車工學大成（卷二）　二、五〇
田中豐太郎　建築仕樣全集　上製　四、五〇　並製　三、八〇
同　建築仕樣全集　二、〇〇
原田碧　鐵筋コンクリート速算法　二、五〇
高津博士外三學士監修　電燈及照明　二、五〇
同　變壓器及誘導電動機　二、五〇
同　無線電信電話　一、三〇
同　變壓器　一、三〇
同　誘導電動機　一、三〇

進間佐吉　日本建築仕樣圖解　三、八〇
伊藤虎三　數寄家建築圖案（第一輯）三、五〇
同　新撰欄間圖案百種　四、〇〇
同　新撰建具圖案百種　四、〇〇

健文社

代表者　鮎貝秀三郎
東京市神田區表神保町一番地
振替東京四四八六四　電話大手二九六四

ウエルズ作濱林生之助譯註　幻の園　一、〇〇
ボウ作濱林生之助譯註　黑猫　一、〇〇
ゴールスワージ作濱林生之助譯註　女心　一、〇〇
スチブンスン作濱林生之助譯註　見果てぬ夢　一、〇〇
ジエイコブス作濱林生之助譯註　替玉　一、〇〇
バイロン作幡谷正雄譯註　ションの囚人　、五〇
ホウ作幡谷正雄譯註　赤死病の假面　、五〇
ラム作幡谷正雄譯註　燒豚の起源　、五〇
シング作幡谷正雄譯註　海へ乘り行く者　、五〇

ラム作幡谷正雄譯註　ハムレット　、五〇
永野末治（大正十四年度高校專門校入試問題標準）　徹底せる代數の研究（數學解答と着眼點）　上一、八〇　下二、二〇
同　歌で覺える國文法　一、二〇
千代延尙壽　現代文解釋の要領　一、〇〇
同　宮田峰一　根本的單語の研究　一、二〇
同　榊原彌　英語アクセント句讀法、讀書取方研究　、五〇
同　徹底せる英語の研究　一、八〇
石橋秋水譯　西洋の犯罪物語　、三五
同　珍らしい海棲動物　、三五
同　空中旅行記　、三五
同　西洋の怪談　、三五

玄黃社

（國民文庫刊行會）
代表者　鵜田久作
東京市本郷區西片町一〇番地
振替東京七九九五　電話小石川一三九

ショーペン・ハウエル著増富平藏譯　宇宙及人生　上卷四、五〇　中卷四、〇〇　下卷四、〇〇

ゲーテ著森田草平譯　ウイルマイステル
デイッチンズ著平田禿木譯　ヘルムデエヴイッド・カッパーフイルド
高橋五郎譯　プルタークヘ英雄傳　非賣
ダントン著戸川秋骨譯　エイルホン物語　同
ジョン・ラスキン著栗原古城譯　此の後の者に　一、六〇
同　鶯の巢　二、三〇
忽滑谷快天　禪學思想史　六、五〇

國民圖書株式會社

東京市麹町區內幸町一番地
振替東京五二二九八　電話銀座七八三・二八八

武者小路實篤　現代戲曲全集　非賣
小山內薰　現代戲曲全集　同
久保田萬太郎　同
木下杢太郎　同
秋田雨雀　現代戲曲全集　非賣
仲木貞一　同
藤井眞澄　同
國民圖書會社　日本文學大系（校註）　非賣
同　日本文學史（校註）　非賣

ヘルデル著川合貞一譯　歷史哲學　非賣
和田三造　創作圖案集　同
倉田百三　現代戲曲全集　同
長與善郎　同
谷崎潤一郎　現代戲曲全集　非賣
坪內逍遙　現代戲曲全集　非賣
泰西名著歷史叢書　大英國史　非賣

國際聯盟協會

代表者　大熊眞
東京市芝區芝公園六號地
振替東京五五一八三　電話青山三〇六三

古垣鐵郎　國際聯盟と世界の平和　二、五〇
齋藤良衛　支那國際關係概觀　、八〇
外務省條約局編纂　國際條約集　第一輯　小協商條約　一、三〇
同　第二輯　日本ペルー間通商航海條約　、一二
同　第三輯　日本希臘間修好通商航海條約　、二四
同　第四輯　平和議定書　、六〇

外務省條約局編纂　第五輯　A式委任統治　一、三〇
同　第六輯　英獨通商條約　ワシントン會議諸條約及諸決議　一、二〇
同　第七輯　國際聯盟國際勞働國際司法裁判所　規約　一、二〇
同　平和議定書本文と解說　グレー卿の平和議定書に對する批判　一、五〇
同　阿片會議の解說　一、一〇
同　化學戰　一、三〇
同　國際聯盟協會　聯合會と日本　一、二五
同　國際聯盟の保健事業　一、一〇
同　世界と我等　一、二五
同　世界と我等　一、一〇

紅玉堂　代表者　前田隆一
東京市日本橋區元大工町一番地　振替東京三三一六

植松壽樹　萬葉調短歌集成（一）　二、八〇
中西悟堂　源平盛衰記　一、八五
尾上柴舟　朝ぐもり　二、五〇
樫葉勇　愛國の水　一、八五
波野薫　子供のすきな話　一、八五
尾山篤次郎　短歌五十歌　二、三〇
松原至大　詩集　海の愛　一、八五
相馬御風　良寛和尚歌集　一、八五
宗不旱　柿本人麿歌集　一、八五
松村英一編　現代一萬歌集　二、三〇
石原健生編　芭蕉俳句新釋　二、〇〇
尾山篤二郎　歌集　草籠　二、五〇
牛田良平編　芭蕉俳句全集　一、三五
窪田空穗　歌集　泉のほとり　一、〇〇
服部亮英　もぐらもち　二、〇〇
尾山篤四郎　萬葉集物語　一、八〇
橋田東聲　萬葉女流歌人集　一、八五

波野薫　般若の面　一、八〇
同　童話　おやゆびたらう　一、八五
牛田良平　蕪村俳句全集　一、五〇
尾山篤二郎　歌はこうして作る　一、二〇
堀江弘之　小學校に現れたる勞働問題の扱ひ方　一、六〇
金子光晴譯　近代佛蘭西詩集　一、六〇
小田切浪彦　歌集　しほさゐ　一、八〇
勝峰晋風編　芭蕉一葉集　三、九〇
今日楓溪　歌集　あかね　二、二〇
植松壽樹　歌集　庭燎　二、三〇

古今書院　代表者　橋本福松
東京市外西大久保四五九番地　振替東京三五三四〇

萬葉集叢書　萬葉集管見　三、二〇
土屋文明　歌集　ふゆくさ　二、三〇
齋藤清衛　國文學の序說　三、二〇
關根秀雄　佛蘭西文學史　四、二〇
關根正直　服制の研究　二、二〇
岸本豊流　萬葉集攻證（第三卷下）　二、二〇
岸本豊流　萬葉集攻證（第四卷）　三、二〇
岸本豊流　萬葉集攻證（第五卷）　二、四〇
神田茂　宇宙研究　新天文學概論　一、五〇
丸毛信勝　日本產昆虫類　科の檢索表　二、〇〇

廣文堂　代表者　大倉廣三郎
東京市京橋區南槇町一八番地　振替東京四六八四　電話銀座六五五五

蘆田正喜　藝術鑑賞論　二、三〇
長竿愼　算術標準問題詳解　一、八〇
伊藤隼　體育的生理學　二、八〇
佐藤直丸　小さい哲學概論　一、八〇
前田喜代治　精神分析學　一、二〇
關寛之　兒童心理學　二、八〇

淺野誠　初學年兒童の教育と其取扱法　二、八〇
山本義夫　團體心理學　一、二〇
河野清丸　ヘーベルリンの批判的教育思想　二、八〇
大瀨甚太郎　教育的心理學　五、八〇
森本厚吉　話方の經濟　一、七〇
中島宗治　代數學標準問題及び解答　一、三〇
石原吉磨　家事の科學的革新　二、五〇
三澤隆茂　少年少女智慧競べ魔法理科　一、二〇
村島靖雄　小さい西洋史　一、八〇
神谷辰三郎　小さい生物學　一、八〇
栗原基　趣味の英語　一、五〇
柏谷眞洋　趣味の獨逸語　二、五〇
關口定伸　飛行機のお話　一、二〇
出雲路尊　宗教教育の眞諦　一、八〇
井上哲次郎　我國體と國民道德　三、八〇
三浦喜久雄　體育即生活論　二、八〇

弘學館

代表者　江藤邦松
東京市神田區中猿樂町七番地
振替東京二三〇　電話四谷五〇七七

秋元喜久雄　獨逸語初步講話　二、八〇
東健而　茶目子の日記　一、五〇
吉田潔　ユースオヴライフ　全譯講義　一、六〇
藤崎俊茂　日本文化史概觀　二、八〇
佐々木邦　珍太郎日記　二、五〇
佐々木邦　いたづら小僧おてんば娘日記　二、〇〇
永良郡事　國史學習指導原論　二、五〇
牧野元次郎　致富要訣　貯金第一　一、二〇

厚生閣

代表者　岡本正一
東京市芝區八幡町二十五番地
振替東京五九六〇〇

佐藤定吉　死に直面せる體驗　二、五〇
伊藤宗輔譯　食前の感謝　一、〇〇

田中龜之助譯　日々の聖訓　一、五〇
佐藤定吉　科學より觀たる人生問題　二、〇〇
W・Y・イング著　田中龜之助譯　神秘と奉仕の宗教　一、六〇
佐藤定吉監修　雜誌　宗教と科學　、五〇
サンダーシング著　金井爲一郎譯　實在と宗教　一、二〇
長竿慎　算術基本問題練習書　一、〇〇
エセルホーム女史著　青柳善吾譯　國語として觀たる音樂　一、四〇
千葉春雄　私の國語教育帳（下卷）　五、〇〇
黑木福松　地理の基礎とせる世界主要博物詳說　三、八〇
小瀨峰洋　學校舞踏三十四講　二、〇〇
關衛　藝術教育思想史　三、八〇
岡延右衛門　立憲政治の實體と其運用　一、八〇
津村宏一編　外貨幣換算表　三、五〇
池田藤四郎　模範商店小賣物語　二、〇〇
菱沼勇譯　ロビンソン財政學　二、八〇
小澤省吾　電氣機械試驗法交流機　四、八〇
小澤省吾　同　直流機　三、四〇
岡延右衛門　創作　愛に生きる人々　一、五〇
東京市編纂　東京の史蹟　二、三〇
增田抱村　兒童文化史十二講　三、〇〇
黑木福松　世界主要博物詳說　三、八〇

弘文社

代表者　米林保吉
東京市日本橋區下槇町十二番地
振替東京三七六九

黑田鵬心　藝術概論　一、八〇
一氏義良　近代藝術十六講　二、八〇
下川凹天　漫畫人物描法　一、五〇
吉岡鳥平　漫畫スケッチの描き方　一、八〇
鶴田吾郎　油繪水彩畫素描の描き方　一、七〇
藤井眞澄　戲曲の創作と構想　二、〇〇
仲木貞一　映畫脚本の作り方　一、五〇
石川啄木　啄木詩集　一、〇〇

金田一京助 大原外光 啄木の思想と生涯 一、五〇
佐々木邦 諧謔小說 新夫婦日記 二、〇〇
同 ぐうたら道中記 一、八〇
仲宗根源和 勞農露西亞新教育の研究 二、〇〇
三浦遊雄 自傳小說 行詰れる男 二、二〇
同 二十四の腦隨 二、八〇
井東憲 人間の巢 二、二〇

弘文堂

代表者 八坂淺次郎
京都市丸太町寺町
振替大阪一七〇五 電話上二〇〇九

神田正雄 租稅研究 三、〇〇
米川博 民法に於ける特種問題の研究 五、〇〇
山田正三 判例批判 民事訴訟法 二、五〇
河上肇 マルクス資本論略解 一、三〇
跡部定次郎 國際私法論 二、八〇
波多野鼎（メエーデンホルスト） 社會政策（總論） 二、〇〇
戸田海市 工業經濟論 五、五〇
山下英夫（レヴキンスキー）譯 經濟學の建設者 二、二〇
鳥賀陽然良 商法要論 二、〇〇
矢野仁一 近代蒙古史研究 四、五〇
西島彌太郎（レオン・ドユギー） 私法變遷論 二、〇〇

株式會社 三省堂

東京市麹町區大手町一丁目一番地
振替東京三一五五五 電話牛込 五三三五・五三三六 六五二一・七二六三

金澤庄三郎 廣辭林 四、八〇
三省堂編纂 ジエム英和和英辭典 二、八〇
三省堂編 最新中等圖書教科書（卷一、二、三） 七〇 八一
三省堂編 新世紀日本地圖（大正十五年版） 一、五三
三省堂編 最近物理學（上）（下） 七八 四五
松井間治 女子新讀本（卷一—一〇） 非賣
林博太郎 女子修身教科書（卷一—五） 二四 二五
三省堂編 最近改訂 學生の生理衛生 一、二〇
三省堂編 最近日本地圖 八二
三省堂編 女學校用 西洋歷史教科書 六七
松井簡治編 國文新撰 近世名著抄 三六
三省堂編 最近小學世界地圖 三〇
桑木或雄 改訂版 物理學教科書（上）（下） 六八 六〇
三省堂編 最近化學（上）（下） 六五 四五
三省堂編 學生の日本地理 一、三〇
三省堂編 學生の日本歷史 一、三〇
三省堂編 學生の化學 一、二〇
三省堂編 最近改訂 學生の西洋歷史 一、三〇
三省堂編 SANSEIDO,S GEN DICTIONARY 二、八〇
三省堂編 A NEW CONCISE GRAMMAR (1.2) 二九 三六
三省堂編 PRINCE ENGLISH READRS (1.2.3.4.5) 自 五四 至 六七

春陽堂

代表者 和田利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地
振替東京一六一七 電話大手五一・四三〇

「鏡花全集」（十五卷）の豫約出版發表と「默阿彌全集」「大南北全集」の出版進行中。
創刊以來三十年「新小說」の外「文章往來」（文藝雜誌）十二月中旬を以て創刊の豫定。

尾崎紅葉 不言不語 九〇
田中貢太郎 岡崎巷說 一、四〇
國枝史郎 紅白縮緬組 一、四〇
正木不如丘 詭辯勘辨 二、〇〇
谷崎潤一郎 潤一郎傑作全集（五） 二、五〇
相馬御風 良寛和尚詩歌集 二、六〇
梅田寛（ゲルツエン作）譯 誰の罪 二、四〇
岡本綺堂 綺堂戲曲集（四） 二、四〇
長田幹彥 永遠の謎 二、五〇
石川欣一（ジエン・パリ）譯 マイ・レディー・ニコテイーン 二、〇〇
田山花袋 燈影 一、五〇
菊地寛 我鬼 一、一〇
泉鏡花 照葉狂言 九〇

島崎藤村　處女作集　一、八〇
樋口一葉　十三夜　二、四〇
幸田露伴　白露紅露　二、〇〇
ゴンチャロフ　相馬泰三譯　オブローモフ　一、四〇
夏目漱石　文學評論　三、八〇
ドガデエ　齋藤龍太郎譯　サッフォ　一、〇〇
岡本綺堂　綺堂戲曲集(五)　二、〇〇
直木三十三　心中きらゝ阪　一、八〇
古屋金逸　徒然草要抄詳解　二、五〇
河竹、濱美、濱村　世話狂言傑作集(二)　一、九〇
菊池幽芳　己が罪　三、〇〇
ソロゲーブ　除村吉太郎譯　血の滴　二、〇〇
菊池寛　恩讐の彼方に　一、三〇
菊池寛　忠直卿行狀記　一、七〇
長田幹彦　柳の糸　二、六〇
鈴木泉三郎　お傳地獄　二、五〇
小山内薫　戲曲作法　二、四〇
岡本綺堂　綺堂戲曲集(六)　二、〇〇
小栗風葉　青春　一、四〇
鈴木泉三郎　伊右衛門夫婦　三、八〇
諸大家　版畫禮讃　一、〇〇
鈴木三重吉　黑い沙漠　一、八〇
長塚節　土　二、五〇
長谷川伸　どろんの道　一、九〇
二葉亭四迷　其面影　一、九〇
國木田獨歩　歸去來　二、〇〇
アルツイバアシエフ　原白光譯　人間の波　一、三〇
田山花袋　再び草の野に　一、七〇
菊池寛　菊池寛戲曲全集(三)　二、六〇
齋藤茂吉　あらたま　二、八〇
齋藤茂吉　童馬漫語　二、四〇
岡本綺堂　綺堂戲曲集(七)

三田村鳶魚　鳶魚隨筆　二、七〇
鈴木三重吉　銀の王妃　一、〇〇
ルノルマン　岸田國士譯　落伍者の群　二、二〇
ルナール　岸田國士譯　別れも愉し　一、〇〇
エルヴイユ　岸田國士譯　炬火おくり　三、五〇
ルノルマン　岸田國士譯　時は夢なり　二、五〇
田山花袋　野の花　三、〇〇
岡本綺堂　三浦老人昔話　二、〇〇
小酒井不木　近代犯罪研究　三、〇〇
齋藤緑雨　油地獄　一、九〇
近松秋江　戀から愛へ　一、五〇
荻原井泉水　一茶發句集　二、〇〇
荻原井泉水　おらが春　二、三〇
長田幹彦　埋れ木　二、三〇
河竹、濱美、濱村　世話狂言傑作集(三)　二、七〇
尾崎久彌　江戸軟派雜考　二、〇〇
田中幸一　小供と母　二、六〇
中村憲吉　林泉集　二、二〇
鈴木三重吉　馬鹿の小猿　一、〇〇
永井荷風　荷風全集(五)　三、五〇
紅葉、露伴　西鶴文粹　二、五〇
河竹、濱美、濱村　世話狂言傑作集(五)　三、〇〇
正木不如丘　特志解剖　二、〇〇
千葉龜雄　仇討五十種　二、〇〇
河竹、濱美、濱村　世話狂言傑作集(四)　三、〇〇
德田秋聲　彼の女と少年　一、九〇
吉田絃二郎　草路　一、五〇
江戸川亂歩　心理試驗　二、〇〇
上原敬二　風景雜記　二、三〇
辰野隆　佛蘭西文學の話　二、三〇
島田青峰　青峰集　二、七〇
長田幹彦　幻の塔　二、〇〇

荻原井泉水　看病手記　一、八五
澤田撫松　春宵島原巷譚　一、四〇
番匠谷英一（ストリンドベリー）譯　グスターフヴァザー　二、三〇
鈴木三重吉　黑い小鳥　一、〇〇
長田幹彦　祇園夜話（上）　二、八〇
長田幹彦　不知火　二、八〇
同　呼子鳥　二、六〇
岡本綺堂　綺堂戲曲集（八）　二、四〇
辰野、鈴木譯（ロスタン）　シラノ・ド・ベルジュラック　二、二〇
鈴木三重吉　慾ばり猫　一、〇〇
河竹、渥美、濱村　時代狂言傑作集（一）　三、〇〇
岡野かたる（ミルボオ）譯　小間使日記　二、三〇
菊池寬　受難華　一、五〇
岡本綺堂　綺堂戲曲集（九）　二、四〇
三田村鳶魚　鳶魚劇談　二、八〇
長田幹彦　祇園夜話（下）　二、八〇
菊池幽芳　乳姉妹　二、二〇
鈴木三重吉　七面鳥の踊　一、〇〇
齋藤茂吉　赤光　二、六〇
長田幹彦　白鳥の歌　二、八〇
原白光（アルツイバアシエフ）譯　アルツイバアシエフ戲曲全集　二、四〇
內藤濯（ヴイルドラック）譯　ミシエル・オオクレエル　一、一〇
羽太、澤田　變態性慾論　二、八〇
小川泰一（キユルレル）譯　聖女の裏面　一、一〇
松田青針　良寬　一、五〇
長田幹彦　行く春　二、五〇
里見弴　三人の弟子　一、三〇
古屋金逸　玉勝間要抄詳解　一、四〇
ザイツエフ　遠い國　二、三〇
鈴木三重吉　大法螺　一、〇〇
江間俊雄（ビクトル・ユゴオ）譯　ノートルダムドパリ　二、三〇
正木不如丘　嵐　一、六〇

長田幹彦　雪の夜語り　二、四〇
三宅茂　フランス學派の哲學　五、〇〇
西原柳雨　川柳江戸歌舞伎　三、五〇
大杉榮（ルトルノオ）譯　兩性關係の進化　二、〇〇

春秋社　代表者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地
振替東京二四八六一　電話大手六一八五

內田魯庵　貘の舌　一、二〇
大泉黑石　老子　一、七〇
中村吉藏　錢屋五兵衛父子　一、五〇
內田魯庵　思ひ出す人々　二、八〇
加藤一夫　穴仙人の手記　一、八〇
松崎實　切支丹殉教記　一、八〇
山邊習學　教團の人々　、六〇
デケンシー作　辻潤譯　阿片溺愛者の告白　一、二〇
レイモンド作　加藤朝鳥譯　農民（秋）　二、五〇
レイモンド作　加藤朝鳥譯　農民（冬）　二、八〇
スチブンソン作　古館清太郎譯　寶島　一、八〇
エクトル・マロー作　須藤鐘一譯　家なき少女　二、五〇
アレキサンドレ・デユマ　宮下茂譯　黑いチユウリップ　非賣
木村毅譯　アミエルの日記（前編）　一、五〇
柳田泉譯　同（後編）　一、八〇
ミユンスタベルヒ　渡利彌生譯　新哲學大系　三、八〇
フリードリツヒ・パウルゼン　伊達保美　丸山岩吉譯　彼の生涯とその教說　三、一〇
柳田泉譯　カーライル全集　三、〇〇
神田豐穗編　トルストイ全集　非賣
同　クオレ黑い馬　非賣
島田青峰　一茶選集　一、六〇
同　靜夜俳話　、六〇
橋田東聲　靜夜歌話　、六〇
生田春月　靜夜詩話　、六〇

ハイネ作 生田春月譯 詩の本 二、五〇
荻原井泉水 芭蕉と一茶 一、六〇
神田豐穗 家庭用兒童劇 非賣

至上社

代表者 中川德太郎
東京市小石川區林町三十六番地
振替東京六七八八二

ブラット女史著 古川義治譯 作劇法講話 一、〇〇
ロマン・ローラン作 布施延雄譯 アンネットとシルヴィ 二、五〇
フイリップ作 井上勇譯 貧と母と子 一、八〇
麻生義 文學の創生期 、八〇
小山勝清 農村問題原理 、八〇
新居格 近代心の解剖 二、二〇
小牧近江 プロレタリア文學手引 一、〇〇
生田長江 超近代派宣言 二、八〇
堀口大學譯 聖母の曲藝師 二、〇〇
ハアゼンクレヒエル作 麻生義譯 戯曲集 世の救濟者 二、三〇
辻潤譯 文集 月狂叛逆者 一、八〇
アルツイバアシエフ作 佐野英譯 「獸性」改題 蠻人 一、八〇
チエスタアトン著 武郷達雄譯 バアナアド・ショウ 二、二〇
ハミルトン 古川義治譯 演劇原論 一、七〇

新潮社

代表者 佐藤義亮
東京市牛込區矢來町三番地
振替東京一七四二 電話牛込八〇六—八〇九

小說家協會 日本小說集 二、〇〇
德田秋聲 現代小說選集 非賣
菊池寛 現代小說集 非賣
正宗白鳥 現代小說全集 非賣
里見弴 現代小說全集 非賣
泉鏡花 現代小說全集 非賣
菊池寛 山本修二 近代劇精髓 一、八〇
國木田獨步 獨步病床錄 、七〇
吉田絃二郎 山寒し 一、八〇

中村能二 默示（發禁） 一、五〇
中村能二 默示する人（同上改題） 一、五〇
武者小路實篤 運命と人々 二、〇〇
池谷信三郎 望郷 二、五〇
今野賢三 薄明のもとに 一、五〇
加藤武雄 土を離れて 一、一〇
里見弴 潮 一、八〇
住々木千之 憂鬱なる河 一、八〇
垣稻足穗 鼻眼鏡 、五〇
前田河廣一郎 脅威 、五〇
宇野千代 白い家と罪 、五〇
谷崎潤一郎 神と人との間 二、〇〇
正宗白鳥 人生の幸福 一、二〇
吉田絃二郎 木に凭りて 一、二〇
中村武羅夫 群盲（前編、後編）各二、三〇
加藤武夫 珠を拋つ 二、二〇
國木田獨步 濤聲 、七〇
眞山青果 平將門 一、〇〇
久保田萬太郎 妻子 、八〇
久米正雄 安政小唄 一、五〇
田中純 輪舞 一、七〇
眞山青果 玄朴と長英 一、〇〇
廣津和郎 ひとりの部屋 、八〇
佐々木茂索 夢ほどの話 、五〇
中河與一 午前の殺人 、五〇
島崎藤村 伸び仕度 、五〇
德田秋聲 二つの道 二、二〇
武者小路實篤 人生を斯く考へる 一、〇〇
木村毅 小說研究十六講 二、五〇
四條八十 詩作の傍より 一、五〇
詩話會編 明治大正詩選 二、八〇
深尾須磨子 班猫 、六〇

福田正夫 筑波の白百合 一、〇〇
詩話會編 大正十三年 日本詩集 一、八〇
川路柳虹 はつ戀 一、三〇
童話詩人會 日本童謠集 二、二〇
福田正夫 死の島の美女 一、四〇
北原白秋 白秋詩歌選 、五五
百田宗治 靜かなる時 一、〇〇
荻原朔太郎 純情小曲集 、八〇
沼波瓊音 俳句の作方 、七〇
八木重吉 秋の瞳 、七〇
三木羅風 修道院雜筆 一、二〇
正富汪洋 世界の民衆に 、六〇
高橋邦太郎（ロマン・ロオラン作）譯 狼 、六〇
岩崎純孝（セム・ベネエリ作）譯 翼 、六〇
小牧近江（フイリップ作）譯 小さな町 、六〇
秦豐吉（ストリンベルク作）譯 魂の發展史 二、二〇

三井光彌（ヘルマン・ヘッセ）譯 シッタルタ 、六〇
井上勇（アンドレ・ヂッド）譯 田園交響樂 、六〇
關口彌（スキターレッツ）作譯 苦の下を潛つて 、六〇
布施延雄（バルザック）譯 從妹ベット 三、〇〇
金子光春（エミール・ブエルハアレン）譯 ブエルハアレン詩集 一、〇〇
中山啓（クロポトキン）譯述 田園・工場・仕事場 一、二〇
小田切照（フランソワ・ドウ・キュレル）譯 聖女の反面 、六〇
關一雄（ジエリオ・ダンタス）譯 結婚の夜 、六〇
アラン・ボウ 谷崎精二譯 アッシヤア家の沒落 、六〇
シユニツツレル 三井光彌譯 令嬢エルゼ 、六〇
ポオル・モオラン著 堀口大學譯 夜とざす 一、四〇
ヘンリー・デーソロオ作 今井嘉雄譯 森の生活 二、二〇
マアテルリンク 山内義雄譯 モンナ・バンナ 、九〇
ドストエーフスキ 米川正夫譯 カラマゾフの兄弟 二、五〇
久米正雄譯 オセロオ 、九〇

昇曙夢 新ロシヤ美術大觀 一、三〇
同 プロレタリヤ劇と映畫音樂 一、〇〇
木村毅 世界文學の輪郭 、八〇
相田隆太郎 改造新語辭典 一、〇〇
高島素之 社會問題辭典 五、〇〇
高須芳次郎 東洋思想十六講 二、五〇
杉山榮 社會學十二講 二、五〇
アダム・スミス 神永文三郎譯述 富國論 一、二〇
カール・マルクス 石川準十郎譯 マルクス經濟學入門 一、二〇
ベルグソン 北昤吉譯 時間と自由意志 一、二〇
ニイチエ全集（八） 生田長江譯 權力への意志 二、五〇
ロベルト・ミヒエルス 西村二郎譯 政黨心理の研究 一、二〇
スモール著 高島素之譯 社會學思想の人生的價値 一、二〇
マルクス原著 高島素之譯 資本論（第一卷） 八、五〇
文學思想研究會 文學思想研究（二） 二、八〇
伊達俊光 近世歐洲繪畫十二講 三、五〇

佐藤義亮編 大正十五年 新文藝日記 一、〇〇
新生堂 代表者 河本哲夫 東京市神田區北神保町二番地 振替東京六六二七三

ダンテ全集刊行。
佛、獨、米の諸國を通じて未だ一つの纏れる全集譯本なきを我國に於いて中山昌樹氏單獨譯にて本年十月中旬にて全集十卷完成出版。

中山昌樹譯 ダンテ全集 四卷 新生詩集 三、〇〇
同 五卷 饗宴（上） 三、〇〇
同 六卷 同（下） 三、〇〇
同 七卷 俗語論、水陸論 三、〇〇
同 八卷 帝政論、書翰集 三、〇〇
同 九卷 詩聖ダンテ 三、〇〇
同 十卷 神曲の研究 三、〇〇
木村莊八 少年藝術史 ニール河の草 三、〇〇
同 ミケルアンゼロ・ミレエ 三、五〇

木下乙市 純正哲學概論 二、五〇
プラタブ木下乙市譯 愛の宗教 、七〇
山本秀煌 日本基督教史（上） 三、五〇
同 同（下） 四、五〇
サバティエ中山昌樹譯 アシジの聖フランチエスコ 四、〇〇
金子白夢 現代思想六講 、八五
帆足理一郎 死生と宗教 二、四〇

新光社

代表者 仲摩照久
東京市麹町區下二番町三番地
振替東京四三二四〇 電話四谷二六四六

平野學 近世社會思想とその運動 三、〇〇
ラッセル著 察佐吉譯 原子のABC 一、八〇
ソオスタイン・ヴェブレン 猪俣津南雄譯 特權階級論 二、〇〇
中上豊 放送無線電話 一、八〇
飯野哲二 守谷武文 國文新解釋 二、〇〇
池田長之助 工作機械一般 四、〇〇
宮里良保 ニートロダインの原理と作り方 非賣

聚英閣

代表者 後藤誠雄
東京市牛込區横寺町四三番地
振替東京四七八六九 電話牛込四六二

バーネス新明正道譯 社會學と政治理論 二、八〇
廣江源三郎 軍隊社會の研究 二、二〇
高田保馬 階級考 二、五〇
ギユイヨオ井上勇譯 社會學的に見たる藝術 二、五〇
ギユイヨオ井上勇譯 時間觀念の創成 二、〇〇
ベンチイー北野大吉譯 基督教社會學 二、〇〇
隈部征夫 中間階級の研究 二、〇〇
ニコルソン石井靜人譯 收益確保商工經營の基礎 一、八〇
リーポー山田吉彦 變態心理學 三、八〇
谷崎、菊地 傑作選集 二、五〇
他十五人 村のひと月 一、九〇
ツルゲーネフ米川正夫 カヴレリア・ルスチカナ 一、二〇
ヂヨヴアンニ・ヴエルガ佐藤雪夫

荒木左右 戰を求めて 二、三〇
木内打魚 ブラウニング詩集 、九〇
前田鐵之助 ジヤム詩集 一、〇〇
五十里幸太郎 音樂舞踊十五講 二、〇〇
アンナ・シユーウエル櫻本泰二譯 黑馬物語 一、六〇
アンリ・ファブル山根義行譯 昆虫の風習 二、二〇
荻原井泉水 山水巡禮 一、八〇
ゼンチーレ田中治六譯 教育改善の哲理 二、〇〇
石川哲 生活としての學習 二、〇〇
西山唐平 熱帶衛生 六、〇〇
岡部庸三郎 强肺及自療法 一、八〇
中尾文一郎 更生健康法 二、〇〇
ベンネツト星利彦譯 土の藝術を語る 一、六〇
白鳥省吾 或村の近世史 一、八〇
小山勝清 毛糸絹糸編物の心得 一、九〇
園節子 代數幾何三角の基礎 一、七〇
唐牛桃世 本山桂川 南島情趣 一、六〇
野畑江村 參禪漫錄 一、九〇

聚芳閣

代表者 足立欽一
東京市四谷區新宿一丁目五一番地
振替東京五六一四七 電話四谷五一

邦枝完二 劇壇獨步錄 一、七〇
三島才二編 日本名著大系武野燭談 四、五〇
福田正夫 死の子守唄 一、二〇
山田順子 流るゝまゝに 二、〇〇
德田秋聲 叛逆 二、五〇
邦枝完二 立春大吉 二、〇〇
足立欽一 天竺物語 、八〇
映畫劇研究會編 近代映畫劇脚本選集 一、八〇
三太郎 財界浮世風呂 一、〇〇
鈴木善太郎 鸚鵡 一、〇〇

田中王堂 改釋の哲學 二、七〇
白鳥省吾 青春の地へ 一、二〇
十一谷義三郎 青草 一、九〇
狩野鐘太郎 市場工場 、六〇
豊島與志雄 狐火 一、九〇
橋高廣 影繪の國 一、七〇
高梨直郎 傷める花 一、八〇
岡田伊三郎 秋葉大明神 、六〇
柳原燁子 紫の梅 一、七〇
三島才三編 日本戯曲名作大系 非賣
同 日本名著大系 淨土教要集 四、五〇
足立欽一 女人供養 、八〇
橋田東聲 評釋萬葉集傑作集 二、五〇
薄田斬雲 少年世界史ペルシヤ 一、七〇
川路柳虹譯 王と漁浪者 、八〇
イエーツ作 福田正夫譯 陰影と水の上 、八〇

白鳥省吾譯 理想國の處女 、八〇
福田正夫 情熱の翼 一、二〇
江馬修 羊の怒る時 一、七〇
中西伊之助 この罪を見よ 一、三〇
正宗白鳥 人を殺したが 一、五〇
ツルゲーネフ作 黑田辰男譯 處女の戀 、八〇
海外藝術評論叢書 無產者文化論 一、二〇
スピンガーン 遠藤貞吉譯 創造的批評論 一、二〇

清水書店

代表者 葉多野太兵衛
東京市神田區今川小路二丁目四番地
振替東京七四四七 電話四谷一〇・四四八
大阪一六六〇一 七〇七六

專ら舊版の復興と新版の刊行に努力したる大正十三年度の營業方針に對して、大正十四年は之が販賣方に力を傾注し、略所期の効果を擧ぐることを得たり。而して此れが爲めに本年三月十八日より毎月一回『法律經濟時潮』（新聞大四頁乃至八頁）を發行、斯界權威者の論說に配するに小店出版書籍の廣告を以てし、各方面へ無代配布しつつあるが、豫想以上の好評を博し、發行書籍の賣上額も頓に之を增加したり。因みに同紙最近號の印刷部數は五萬五千部。

花村四郎 陪審法通義 二、〇〇
佐々穆 國際私法要義（一） 二、五〇
中島弘道 民法通論 八、五〇
河邊久雄 司法警察職務規範提要 一、八〇
藤本幸太郎 共同海損綱要 二、五〇
中村進午 法制上の女子 二、八〇
石川文吾 生命保險 三、五〇
清水澄 帝國公法大意 五、〇〇
安井英二 勞働協約法論 三、五〇
中村秀雄 山内伴治 書式總攬（第三輯） 三、〇〇
同 同（第五輯） 六、五〇
藤本幸太郎 經濟叢書第四編經濟統計 二、五〇
馬場鍈一 憲法政治の理論と實際 三、〇〇
松岡義正 强制施行要論（下） 四、五〇
尾高武治 あらゆる種類の訴と其裁判（中） 五、五〇
高橋雄豹 警察官の教養 三、〇〇
尾高武治 あらゆる種類の訴と其裁判（下） 五、五〇
河津暹 經濟叢書第五編 經濟史 二、五〇
尾高武治 破產並に和議手續の實際 二、〇〇

四紅社

東京市外池袋九九九番地

山川亮 決鬪 一、八〇
柴田德次郎 頭山翁清話 一、四〇
吉井勇 曉鐘 二、二〇

支那文獻刊行會

東京市赤坂區青山南町六丁目
振替東京五七八二六

鈴木眞海編 瀟湘錄 非賣
同 剪燈新話 非賣
平井提六 情鄉禪 三、〇〇

裳華房

代表者 吉野兵作

東京市麹町區中六番町五四番地
振替東京一〇七 電話四谷八八

箕作新六	理論化學	七、〇〇

松華堂

東京市神田區錦町一丁目

鈴川壽男	民法概論	二、三〇
佐々野章邦	憲法行政法論綱	二、七五
松華堂編	刑事訴訟法總覽	、八五
同	民事訴訟法總覽	、八五
同	模範簡易法律答案	、七〇
市村光惠	憲法精理	二、二五
佐々木貞一郎	聖書地理提要	、六五
松華堂編	民法總則總覽	、八五
同	刑事訴訟法答案	、七五
松華堂編	刑法答案	、七五
同	行政法答案	、七五
同	帝國憲法總覽	、八五
同	行政法總論總覽	、八五
同	受驗案內	一、五〇

而立社

代表者 面家莊佶

東京市青山南町三丁目五五番地
電話青山五七六

村瀨哲人	現代哲學話講	一、八〇
景山哲雄（グオルグ・ウオツペルミン）譯	宗教哲學	三、七〇
松平道夫	理科物語 星の話	一、二〇
同	同 大陽と月	一、二〇
同	同 ラヂオの話	一、二〇
田中九一（ウエルネル・ソンバルト）譯	社會科學大系 奢侈と資本主義	三、五〇
佐野學（ベンジヤミン・キツド）譯	同 社會進化論	四、〇〇
金井經司	經濟學講話	一、八〇

弘田勝太郎	普選運動史及普選の心得	一、九〇
鷲野隼太郎（カール・ディール）譯	リカルド經濟學	三、五〇

實業之日本社

代表者 增田義一

東京市京橋區南紺屋町十二番地
振替東京二三六 電話銀座九九八・一九三四・二二〇三・二二〇四

佐々木吉三郎	青年と人生觀	一、三〇
實業之日本社	成功座右銘	、四〇
谷口雅春	如何にせば運命を支配し得るか	二、〇〇
大川俊一郎	如何にして彼等は富豪となるか	二、〇〇
增田義一	青年出世訓	二、〇〇
實業之日本社	奉鬪活歷 血涙のあと	一、七〇
石川六郎	出世外交術	一、三〇
河瀨蘇北	取引相場の知識	一、五〇
浮田和民 渡邊金三	日米非戰論	一、五〇
森永太一郎	南船北馬	二、〇〇
坪野平太郎	修養隨筆 叱牛錄	二、〇〇
有坂鉛藏	隨筆 象の欠伸	二、〇〇
生方敏郎	諷刺 山椒の粒	二、〇〇
山田耕作	生れ月の神秘	一、五〇
三並健作	新假名遣と常用漢字の字引	二、〇〇
鈴木一意	社交用語の字引	一、七〇
關口定伸	最近 電氣學の講話	二、〇〇
長谷川折夫	新しい發明發見物語	二、〇〇
中村八郎	多產鷄の最新飼養法	一、五〇
大澤昌壽	無病長壽健康增進法	一、八〇
杉本東造	胃腸の新しい衛生	一、五〇
長尾美知	小兒の家庭看護と應急手當	一、六〇
加藤末吉	愛兒の躾けと親のたしなみ	一、五〇
大高千代野	模樣編みと新型スエターの編み方	一、八〇
尾崎芳太郎	新しい和服の裁縫	三、〇〇
尾崎芳太郎	新しい子供服の裁縫	三、〇〇
中村八郎	高等學校專門學校入學準備英語解釋自在	一、五〇

中村八郎　笑ひながら覺えられる中等英文和譯（第五卷）　一、三〇
中村八郎　誰にでも良く解る算術の解き方　、六〇
熊田葦城　青年美談　一、五〇
北垣恭次郎　讀國史美談（後編）　一、八〇
加藤末吉　その日〳〵の物語（上中下卷）各二、五〇
白秋、雨情、八十共選　日本童謠選集　一、五〇
齒、
森口多里　農民童話集黃金の馬　一、〇〇
澁澤青果　兒童劇十八篇　一、二〇

實業之世界社

代表者　野依秀一
東京市芝區櫻田佛前町七番地
振替東京三四三三　電話銀座四七七〇

荒畑寒村譯述　受難のロシヤ　二、五〇
堺利彦　勞農ロシヤの資源及貿易　二、五〇
上田茂樹　佛敵　、八〇
伊藤康善
野依秀一　庄松と秀一の信仰　、八五
三宅雄二郎著
青柳有美解說　解說宇宙　三、五〇

事業之日本社

代表者　小竹即一
東京市日本橋區吳服町一番地
振替東京六七〇八八

ゲード著
金井經司譯　最近經濟學說　二、〇〇
鷲野隼太郎　リカルドの地代論　一、二〇
高畠素之　マルクスの餘剩價値說　一、二〇
尾瀨敬止　革命ロシヤの藝術　二、〇〇
飯田政良　女の夢　二、三〇
金井恭二
柳井銑太郎　育兒衛生の手引　一、五〇
安倍浩　クロポトキンの倫理學說　一、二〇
原田政治　中華民國政黨史　、七〇
トロツキー著
西村二郎譯　ロシヤ革命の生活論　、八〇
小竹即一編　菅年訓練　ニースピリット　、八〇

自修社

代表者　土屋昇
東京市牛込區辨天町四七番地
振替東京二八五八二

土屋詮教　日本宗教史　五、五〇

社會教育研究所

代表者　小尾晴敏
東京市麴町區代官町一番地
振替東京一六九七九　電話牛込六一六九

大川周明　『日本精神研究』　、二〇
同　一、橫井小楠の思想及信仰
同　二、佐藤信淵の理想家
同　三、平民の教師石田梅巖
同　四、純情の人平野國臣
同　五、近代日本の創設者織田信長
同　六、劒の人宮本武藏
同　七、上杉鷹山の政道
同　八、戰へる僧上杉謙信
同　九、賴朝の事業及人格
同　十、詩人山上憶良
同　別册　リシヤル告日本國
安岡正篤　『東洋思想研究』

同　政教の根本問題　、二〇
同　王道について
同　漢詩新話
同　鴻爪漫記
同　天子論及官吏論
二荒芳德　若き日本の行くべき道　、三〇
大川周明　道義國家の原理　、〇五
安岡正篤　復興亞細亞の根本精神　、〇五
蒲川龜太郎　大邦建設の理想　、〇五
安岡正篤　日本精神の本質　、〇五
大川周明　國家の經濟的原理　、〇五

成美堂

東京市日本橋區通三丁目

三浦伊八郎　林產製造學概要　五、三〇
木田芳三郎　肥料製造學　六、五〇
桑名伊之吉　農用昆虫學講義　四、五〇

田村剛　造園學概論　三、七〇
高橋堅　動物學綱要　四、八〇

叢文閣　代表者　足助素一

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
振替東京四二八八九　電話牛込二五七三

岡谷辰治（アンリ・ポアンカレ著）譯　輓近の思想　二、三〇
秋田雨雀　骸骨の舞踏　一、六〇
椎名其二（アンリ・ファブル著）譯　昆蟲記（3）　三、〇〇
長谷川如是閑（ピエール・デルベ著）　秋刀魚先生　二、〇〇
平林初之輔譯　科學と實在　四、三〇
鳥居龍藏　人類學上より見たる我が上代の文化（1）　三、八〇
椎名其二（ヂエ・ヴエ・ルグロ著）譯　科學の詩人（アンリ・ファブルの生涯）　三、〇〇
堺利彥（ジャック・ロンドン著）譯　ホワイト・ファング　一、六〇
山川均　無產政黨の研究　一、二〇

崇文堂　代表者　齋藤熊三郎

東京市神田區表神保町三番地

大正十四年內の最大流行は、何と云つてもクロス・ワード・パツルであつた。この流行は實に全世界的のあらゆる文明階級を通じての流行で、所謂八歲から八十歲までの人々を熱狂せしめ、今更の如く圖書館に通つたり、俄かに辭書や參考書を擴げさしたのであつた。日本に輸入紹介されたのは實に本年三月で代表的大新聞社は競つて紙上に紹介した。此の機に小堂に於ては敎本として三種、練習カード三種、及び「クロス・ワードの考へ方と作り方」を發刊して斯道の紹介と普及に努めたのであつた。

本　山桂川　クロス・ワード敎本上級版　、五〇
同　同　家庭版　、五〇
同　同　少年少女版　、五〇
同　同　練習カード（第一輯）　、三〇
同　同　（第二輯）　、三〇
同　同　（第三輯）　、三〇
同　同　クロス・ワード考へ方と作り方　一、〇〇
橋本春陵　誰にも出來る日本畫の描き方　一、八〇

高山貞子　手ほどきから奧儀　裁縫の知識　一、五〇
小泉政治　法律及書式大全　二、〇〇
內藤三雄　露西亞語獨修　三、三〇
藤森政次郎　參考日本歷史　二、二〇
同　參考徒然草解釋　一、五〇
本山桂川　應用速記術の秘訣　一、二〇
同　騰寫版印刷術の秘訣　一、二〇
青木茂男　新譯イソップ物語　一、二〇
同　新譯ロビンソン物語　一、二〇
千草茂　標準お伽（智の卷）、七五
同　同　（仁の卷）、七五
同　同　（勇の卷）、七五

合名會社　芸艸堂　代表者　山田直三郎

京都市寺町二條南十九番戶
振替大阪二五八　電話上二九〇

西澤笛畝　端午玩具集　一八、〇〇

田能村竹田　亦復一樂　七、五〇
狩野秀峰　千代昏　一〇、〇〇
西澤笛畝　虫類百姿（第一輯）六、五〇
同　同　（第二輯）六、五〇
山鹿清華　花小袖　五〇、〇〇
芝田竹崖　池大雅先生薦事余光　八、五〇
小室翠雲　翠雲小品畫集　一、八〇
同　江城餘韻　四、五〇
中村集一　廣重畫集　一二、〇〇
日本南畫院　日本南畫院第四回展覽會圖錄　七、〇〇

第一書房　代表者　長谷川巳之吉

東京市芝區高輪南町六番地
振替東京六四二二三　電話高輪一二九四

日本の出版界は出版者自身の價値及使命を自覺してゐない。出版事業は單に利益を主眼とすべき性質の仕事ではない。それは恰も修道者が神に奉仕するやうな心持と同じく、出版者は其仕事の爲めに奉仕し

なければならない。

ラシイヌ傑作集第一卷　内藤灌譯　ブリタニキユス　一、九〇
フイガナ・マクラゴード短篇集　松村みね子譯　かなしき女王　一、八〇
上田敏遺著　上田敏詩集　三、八〇
ボオル・モオラン長篇　堀口大學譯　レキスとイレエン　一、八〇
ジユル・ロオメン著　堀口大學譯　キネマセナリオセ　科學の奇蹟　一、三〇
堀口大學譯　詩集　月下の一群　四、八〇
日夏耿之介　完本全詩集　豫約非賣
松岡讓　法城を護る人々（中卷）　二、三〇
岸田國士　岸田國士戲曲集　一、六〇
土田杏村　戀愛の諸問題　二、三〇
野口米次郎　芭蕉論　、五〇
野口米次郎　光悅と抱一　、五〇
野口米次郎　松の木の日本　、五〇
野口米次郎　能樂の鑑賞　、五〇
野口米次郎　ホイットマン主義　、五〇
野口米次郎　象表抒情詩　一、八〇
十一月創刊　音樂藝術　、五〇
（日本に始めて出來た高級な音樂雜誌）
大田黑元雄　洋樂夜話　同
歌劇大觀　同
名曲大觀　同
華やかなる回想　同
水の上の音樂　同
西洋音樂入門　同
管絃樂の歷史的研究　同

第一出版協會　代表者　古閑　停

東京市麴町區四番町七番地
振替東京五七〇七三　電話四谷六五一六

大正十四年度は出版界に於てはその暗黑時代とも稱さるべきもので、不況は其の極に達し書籍の贅行惡く、爲に各書肆、出版社は新刊物の發售を見合せたるもの多し。この時に當り本會は獨り時流を超して着々と好き書の刊行を試みた。本會の趣旨は時代に應じた教育を主服とする兒童讀物の刊行にあるから出版物も大部分子供の讀物であるが本年に入り文藝物として宮原氏譯運命の舟（タゴール原著）を出した所非常な好評である。近頃出版界の驚異と目される本會發行の文學副讀本は全國小學校より多大の喝采を博し、註文殺到、重版四十版に及んだ。本會の兒童書類に就いては世すでに定評があるが、小野氏編少年の頃、前田氏著森の梟は共に若溪會の推薦する所となり、宮原氏の惡魔の尾、宇野氏の天と地の出來事は過日、日比谷圖書館主催の良書推選に加へられてゐる。其他最新刊、江口氏のかみなりの子、童話界の新人たる須藤和彥氏のもの、其他も引續き好評白熱的の歡迎をうけてゐる。

小野、田上　白鳥共編　文學副讀本（各一册）　、四〇
カナオトギ叢書第一編　不平廣惠編　カタカナオトギ　、九五
同第二編　下平廣惠　ひらがなおとぎ　、九五
同第三編　古閑八洲子　カナイソップ　、九五

同第四編　カナグリム　、九五
古閑八洲子　カナアンデルセン　、九五
同井上英夫編　カナアラビヤンナイト　、九五
同梶原千六編　カナロビンソン　、九五
大森來編　カナガリバー　、九五
同須藤和彥編　カタカナモノガタリ　、九五
同須藤第九編　ひらがなものがたり　、九五
同須藤第十編　惡魔の尾　一、六〇
第一童話叢書編　宮原晃一郎
同宇野浩二編　天と地の出來事　一、六〇
同第三編　森の梟　一、六〇
前田晃編　かみなりの子　一、六〇
江口渙編　第四　ポケツト童話叢書（1）　竹取物語　、五〇
須藤和彥　同小島德彌（2）　あゝ無情　、五〇
同上脇進（3）　西遊記　、五〇

同光田（4）潤　青い鳥　一、五〇
同大原善二郎（5）　八犬傳　一、五〇
少年少女文學叢書（1）　小野誠悟編　少年の頃　一、九五
同小野誠悟編（2）　少年の頃　一、九五
タゴール原作　宮原晃一郎譯　運命の舟　二、八〇

太陽堂

代表者　照井健伍
東京市神田區南神保町九番地
振替東京三一七二五　電話四谷五七九四

三浦藤作　倫理學說精義　三、八〇
柵山茂三郎　色素化學汎論　三、〇〇
村瀨武比古　政治的認識の基礎　三、二〇
藤崎俊茂　獨逸語自習の根柢　三、五〇
倍賞義雄　教育の基礎としての哲學　二、五〇
大石喬一　根柢となる代數學　一、三〇
佐藤正治　根柢となる英文解釋法　一、七〇

原田梧樓　染料藥品製造法　六、五〇

株式會社　大鑑閣

東京市神田區今川小路一丁目一番地
振替東京三三六一八　電話　四六五八

坂西由藏　經濟生活の歷史的考察　二、八〇
赤松（ヴ井ルブラント著）要譯　カール・マルクス研究　二、〇〇
藤澤衛彥　日本傳說研究（第二卷）　二、五〇
碧瑠璃園　物語日本史　二、二〇
同　木下藤吉郎　一、七〇
同　乃木將軍と其夫人　一、七〇
白柳秀湖　社會講談選集　二、七〇
松村定次郎　代數準備の虎の卷　一、八〇

大雄閣

東京市小石川區關口臺町五番地
振替東京六六九二九　電話牛込七八・六六〇

逸見梅榮　佛陀伽耶　非賣

藤秀璟曲　戲阿闍世王　二、〇〇
景山哲雄（ショペンハウエル）譯　天然の意志　二、〇〇
印度文藝叢書　二つの指環　一、八〇
山宮允　詩論集　詩岳に登る　二、〇〇

大日本圖書會社

東京市京橋區銀座一ノ二二番地
振替東京一一九　電話銀座五一一三

五十嵐力　改訂高等女子新作文參考書　非賣
上田萬年（國文抄本）　徒然草　一、三一
龍山義亮　教育學要領　一、五四
上田萬年（國文抄本）　東西遊記　一、二七
同（國文抄本）　大平記　一、三〇
同　平家物語　一、三二
齋藤斐章　女子東洋史　一、八七
大日本圖書編　世界名畫集　非賣
同　最新家事教科書　上一、一七　下一、二二

齋藤斐章　女子西洋史　一、〇九
野村宗朔　新選女子手習帖　一、四三

大日本雄辯會

代表者　野間清治
東京市本郷區駒込坂下町四八番地
振替東京三九三〇　電話小石川二二五

沖野岩三郎　悲みの極み　二、五〇
寺本清一（受驗準備）　算術自修書　一、二〇
松村松年　進化と思想　三、〇〇
宮尾しげを（武者修業）　團子串助漫遊記　一、三〇
田山花袋　花袋行脚　二、三〇
中村武羅夫　夜の潮　二、七〇
大日本雄辯會編　模範的式辭挨拶五分間演說集　二、八〇
同　尾崎行雄氏大演說集　二、〇〇
中村武羅夫　女人群像　二、五〇
宮崎一雨　空中征服　二、二〇
村上浪六　浪六名作集　二、三〇

大同館

代表者　阪本眞三
東京市神田區表神保町七番地
振替東京八七二

大井余平　算術教授資料　根本的の研究　三、八〇
鵠田惠吉　尋常小學修身書例話原據の研究　二、〇〇
中澤美治　活動寫眞と教育　二、〇〇
栗山周一　富山正義　文化史的　高等國史教授要訣　五、八〇
森山右一　和歌俳句自習讀本　二、〇〇
守屋貫秀　山口友吉　少年國史辭典　二、〇〇
甲斐一二　修身教育　重要學說辭典　三、六〇
市川一郎　哲學概論　四、八〇
高橋敎視　西洋哲學史講義　三、八〇
栗原寅治郎　大日本國勢地理　三、八〇
龍澤良芳　文檢受驗用　左傳遷釋　三、八〇
石川誠篇　現代詩歌新選　二、八〇
古屋利之　現代田園文學新選　二、〇〇
守屋貫秀　奈良島知堂　少年曾我物語　一、八〇
小林榮子　大一鏡話釋　二、五〇
小林博　文檢受驗用　西洋通史（上）　六、八〇
小林博　文檢受驗用　西洋通史（下）　四、八〇
三浦藤作　國民道德要領講義　二、八〇
三浦藤作　敎育大意講義　附敎育史大意　三、〇〇
仲原善忠　日本地理原論及細說　四、八〇
伊東勇太郎　最新英語獨習講義　二、五〇
宮本幸惠　行詰つた　現代の圖畫敎育　二、三〇

中央美術社

代表者　田口鏡次郎
東京市外長崎村
振替東京四七六八二

中川紀元　川端龍子　共編　素描選集　三、〇〇
竹內逸　藝術時代　二、五〇
石井柏亭　ハンシタイン著　濱野修譯　滯歐手記　二、八〇
西藏潛行　二、五〇

竹越與三郎　日本經濟史　非賣
小野賢一郎　陶器を試る人へ　二、三〇
松島宗衛　清朝末路秘史　三、〇〇
石井柏亭　西村貞　共編　畫の科學　三、五〇
黑田重太郎　構圖の研究　三、〇〇
川路柳虹　現代日本美術史　二、三〇
橋本關雪　關雪隨筆　二、五〇

中外新論社

代表者　栗原彥三郎
東京市赤坂區氷川町

栗原彥三郎編　義人全集　一卷演說集（上）　五、〇〇
（下）　四、〇〇
自叙傳書翰集　五、〇〇

中央出版社

代表者　石田彥三郎
東京市本鄉區湯島三組町

西村文則　水平民族史物語　一、七〇
日本童話學院　童話の西洋歷史　二、五〇
大橋清作　ラヂオ全集　二、五〇
村田豊秋　近代哲學大集成　四、八〇
同　現代思想の解剖　三、八〇
清水清　前田正治　代數學解方詳解　一、二〇
同　幾何學解方詳解　一、二〇
遠島欽二　人生の苦惱を脫する力　一、八〇
岡田貞次　いろは引日用辭典　一、四〇
木村三樹　三聖俳句選集　二、五〇
江部鴨村　釋迦一代記　一、八〇
柳井和助　バアカー美學概論　四、二〇
妹尾義郎　隨筆　光を慕ひて　二、三〇
森田秀雄　近松戲曲全集　三、五〇

丁未出版社

代表者　土屋泰次郎
東京市麹町區三丁目四番地
振替東京七八四七　電話四谷五〇三九

安部季雄　花の咲くまで　二、五〇
同　實になるまで　二、五〇
櫻井忠溫　黑煉瓦の家　二、八〇
アンデルセン著　野村吉哉譯　月の物語　一、二〇
野邊地天馬譯　青い蠟燭　一、五〇
栗城精一　米問題と農村　一、五〇

同人社

代表者　大島秀雄

東京市神田區西紅梅町十二番地
振替東京二七〇六五　電話大手五五八五

大原社會問題研究所　パンフレット No. 18（キーンスの貨幣改革論）　、三〇
同　パンフレット No. 19（マルクス剩餘價値學說史第一）　、三〇
同　パンフレット No. 20（同第二）　、三〇
同　パンフレット No. 21（社會批評家としてのアプトンシンクレヤ）　、三〇
同　パンフレット No. 22（マルクス剩餘價値學說史第三）　、三〇

大原社會問題研究所　大原奬農會　農學研究（第七卷）　一、〇〇
大原社會問題研究所　大原社會問題研究所雜誌（三ノ一）　一、〇〇
大原社會問題研究所　大原社會問題研究所雜誌（三ノ二）　四、八〇
シドニ並にビアトリスウエッブ　山村喬譯　消費組合運動　三、五〇
ヴオルネル・ゾムバルト　林要譯　社會主義及社會運動　二、〇〇
ポツター　久留間鮫造譯　消費組合發達史論　一、八〇
ミルユーテイン　河西太一郎譯　社會主義と農業問題　一、〇〇
倉數勞働科學研究所　勞働科學研究（三ノ一）　二、〇〇
カウツキイ　河西太一郎譯　農業の社會化　一、二〇
マルクス・エンゲルス　佐野文夫譯　フオイエルバツハ論　二、五〇
森戸辰男　最近ドイツ社會黨史の一齣　一、五〇
井口孝親譯　ローザ・ルクセンブルグの手紙と生涯　二、五〇
大原社會問題研究所　日本社會事業年鑑　三、五〇
シドニ並にビアトリスウエッブ　丸岡堯譯　大英社會主義國の構成　三、五〇

高野岩三郎　社會統計學史研究　一、五〇
倉數勞働科學研究所　勞働科學研究（二ノ二）　、五〇
大原社會問題研究所　アルヒーフ No. 1　、六〇
同　全國社會事業一覽　二、〇〇
大内兵衛　現代イギリスの政治過程　二、五〇
ブハーリン　佐野文夫譯　轉形期經濟學　一、二〇
バウアー　久留間鮫造譯　猶太人問題

同文館

東京市神田區表神保町
振替東京一三五　電話大手五九一九

同文館編　現代思潮大觀　三、五〇
建部遯吉　山内雄太郎　平和問題　二、五〇
那波利貞　燕吳載筆　三、八〇
福島政雄　教育より見たる女性と母性　二、四〇
東京商科大學商學研究所編　商學研究　二、〇〇
姉崎正治　切支丹宗門の迫害と潛伏　三、八〇
勝田貞次　外國爲替相場の變動　一、三〇
増田抱村　兒童の社會問題　一、五〇
堀七藏　兒童の疑問人の身體　一、九〇
建部遯吾　戍申詔書衍義　二、三〇
福田德三　増補改訂現代の商業及商人　一、九〇
小林博　文檢受驗用西洋通史（上）　六、八〇
三田谷啓　増訂改版教授衛生　四、〇〇
佐藤武　算術教授配當毎時實際表　一、九〇
原勝郎　世界大戰史　六、五〇
林良吉譯　會計及貸借對照表　三、〇〇
浦口文治　ジアン・ラスキン　三、二〇
野口雨情　童謠と童心藝術　一、八〇
福田德三　國民經濟講話　九、三五
小野信雄　水力タービン理論構造及設計　五、五〇
竹内恒吉　株式會社設立と清算　二、八〇

株式會社　東京堂　代表者　大野孫平

東京市神田區表神保町三番地
振替東京二七〇　電話話大手六一〇七

金子筑水　藝術の本質　二、八〇
本間久雄（ウィリアム・モリス著）譯　吾等如何に生くべきか　一、八〇
藤井照譯（キュルペ著）　美學原論　二、五〇
河野清丸　兒童教育學概論　二、五〇
島村民藏　戲曲の本質　二、五〇
坪内士行　舞踊及歌劇大觀　三、〇〇

東洋經濟新報社　代表者　石橋湛山

東京市牛込區天神町六番地
振替東京六五一八　電話牛込三三・三四

高橋龜吉　金融の基礎智識　三、〇〇
東洋經濟編纂　日本の金融　二、三〇
同　第二商品年鑑　五、五〇
同　外國貿易56年對照表　並三、〇〇　上三、五〇
同　銀行年鑑　三、〇〇
東洋經濟編纂　株界二十年　一、五〇
同　第三株式會社年鑑　四、八〇
同　第九經濟年鑑　三、五〇
同　相場年鑑　三、〇〇
同　明治大正財政詳覽（十一月末刊行）
高橋龜吉　日本經濟の解剖　（同）

東光閣書店　代表者　内藤加我

東京市小石川區原町十番地
電話小石川六七一六

澤木四方吉（レオナルド・ダヴィンチ）　二、五〇
矢田挿雲　江戸から東京へ　二、五〇
島村民藏　兒童劇踊り熊　二、五〇
弘田龍太郎譯　樂聖ブラームス　一、五〇

東洋圖書會社

東京市神田區表神保町二番地

松濤泰巖　學習心理と學習樣式　二、五〇

三好得惠　自發教育案と其の實現　三、五〇
新井つた　體育としての薙刀　二、三〇
神戸伊三郎　兒童の植物學　一、八〇
同　兒童の昆蟲學　一、八〇
池田小菊　私の教育記錄　二、八〇
神戸伊三郎　兒童の動物學　一、八〇
仲木三二　兒童の數學　一、五〇
上島直之　最新歐米教育の實際　二、八〇
奈良縣教育會　土壤教科書　、一五
同　肥料教科書　、一五
同　穀菽教科書　、一五

南山堂　代表者　鈴木幹太

東京市本郷區龍岡町三四番地

市川、菅沼、小柳共著　新撰眼科學　一二、〇〇
入澤達吉監修　内科學　七、〇〇
藤浪剛一　れんとげん學　一三、〇〇
茂木藏之助　創傷及其療法　三、五〇
吹田順助　獨文トーマスマン　一、〇〇
同　獨文ユーデイット　一、三〇
小池堅治　獨逸國民性の根本構造　一、〇〇
鈴木幹太　正則獨逸語讀本　一、二〇
島田昌三　獨逸醫科讀本　、九〇
白本正博　婦人科學　五、五〇
三浦吉兵衛（獨和對譯）　散文詩　、九〇
佐藤清　病理解剖各論　上二、五〇　下一、八〇

南光社　代表者　加藤知正

東京市神田區表猿樂町二番地
振替東京五七五七　電話大手一六六八

本年度出版物賣行の狀況は概して、小著書よりも大著述がよく賣れた樣に思はれる。これは讀者が眞面目にそして深く研究してゐるのではなからうか。小さい本を一寸讀んで俄か作りの知識では間に合はないと云ふことを立證してはゐないか。
實力の世の中であることを、本の書行きを通して痛

感させられる。

小林房太郎　大日本帝國地理精義上卷五、五〇
小林房太郎　大日本帝國地理精義中卷五、五〇
小林房太郎　大日本帝國地理精義下卷五、五〇
小林房太郎　世界地理精義上卷　七、七〇
小林房太郎　最新地文學精義　六、〇〇
倉林源四郎　理論實驗理化學講話　五、〇〇
石澤吉磨　國定教科書を解説せる小學校家事教材の現代化　二、八〇
加茂學而　深みの國語鑑賞の心境　一、五〇
堂東傳　自然科學の發達と現代理科教育　一、二〇
丸山林平　國語教育と兒童文學　二、〇〇
內外教育資料調査會　大正十五年版教材年鑑　二、二〇
佐藤隆德　學校經營を中心としたる教育の科學的研究　二、三〇
內外教育資料調査會　趣味の地理教材集成　三、〇〇
內外教育資料調査會　趣味の國史教材集成　二、七〇
野中、河野、塚本、池內合著　各科學習指導案と其實際　三、〇〇
稻森、神戸　教育運動の新傾向　一、五〇
龍山義亮　魂の緩方指導と其系統案　一、六〇
鈴木頓雄　深化

內外出版會社

京都市下京區西洞院

東普太郎　經濟學原理　三、二〇
立川德治　明治工業史　八、〇〇
鈴木大拙　百醜千拙　一、八〇
田崎仁義　支那古代經濟思想及制度　七、〇〇
本庄榮治郎　常平倉の研究　一、五〇
米田庄太郎　ヴインデルバントの歷史哲學　二、四〇
土田杏村　社會學原論　四、六〇
土田杏村　藝術美の本質と教育　二、八〇

南郊社

代表者　小池則之

東京市牛込區矢來町四番地
振替東京二六三七〇　電話牛込一〇五五

松永魏　植物生物學　三、〇〇
森田吉太郎　普通選擧法釋義　一、二〇
三宅福馬　通信現業論　一、〇〇
高橋正忠　歐米通信叢話　二、〇〇
篠田耕　坂田義夫　電信機の動作と取扱法　三、〇〇

二松堂書店

代表者　宮下軍平

東京市神田區錦町一丁目十六番地
振替東京三四〇九　電話大手二四七八

本年は一般的不景氣にてこれと云ふ特記すべき事件がない樣に思ひます。迫々景氣も回復して來る樣ですから出版界も益々活躍することゝ信じます。

千葉高等園藝學校　草人社　花の作り方　三、五〇
原浩道　治病保健　最新健康法　一、六〇
日本年鑑協會　一九二五年版　文藝年鑑　二、七〇
同　一九二五年版　演劇年鑑　二、二〇
美術年鑑編輯所　一九二五年版　美術年鑑　二、三〇
田中貫太郎　十五より酒飲み習ひて　二、〇〇
長岡康子　大陽崇拜　一、二〇
長尾大學　人間の舞臺　一、七〇
蟠長會　幡隨院長兵衛　二、五〇
石坂橋樹　農村厚生問題　二、八〇
古瀨傳藏　農民より社會へ　二、〇〇
古瀨傳藏　百姓だつて人間だ　二、〇〇
古瀨傳藏　全國小作爭議調停の實際　一、五〇
阪木大五郎　石角春之助　普通選擧法解釋　一、五〇
深澤甲子男　銀行と金融　一、〇〇
樋口麗陽　新らしい銀行利用法　一、五〇
樋口麗陽　新らしい應待の仕方　一、五〇
管隼人　一番くわしい一番解りよい代數學の講義　一、五〇
加藤正澄　一番くわしい一番解りよい自働車の實際知識　三、五〇
里見時太郎　自動車運轉手と成る手引　一、五〇
秋野榮之助　最近警視廳に於ける自動車運轉手試驗問答集　一、八〇
內藤友明　農家經濟日誌　一、〇〇

井關孝雄　米國農業金融論　二、〇〇
松平道夫　珍らしい面白い科學百話　一、六〇
樋口紅陽　國定教科書にもとづいた小學童話　各、八〇

合資會社日本評論社　代表者　鈴木利貞
東京市本郷區弓町一ノ二五番地
振替東京九六七八　電話小石川一九七一

和田信夫　米國經濟の見方　一、五〇
遠藤麟太郎　銀行の見方　一、五〇
山崎靖純　外國爲替の見方　一、五〇
下田將美　勞働問題の見方　一、五〇
森田久　地方豫算及地方稅の見方　一、五〇
川西正鑑　商品取引の見方（一般商品篇）　一、五〇
清水都代三　商品取引の見方（重要商品篇）　一、五〇
東京朝日新聞經濟部　國際資本戰　二、〇〇
信夫淳平　國際政治の進化及現勢　三、五〇
同　國際政治の綱紀及連鎖　五、五〇

尾崎行雄　政治讀本　一、〇〇
太田正孝　經濟讀本　一、〇〇
大阪朝日經濟部　商賣うらおもて　一、六〇
牧野輝智　爲替問題十講　二、三〇
武內文彬　支那經濟の見方　一、五〇
小汀利得　會社の見方　一、五〇
下村宏　新聞に入りて　二、五〇
北澤新次郎　資本主義經濟と社會主義經濟　二、〇〇
信夫淳平　國際紛爭と國際聯盟　六、〇〇
東京朝日經濟部　經營百態　一、八〇
太田利一　農村社會問題の趨嚮　一、八〇

白揚社　代表者　中村德二郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地
振替東京二五四〇〇　電話大手六三四三―七
（美土代町三六）

長尾美知　乳の子兒の病と其手當　一、八〇

中里介山　人夜話　一、八〇
ブディン著　山川均譯　マルクス學說體系　二、五〇
ウヰザース著　鴻原義勝譯　實踐金融講話　二、〇〇
高橋龜吉　經濟學の實際知識　一、五〇
田川大吉郎　財政上の實際知識　二、〇〇
シンクレヤ著　堺利彥譯　石炭王　二、六〇
蕗谷虹兒　雫の眞珠　一、七〇
スマート著　谷口彌五郎譯　經濟價値論解說　二、〇〇
田所輝明　歐洲社會運動史　二、〇〇
エムベーアー著　西雅雄譯　古代の社會鬪爭　一、八〇
ハインドマン著　山川菊榮譯　階級鬪爭の進化　二、五〇
高橋龜吉　末期の日本資本主義經濟と其轉換　二、五〇
中村茂男　商店會社經營缺陷の見方　二、〇〇
田川大吉郎　都市政策汎論　六、五〇
岡成志　國濟關係の知識　二、〇〇
中里介山　吉田松陰　一、六〇

横井春野　一日二日名勝探りの旅　二、三〇
永井柳太郎　世界政策十講　二、〇〇
杉田直樹　神經質兒童の躾け方　二、〇〇
横井春野　日本登山案內　二、八〇
高峰博　性と神經衰弱　二、〇〇
横田千元譯（フーゴー・ド・フリース）　生物突變說　三、八〇
高橋貞樹　世界の資本主義戰　二、三〇
石川三四郎　非進化論と人生　二、五〇
ロゾヴスキイ著　堺利彥譯　國際勞働組合運動　一、六〇
ウエルス著　秋庭俊彥譯　世界文化史講話　三、五〇
青野季吉　無產政黨と社會運動　二、〇〇
エムベーアー著　西雅雄譯　中世の社會思想　一、八〇
ウンターマン著　山川均譯　マルクス經濟學　二、〇〇

白眉出版社　代表者　岸本福太郎
東京市外下目黑四八番地

白眉出版部編　音樂美學　一、三〇

白眉出版部編　音樂形式各論　一、八〇
小泉治　グリーグとその音樂　一、五〇

博文館

代表者　大橋新太郎
東京市小石川區戸崎町四六番地
振替東京二四〇　電話小石川七四三一

帆足理一郎　宗教哲學概論　五、八〇
目黒辰美　最新養鯉法　一、六〇
田山花袋　旅の話　一、五〇
笹川臨風　趣味の旅　古跡めぐり　一、八〇
童說研究會　アンダアセン童話　一、六〇
同　ガリバー旅行記　一、六〇
同　イソップ童話選　一、六〇
同　千一夜物語　一、六〇
同　グリム童話選　一、六〇
ウヰリアムス著　小酒井不木譯　眞夏の慘劇　一、〇〇
藻岩豐平　一高魂物語　一、六〇
オルチー著　淺野玄府譯　灰色の男　一、〇〇
アラン・ポオ著　吉田兩耳譯　黃金蟲　一、〇〇
ヘルマン・ランドン著　天岡虎雄譯　階下の密室　一、〇〇
杉山共日庵　山縣元師　三、五〇
高橋喜藤　佐藤治武　優等生の綴方（尋常一年—六年生）　各、五五
樗牛全集　美學及美術史　三、二〇
石橋智信　メシア思想を中心としたるイスライル宗教文化史　五、二〇
渡邊得司郎　田園文學　二、〇〇
齋藤隆三　畫題辭典　二、五〇
原田隆　婦人衛生　一、八〇
童話研究　グリム名著選　一、六〇
池田憲司　枇杷栽培法　二、六〇
坪内逍遙　熱海ペーヂェント　、五〇
川田切　砲彈を潛りて　一、二〇
今村次郎編　「關東十人男」「浪華七人男」　、六六
同　宮本武藏後日の仇討　、六八

同　霞のお千代　、六八
同　塙團右門　後藤又兵衛　武勇傳　一、六八
童話研究會　アンダアセン名著選　一、六〇
大佛次郎　鞍馬天狗御用盜異聞　一、八〇
クリスチ女史　延原謙譯　クラブのキング　一、〇〇
ブランドフレミング　大谷健筆譯　歪んだ家　一、〇〇

批評社

代表者　倉松良久
東京府大森町不入斗四七一番地
振替東京四五三四六　電話大森三八一

室伏高信　土に還る　一、六〇
同　文明の沒落（改訂版）　一、八〇
同　女性の創造　一、六〇
同　社會主義批判　二、四〇
同　自由人は暫く語る（改訂版）　二、〇〇

合資會社　富山房

代表者　坂本嘉治馬
東京市神田區通神保町九番地
振替東京五〇一　電話大手六三七〇・七〇一三

吉田熊次　國體と倫理　三、八〇
後藤朝太郎　支那文化の研究　五、五〇
大類伸　西洋中世の文化　四、八〇
ポーランドローズ著　瀨川秀雄譯　歐洲諸國民發達史　五、〇〇
中川謙二郎　婦人の力と帝國の將來　一、七〇
小野鐵二　大日本郡市別　人口密度圖　五、〇〇
小谷部全一郎　成思汗は源義經也　二、八〇
小谷部全一郎　成思汗は源義經也著述の動機と再論　二、五〇
高橋喜太郎　よくわかる幾何の講義　一、五〇
中島孤島編　弓張月物語　三、八〇
中村亮平編　朝鮮童話集　三、八〇
若井信實編　印度童話集　三、八〇
楠山正雄編　サルトカニイソップものがたり　二、〇〇
同　大男と一寸法師　二、〇〇

同　おやゆび姫　二、〇〇
同　源氏と平家　二、〇〇
同　青い鳥　二、〇〇

文化學會出版部　代表者　島中雄三
東京市小石川區小日向臺町二丁目十九番地
振替東京七二八〇

堺利彦　現代社會生活の不安と疑問　一、〇〇
山川均　勞農ロシアの勞働　一、〇〇
赤松克麿　日本勞働運動發達史　一、〇〇
上田茂樹　無產階級の世界史　一、〇〇
安部磯雄　馬島僧　產兒制限の理論と實際　一、〇〇
松下芳男　資本主義と戰爭　一、〇〇
守田有秋　自由戀愛と社會主義
山川菊榮　婦人問題と婦人運動
淺野研眞　インタナショナル發達史
島中雄三譯　社會主義と宗教

堺利彥譯　自由社會の男女關係
同　社會主義の世になつたら
島中雄三譯　社會主義とは何ぞや
小川未明　小川未明選集（第一卷）非賣

文化生活研究會　代表者　福永重勝
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
振替東京五一五五一　電話銀座一五八七

佐野利器　住宅論　二、八〇
古屋芳雄　崇高への道　一、八〇
湯川玄洋　食養春秋　二、五〇
福島東作　スポーツマンの心臟　一、五〇
上田尙　釣の呼吸　二、五〇
上田尙　釣り方圖解（第一集）　一、四〇
上田尙　釣り方圖解（第二集）　一、四〇
上田尙　釣り方圖解（第三集）　一、四〇
穗積重遠　婚姻制度講話　一、五〇

田邊尙雄　レコード名曲解說　二、五〇
石井時彥　小鳥の飼ひ方叢書　カナリヤ　一、五〇
永井潛　醫學と哲學　六、五〇
越智眞逸　夫婦讀本　一、五〇
北村政治郎　無線電話と無線電信　一、五〇
內田清之助　四季樣々の鳥の研究　三、八〇
富本憲吉　窯邊雜記　二、八〇
及部辰之助　小鳥の飼ひ方叢書二編　セキセイインコ　一、五〇
尾佐竹猛　帝國政治明治維新前後に於ける立憲思想前記　四、〇〇

文藝日本社
東京市牛込區餘丁町

メリメエ作　純編　カルメン　一、二〇
田中ソイルド作　サロメ　一、二〇
廣津和郎編　、五〇
井原西鶴　古典叢書　萬の文反古　一、〇〇
戸川貞雄　春畫　一、〇〇
橫光利一　無禮な街　一、〇〇

ハツチンスン作　世界文藝映畫傑作集　冬來りなば　一、二〇
大槻憲二編　思ひ出　一、二〇
フエルスデル著　長田幹彥編　草は蔓る　一、七〇
德田秋聲

文雅堂　代表者　所國松
東京市麴町區飯田町二丁目六八番地

橋本良平　株式會社實務誌　五、五〇
石卷良夫　手形交換所論　四、〇〇
島本得一　再訂增補　北濱と兜町　三、五〇
妹尾一雄　荷爲替業務論　四、〇〇
橫山一郎　改正日本取引論　五、〇〇
利倉文之助　外國爲替裁定と利廻計算　二、五〇

文陽堂　代表者　富田能次
東京市神田區美土代町三丁目一番地
振替東京三三〇七　電話大手七〇八七

數學研究會　算術問題解法　、九〇
同　代數學初步解說　、九〇